Great Mind
旅の記録・旅の記憶

関山 友之

旅先で出会った人々と多くの友人たちに。

目次

第1章 青春の海	
~ 第24回海外研修航海~	1
1.1 陸のない海の景色	1
1.1.1 望星丸二世 1992年2月15日(土)	1
1.1.2 出港 1992年2月16日(日)	1
1.1.3 後部デッキでのんびり 1992年2月17日(月)	2
1.1.4 加山雄三のように 1992年2月18日(火)	2
1.1.5 負けるな 1992年2月19日(水)	3
1.1.6 水平線と天球儀 1992年2月20日(木)	3
1.1.7 船の平日 1992年2月21日(金)	4
1.1.8 スポーツ大会 1992年2月22日(土)	4
1.1.9 もうすぐポンペイ 1992年2月23日(日)	4
1.2 初めての外国 { Pohnpei (Ponape) {	5
1.2.1 上陸 1992年2月24日(月)	5
1.2.2 珊瑚の海とナンマドール 1992年2月25日(火)	6
1.2.3 島を満喫 1992年2月26日(水)	7
1.3 赤道の向こう側	8
1.3.1 ポンペイ出港 1992年2月27日(木)	8
1.3.2 ちょっと休ませて 1992年2月28日(金)	8
1.3.3 赤道祭 1992年2月29日(土)	9
1.3.4 台風発生! 1992年3月1日(日)	9
1.3.5 一言... 1992年3月2日(月)	10
1.3.6 つらいんです 1992年3月3日(火)	10
1.3.7 ギタリスト藪崎 1992年3月4日(水)	10
1.3.8 白塗りのおひな様 1992年3月5日(木)	11
1.3.9 流行りもの 1992年3月6日(金)	11
1.4 WALTZING MATILDA { Brisbane & Gold Coast {	11
1.4.1 お預け 1992年3月7日(土)	11
1.4.2 ブリスベーン市内観光 1992年3月8日(日)	11
1.4.3 クイーンズランド大学 1992年3月9日(月)	13
1.4.4 オーストラリアの動物たち 1992年3月10日(火)	13

1.4.5	異国の中の異国	1992年3月13日(金)	14
1.4.6	クイーンズモール	1992年3月15日(日)	14
1.4.7	一人歩き	1992年3月17日(火)	15
1.4.8	食ったら寝るだけ	1992年3月18日(水)	15
1.4.9	調子が悪い一日	1992年3月19日(木)	15
1.4.10	ギターは楽し	1992年3月20日(金)	16
1.4.11	ビデオ撮影	1992年3月21日(土)	16
1.5	戦争の海、戦争の島 { Rabaul {		16
1.5.1	兵士の海に花束を	1992年3月22日(日)	16
1.5.2	ニューブリテン島	1992年3月23日(月)	17
1.5.3	島の火	1992年3月24日(火)	17
1.5.4	さらばラバウルよ	1992年3月25日(水)	18
1.5.5	洋上卒業式	1992年3月26日(木)	19
1.5.6	第2回洋上スポーツ大会	1992年3月28日(土)	19
1.5.7	気分はTHE ALFEE	1992年3月29日(日)	19
1.6	近づく港と去り行く日々 { Guam & Japan {		19
1.6.1	グアムの短い1日	1992年3月30日(月)	19
1.6.2	推進されてる?	1992年3月31日(火)	20
1.6.3	ブラッディーマリー	1992年4月1日(水)	20
1.6.4	真っ黒け	1992年4月2日(木)	21
1.6.5	二人きりの時間	1992年4月3日(金)	21
1.6.6	いつの間にやら	1992年4月4日(土)	21
1.6.7	さよならパーティー	1992年4月5日(日)	21
1.6.8	私の国	1992年4月6日(月)	21
1.6.9	さくらさくら	1992年4月7日(火)	22
第2章	マレー半島		
	～タイ マレーシア シンガポール～		23
2.1	微笑みの国		23
2.2	ペナンでダウン		25
2.3	世界三大がっかり		26
第3章	ここにはすべてがある		
	～インド～		28
3.1	デリー		28
3.1.1	夜の到着便	1997年2月27日(木)	28
3.1.2	洗礼	1997年2月28日(金)	28
3.1.3	オールドデリーの人々	1997年3月1日(土)	29
3.2	アーグラ		31

3.2.1	タージ・マハル 1997年3月2日(日)	31
3.2.2	I'm Korean. 1997年3月3日(月)	33
3.3	バラナシ	34
3.3.1	ガンガー 1997年3月4日(火)	34
3.3.2	夕暮れのガート 1997年3月5日(水)	34
3.3.3	沈黙 1997年3月6日(木)、7日(金)	35
3.3.4	無力の正露丸 1997年3月8日(土)	35
3.3.5	100ルピー 1997年3月9日(日)	36
3.4	コナーラク	37
3.4.1	脱出 1997年3月10日(月)	37
3.4.2	太陽神スーリヤ 1997年3月11日(火)	38
3.5	カルカッタ	39
3.5.1	サダルストリート 1997年3月12日(水)	39
3.5.2	Hero No.1 1997年3月13日(木)	40
3.5.3	最後までインド 1997年3月14日(金)	41
3.5.4	いつかまた 1997年3月15日(土)	42
第4章 韓国料理に舌鼓		
	～韓国～	43
4.1	仏国寺と石窟庵 { 慶州 {	43
4.1.1	地下鉄で居眠り 1997年12月28日(日)	43
4.1.2	コソップス・トミノル 1997年12月29日(月)	44
4.1.3	古墳のある景色 1997年12月30日(火)	45
4.2	八万大蔵経と板庫 { 海印寺 {	46
4.2.1	八万大蔵経 1997年12月31日(水)	46
4.3	宗廟 { ソウル {	48
4.3.1	あけましておめでとう 1998年1月1日(木)	48
4.3.2	ことごとく閉店 1998年1月2日(金)	49
4.3.3	旅の終り 1998年1月3日(土)	50
第5章 アンコールの笑顔		
	～カンボジア ベトナム～	52
5.1	カンボジア	52
5.1.1	カンボジアは遠いか 1998年4月24日(金)	52
5.1.2	タイ+インド=プノンペン? 1998年4月25日(土)	54
5.1.3	シェムリアップへ行け 1998年4月26日(日)	56
5.1.4	遺跡と笑顔に囲まれて 1998年4月27日(月)	58
5.1.5	Good luck! 1998年4月28日(火)	58
5.2	ベトナム	59

5.2.1	新たなる出会い 1998年4月29日(水)	59
5.2.2	シクロには乗るな 1998年4月30日(木)	61
5.2.3	おいしいご飯が食べたい 1998年5月1日(金)	65
5.2.4	世界遺産のある街 1998年5月2日(土)	66
5.2.5	ベトナムの車窓から 1998年5月3日(日)	68
5.2.6	旅の終り 1998年5月4日(月)	69
5.2.7	思い出とともに 1998年5月5日(火)	70
5.2.8	後日談	71
第6章 太平洋の果て		
	～イースター島～	72
6.1	南へ、そして東へ { 南太平洋 {	72
6.1.1	シンガポール航空 1998年7月18日(土)	72
6.1.2	寒い南国 1998年7月19日(日)	73
6.1.3	フレンチポリネシア 1998年7月19日(日)Part2	75
6.2	モアイと鳥人の島 { ラパヌイ {	78
6.2.1	絶海の孤島 1998年7月20日(月)	78
6.2.2	ラノ・ララク 1998年7月21日(火)	81
6.2.3	Gracias! 1998年7月22日(水)	84
6.2.4	青空のアナケナ 1998年7月23日(木)	86
6.3	南国の楽園 { タヒチ {	89
6.3.1	モーレア島 1998年7月24日(金)	89
6.3.2	O Tahiti e 1998年7月25日(土)	91
6.4	ゆっくり帰ろう { 南太平洋2 {	94
6.4.1	消えた日曜日 1998年7月26日(日)	94
6.4.2	マオリの呪い? 1998年7月27日(月)	94
6.4.3	帰国 1998年7月28日(火)	96
第7章 多様性の中の統一		
	～インドネシア～	97
7.1	プロローグ	97
7.2	首都ジャカルタ	98
7.2.1	ニュースで見た街 1998年12月26日(土)	98
7.2.2	インドネシアらしさ 1998年12月27日(日)	100
7.3	歴史の町ジョグジャカルタ	104
7.3.1	ボロブドゥール 1998年12月28日(月)	104
7.3.2	Kusdiantoro 1998年12月29日(火)	108
7.4	プロモ山経由バリ島行き	113
7.4.1	プロモへのバス 1998年12月30日(水)	113

7.4.2	プロモ登山とバリでの年越	1998年12月31日(木)	114
7.4.3	野宿	1999年1月1日(金)	117
7.5	長い帰り道		121
7.5.1	さようならジョグジャ	1999年1月2日(土)	121
7.5.2	ちょっとだけ市内観光	1999年1月3日(日)	122
7.5.3	帰国	1999年1月4日(月)	123

第1章 青春の海

～ 第24回海外研修航海～

この旅行の後、私は水平線の記憶とともに充実した学生生活を送る。

1.1 陸のない海の景色

1.1.1 望星丸二世 1992年2月15日(土)

今日は朝からあわただしかった。14時30分に三保(静岡県)の研修館に集合だった。アパートを出たのは11時半ごろ。その前に忠実屋へ行ってクリーニングに出してあったスーツを受け取り、こまごまとしたものと一緒にこのノートを買ってきた。そして大学の図書館(中央図書館と11号館と13号館)をかけ巡って、ラバウル関係の資料を探した。しかし見つからなかったので紀伊国屋ブックセンターで旅行ガイドを一冊買い、急いで帰って11時半ごろようやく三保へ向かって出発となった訳である。

余裕があると思っていたが、3分ほど遅刻してしまった。研修館に着くと東海トラベルビューローの説明が始まっていた。よくわからなかった。まあ時間はあるから、おいおい聞くことにしよう。そして落ち着く間もなくみんな急いでバスに乗り、清水港の望星丸二世へと向かった。予備研修の時にも感じたが、荷物を持って入ると船は更に狭く感じる。この狭さで48日間過ごすのだ。頻繁に甲板に出ないと気が変になりそうである。

今日の夕食は多めで、ちょっと苦しかったが全部食べた。ビールも飲んだ。残している人が多かったが、こんな贅沢は今日だけであろう。夕食後はカラオケがセットされたり、ビデオを鑑賞したり、ギターを弾いたり、UNOをやったりしてみんな過ごしていた。明日は6時起床だが、現在23時33分。起きられるだろうか。

明日はいよいよ出港である。これから船酔いが始まる。この狭さにも早く慣れねば。初めて日本を出る日がとうとうやって来る！

1.1.2 出港 1992年2月16日(日)

出港式があり、航海が始まった。船の揺れは凄まじい。酔い止め薬が効いたのか、自分は船酔いしてないし、飯も全部食べている。酔っている人たちは苦しそうである。虚ろな目をして、そこかしこでビニール袋を握りしめて座り込んでいる。驚いたのは、女の人たちがほとんど平気そうだということだ。女性は強くできているらしい。

出港式はビルの中にある多目的ホールで行われたが、外でやった方が良かったと思った。港には両親が見送りに来てくれたが、出港時に知った顔がいるというのはいいものである。天気は快晴で富士山が良く見えた。非常に気分のいい船出であった。紙テープを渡して手に握ったりするのは初めてやったが、なかなか感動的である。それが終わった後にみんなで紙テープをそそくさと片付ける姿は、なんとも急に現実が戻ったようで面白かった。

波のうねりが高く、洗面所の窓から見ていると、波の表情には全く飽きさせない魅力がある。大きく盛り上がったかと思うと、穴が開いたように沈み込んだりする。16時ごろ、まだ陸地は見える。

夕食の後はよく寝て、今22時33分。さすがに字を書いていると少し気持ちが悪くなってきた。この辺でやめておこう。船の揺れは激しい。

1.1.3 後部デッキでのんびり 1992年2月17日(月)

飯がまずい。栄養もかたよっている気がする。これで大丈夫だろうか。船は今日の早朝、八丈島を越えたそうだ。

今日は後部デッキで、航海工学科の練習生の人たちと話をした。むこうは忙しそうで、私たち研修学生の自由時間の多さをとても羨ましがっていた。先に釣り針を付けたロープを船の後ろに結んで魚釣りをしていたが、全然かからなかった。また明日見に行こうと思う。

朝食前にトイレの掃除をしたのだが、誰かの吐いたものが袋に入れていくつも置いてあるのを見た。気持ち悪かった。午後に避難訓練を行い、ライフジャケットの着用法などを教わった。ライフジャケットはポンペイで使うそうだ。また、ポンペイでの水の補給ができなくなったので、節水に協力しようということだ。夕食では食事当番だったが、食器洗いが結構面倒だった。とにかく急いでやったので、あまりきれいに洗えていないと思う。

波は昨日ほど高くはないが、船はよく揺れている。しかし大分みんな慣れてきたようで、食事に出てくる人数も多くなってきた。昼間は太陽が出て、甲板にいるととても気持ちがよかった。鯨を一匹と、大きな貨物船を一隻見た。

やはり下を向いて字を書いていると気分が悪くなってくる。もう寝ることにしよう。現在22時51分。

1.1.4 加山雄三のように 1992年2月18日(火)

暑い。気候が暑いからではなく、夕方6時ごろから9時ごろまでギターで歌い続けたからだ。部屋が狭い上に、男が集まって熱唱すればそりゃあ暑くなるだろう。しかしとても楽しかった。

午前中はほとんど何もしなかった。後部デッキへ行っても魚はかかっていなかったし、高瀬さんや竹倉さんと一緒に甲板で縄跳びをやれば縄は切れるし…。15時から全員で山水譜(何やら難しい歌詞の唄にのせて行かう海洋学部オリジナルの体操)をやった。これから毎朝やるそうだ。

朝と夜、うちの班は食事当番だった。昨日やってもう慣れたが、やはり正直に言うと面倒くさい！だが、今日の夕食は今までで一番良かった。メニューは、ご飯、みそ汁、コロッケ、野沢菜、いわしとタコとキュウリの酢の物であった。ごく普通のメニューに思えるが、今までがひど過ぎたのか、初めて食欲をそそられるメニューだった。また、昼はカレーだったが、あまりうまいとは思わなかった。

天気は曇りで、まだ暑いとは言えない気候である。もうすぐ半袖、短パンで過ごせるようになるだろう。今日は朝から酔い止め薬を飲まなかったが、何とか体調も崩さず過ごすことができた。酔い止め薬はあと4カプセル残っている。しばらくいらないと思う。

自由研修の期間(船に慣れるための期間)が終わり、明日からはいろいろな予定が詰まっている。まず私たち2班は赤道祭についてのことから始める。今日も少しだけ話し合いをした。まだまだ先は長い。

1.1.5 負けるな 1992年2月19日(水)

気持ち悪い。天気は良くないし、風が強くて船が激しく揺れている。今までで一番気持ち悪い。薬は飲んでいない。なるべく後のために取っておきたいので我慢するつもりだ。波の音がすごい。部屋がきしんでいる。これを書くのがつらい。気持ち悪いからもう終わり。

北回帰線を通過したようだ。

1.1.6 水平線と天球儀 1992年2月20日(木)

星がきれいだった。今日の昼間は天気が非常に良く、甲板で体を焼いている人が多かった。夜は星がとてもよく見え、月の出も見た。東の水平線から月が出てくる瞬間はなかなか感動的であった。周りは360°海なので、水平線のところまで星が見える。きれいに水平線で星が切れているのだ。完全な天球である。今まで自分が見た中で、一番鮮やかで美しい星空だ。みんなで甲板に寝転がって空を眺めた。

そして今日から洋上講座と英会話講座が始まった。洋上講座第一回目は荒木船長による大黒屋光太夫の話である。なかなか興味深く、井上靖の本『おろしや国 酔夢譚』を一度読んでみたいと思った。映画化もされているので是非見たい。今後の洋上講座では、船と一緒に乗っている教授陣がいろいろな話をしてくれる予定であり、とても楽しみである。

英会話講座の方は大学のLL英語か、もしくは外国人講師の英会話の授業のようなものである。英会話については、やはり明日から始まる洋上クラブに期待する。しかし自分は、英語をまだほとんど話せない。ESS¹のメンバーだと人に言うのも恥ずかしい。自分を鍛えるつもりで洋上英会話クラブを希望したが、この劣等感はいつ消えるのだろうか。

夜は星を見た後、ビデオで『インディ・ジョーンズ 最後の聖戦』を見た。21時に時計

¹大学の英会話サークルである English Speaking Society (英語会話研究会)。メンバーが100人近くいる大所帯のサークルであり、私は学生時代の最初の2年間だけ所属していた。退会後もこのサークルの友人たちとの付き合いは長い。

を30分進めた。これから少しずつ日本との時差が出てくる。その他に今日やったことは、赤道祭の話し合いと、スポーツ大会のグループ分けをして出場種目を決めること。スポーツ大会では、自分は綱引きと縄跳びに出ることになった。

洗濯物がたまってきた。あまり長く置いておくとカビが生えてこないか心配である。いつになったら洗濯できるのだろう。

1.1.7 船の平日 1992年2月21日(金)

夕飯がうまかった。魚と何かの肉のフライとキャベツの千切りとトマトとたくあんのご飯、そしてお茶であった。今日の洋上講座は「船乗りのかたふり」という題目で、ちょっとした航海や船の知識を得ることができた。そして、午後からは洋上クラブが始まった。自分は英会話クラブで、今日はピエール(先生)の他に自分を入れて5人であった。14時から16時までだったが時間が短く感じられた。なかなか楽しく、次回も楽しみだ。それから、ポンペイへの到着が1日早くなって、24日になるそうだ。まあ、1日ぐらい早く着いても大して変わりはないと思うが。

明日はスポーツ大会だ。我が赤組では応援にも力を入れ、非常に盛り上がっている。とても楽しみだ。やはりこういう行事があると、活気づいていい。夜は赤道祭の話し合いをした。タイム・テーブルや脚本も完成し、こちらの方も熱が入ってきた。成功する様に班員一同、頑張ろう！

今日もまた時計を30分進め、日本との時差は1時間となった。船は南東へ、ポンペイを目指して今日も行く。

1.1.8 スポーツ大会 1992年2月22日(土)

皮膚がヒリヒリする。午前中、1時間半ほど甲板で仰向けに寝転がっていたのだが、スポーツ大会が始まってちょっとすると、太ももからヒリヒリしだした。腕も顔も真っ赤である。午前中は部屋に引っ込んでおけばよかったな。

スポーツ大会はなかなか面白かった。非常に盛り上がり大成功であったと言える。何回も海水を浴びたので、体に塩がいっぱい付いてざらざらしていた。綱引きに出られなかったのが残念だが、まあいいだろう。

夜は遅くまで赤道祭の話し合いで大変である。なんだか自分はあまり参加していないようで、少し申し訳ない。今は0時18分。もちろん30分進めた時刻だ。明日も早いから今日はもう寝よう。赤道祭、頑張ろうぜ！

1.1.9 もうすぐポンペイ 1992年2月23日(日)

まだ皮膚が痛い。今日はほとんど船内にいたのだが、顔と腕と足は真っ赤である。一日中揺れがひどく、ずっと気持ち悪さが付きまとった。

午前中の洋上講座は機関長の話だった。船の仕組みや装置、歴史などの話だったが、「時間がない。」

を連発していて、話したいことを相当省略したらしい。もう少し聞きたかった。その後の英会話はちょっとつらかった。昼は食当で、午後はすぐにポンペイの予備調査の発表があった。担当班の作成した小冊子はとても良いと思った。その後、また赤道祭のことがあったが、途中暇になり、英会話クラブの活動があった。この英会話クラブはとても楽しい。大学での M 先生や LL 英語の授業よりいい。

今日の飯はあまり覚えていないが、昼に出たリンゴはうまかった！また食いたい。夕食の前に副団長の話があった。まあ簡単に言えば大学生としての自覚を持つという様なことだった。こんなところで若い命を落とすのはバカバカしい。気を引き締めて上陸しなければならない。

明日は久しぶりに陸地が見られる。日本との時差は今日進めた分を入れて2時間となった。

1.2 初めての外国 { Pohnpei (Ponape) }

1.2.1 上陸 1992年2月24日(月)

島に上陸した。13時ごろである。これで私も外国人(?)だ。ここミクロネシアのポンペイの港に船が着いたのは9時か10時ごろだったと思う。揺れが止まるまで気分が悪かったのだが、揺れが止まってからさらに気分が悪くなり、頭が痛くなった。しかしそれもすぐ治り、上陸の時は何ともなかった。陸では

「地面が揺れてる。」

と言う人が結構いたが、自分には感じられなかった。頭も非常にクリアである。中には、

「揺れてねーよ。」

と言いながら無意識に体が揺れている人もいて、おかしかった。

上陸してから、ぎゅうぎゅう詰めとても暑い車に乗って20~30分走り、ネット村文化センターと言うところへ行った。花の頭飾りでお出迎え。ちょっとうれしい。そこで島の人たちのダンスを見せてもらったり、何とも奇妙な飲み物(シャカオ)と食べ物をもらったりした。この飲み物、何かの木の皮と実と根っこあたりを石でたたいて絞った、粘りのある飲みものなのだが、一言で表現すると

「木の皮風味の山いも、しびれ付」

といった味なのだ。つまり非常にまずい。

この人を見ていて思ったのだが、彼らは普段はシャツやジーパンを着ていて、あの衣装は特別な時のものらしい。それに、お金を払ってくれるからやる行事で、それ自体はもう過去のものとなっているのではないだろうか。つまり彼らは本当の暮らしを我々に見せたのではない、という気がする。あの木の皮味の飲み物も彼らは好んで飲んでいるのだろうか。疑わしい。非常にひねくれた考えかもしれないが、これが今日、初めての外国で自分が感じた正直な気持ちである。

その村の後、ある店の前まで車に乗り、自由行動となった。服などをいろいろ見てまわっ

たが、あまりポンペイオリジナルのものを見かけなかった。ドーナツがどこでも売っていたので、見かけたものの中でここで作っているのは唯一それだけかもしれない。

自分はお金を日本円しか持ってきていない。今日は銀行へ行けなかったので、Tシャツ1枚と夕食代を^{たいてい}2に立て替えてもらった。申し訳なくて自由に買い物ができない。今日の夕食は港近くのホテルのレストランで、チキンカットレットを食べた。US\$6.50。ファンタオレンジがUS\$1.00だった。久しぶりにうまい！と思ったが、量が多かった。

上陸前にいろいろ注意を聞かされて、とても危険なところだというイメージが頭の中にあったのだが、全然そんなことはなかった。副団長、脅しすぎ。しかし明日からも慎重に行動しようと思う。

1.2.2 珊瑚の海とナンマドール 1992年2月25日(火)

^{サンゴ}珊瑚と魚たちはとてもいい。今日はボートでナンマドール遺跡へ行き、その帰りに小島に寄って休憩をした。そこでゴーグルを借りて覗いた海の中は、言葉に表せないほど美しかった。

ナンマドール遺跡というのは何だかよくわからない。石を積み重ねた城のようなものが造られていて、その一部が残っている。どうしてこのような巨大な遺跡がここにあるのか、ミクロネシア最大の謎だそう。どうやって造ったのかも解明されていないらしい。でも正直に言うと、見てもあまり感動は無かった。

行き来に乗ったモーターボートはとても速く、気持ち良かった。小島では足の裏を切ったが大したことはない。下が珊瑚なので海に裸足では入れず、サンダルをはいたまま入ってもすぐ脱げて困った。確か海に入ったのは高校1年の夏以来だと思う。ボートから飛び込んだりして思いっきりはしゃいだ。日焼けした顔は皮が剥げて凄まじいことになっている。腕はさらに日焼けした。

午後からは自由研修で、また昨日行った辺りへ出かけた。夕食はJOYレストランでビーフステーキを食べた。一緒に頼んだオレンジジュースは日本のと違って、どちらかというパイナップルジュースのような味だった。どれもこれもうまかった。ただ、レストランではウエイトレスが鼻で笑っていて、自分たちがちょっとバカにされている様な気がしてしまった。

そして今日もまた何人かにお金を借りてしまった。どうやらレートが悪く、1ドル135円ぐらいするらしいのだ。でも早くしないと、お金を借りたままなのは良くない。一応、誰にいくら借りたのかは毎日メモしてある。

明日は一日中自由研修だ。赤道祭の日も近づいてきて、緊張感が漂ってきた。

²大澤君。湘南校舎の2年生。躰道部に所属しているので船ではこう呼ばれていた。部で鍛えられているのか、かなり礼儀正しい男。彼のバック転は寄港地の子供たちに大人気であった。後に彼は躰道部の主将となり、部員を引き連れてキャンパス内を走っているのをよく見かけた。

1.2.3 島を満喫 1992年2月26日(水)

非常に充実していて楽しい一日だった。今日は山登りに行き、滝へ行って泳ぎ、夜はカニを食べた。

一番良かったのは山だ。望星丸から見えるあの大きな岩の山、ソーケス・ロックである。タクシーで途中まで行き、険しいところを運転手も一緒に登っていった。あるところまで登ると道はなくなり、しばらく立ち往生した。タクシーの運転手は文化センターに行ったときのタクシーと同じ人だ。彼もここに登るのは初めてだと言う。そして木の根につかまりながら、下手をすれば落ちて死ぬようなところを進んだ。木の根につかまり岩にへばりついて、確かに「怖い」と感じた。

しかし上へ行き着くととても気持ち良く、充実感が素晴らしかった。その上はロッククライミングしないと行けないので無理だ。そこで写真を撮りまくり、少し休んでから下ったが、下りもまた怖かった。汗だくになり、ひざに負担がかかり、腕の日焼けも痛かったが、とても面白かった。

そしてタクシーでJOY レストラン(小さい方)へ行って昼飯を食べ、何という名前だったか忘れたが、滝へ行った。滝自体はそれほど迫力があるとは思わなかったが、泳げたのでよかった。運転手も服を脱ぎ、パンツ一枚になって飛び込んできたりした。汗をかいた後でとても気持ち良く、楽しいひとときだった。

それから街まで行き、そこでタクシーとは別れた。少し歩いて、ナカジ³おすすめの、コーヒーがうまいという日本人のおばさんがやっている店に行った。アイスティーを飲んだが、冷たくてとてもおいしかった。もう一杯飲みたかったが、自分の金ではなく借りているので我慢した。1時間半ほどそこで過ごした後、SPANISH WALL PARK へ行ってのんびりした。

18時に予約しておいたJOY レストランへ行き、ツメの大きなカニを食べた。あれほど大きいのを食べたのは初めてだ。とてもうまかった！ビールも2本飲んだ。高橋君⁴にお願いして、今日も全ての支払いを借りて過ごしてしまった。とても申し訳なくて自分の思うように買い物ができない。ドルを持ってこなかったのは大失敗である。

夕食の時レストランの中はほとんど研修生で埋まっていたのだが、あるテーブルでは酔っ払っている人がいて、まるで宴会場のようになっていた。ウエイトレスと笑ったりしていたが、こっちは恥ずかしかった。あれは日本人としてやめてくれ。ここは日本じゃないんだから。

昨日あまり寝ていなかったので、タクシーの中や店の中では眠くなってしまった。しかし朝から晩まで充実していて、気分が良かった。夕食後、船へ帰るためにレストランで呼んだタクシーは、なんと昼間一緒にすごしたあの運転手だった。白い「M」がついた赤い

³中嶋君。熊本校舎の1年生。2班で1年生は私と彼だけで、よくふざけ合った仲。彼の体についた赤道祭の「悟空」の日焼け跡はしばらく取れず、赤道直下の紫外線の威力を感じさせた。彼とはかなり真面目な話も真剣に話せたが、思えば予備研修のときに最初に話したのも彼であった。彼は後に大学院へ進学した。

⁴清水校舎の2年生。かなり酒好であり、各地でよく一緒に酒を飲んだ。彼はこの航海中に髭を伸ばし、彼の髭が航海の長さを物語ることとなった。中嶋、伊賀の両氏とともに、私たちはふざけた写真をよく撮った。寄港地では各地の酒を嬉しそうに選んでいた姿が印象に残っている。彼は後に日本大学で博士過程まで進学した。

キャップをかぶっている彼だ。彼は自分たちを見て微笑んでいた。

「また会ったな。」

といった感じだった。船の近くにあって目印になる Harbor View Hotel まで行ってくれと頼んだのだが、その運転手はよくわかっているので船の前まで行ってくれた。降りてから 14 人一人一人と握手し、車をキュキュキュキューととばして帰っていった。何かとてもいい気分だった。彼は今日の仕事で随分稼いだんだらうなあ。結局、我々は彼に一日中お世話になったわけだ。

今日でポンペイでの研修は終わり、明日からまた海の上である。ポンペイはいい所だ。楽しかった。

1.3 赤道の向こう側

1.3.1 ポンペイ出港 1992 年 2 月 27 日 (木)

望星丸はポンペイに別れを告げた。12 時に出港し、またしばらく洋上での生活だ。出国手続きはパスポートを出すこともなく終わってしまった。手続きがあったのかどうかもわからない。後部デッキで遠ざかっていく島を見るのは感慨深かった。おそらくもうポンペイに来ることはないだらうな。

さて、もう明後日は赤道祭である。いろいろと物が出来上がってきて気分を盛り立てる。自分はセレモニーの中で、黒子と効果音係をやることになっている。船は揺れるが酔っている暇はない。でも今日はあまり気持ち悪くならない。慣れたようである。

また、班長と生活係（自分は 2 班の生活係）の集まりがあって、これからは学生自らいろいろとやって行こうという話し合いをした。先生方の管理から脱しようということだ。やはり生活は自分たちできちんとして行かなければならず、リーダーもみんな学生でやる方がよい。赤道祭が終わるまで大変だが、頑張ろう。あと少しだ！

1.3.2 ちょっと休ませて 1992 年 2 月 28 日 (金)

眠い。朝起きるのがだんだんつらくなってきた。一日中自由！という日が欲しい。今日の洋上講座の講師は団長であった。内容は水に関する話。海洋学部らしいもので、興味がない訳ではないが眠気が凄まじかった。その後の英会話講座はとても疲れる。なんとも時間が長く感じる。サボっていた奴も多かったし、みんな嫌になっているらしい。自分としては嫌いではないが、クラブの英会話の方が面白い。

今日も洋上クラブの英会話はあったが、こっちの方はつまらないと思ったことはない。それに有用なことがたくさん覚えられる。これはずっと続けていきたいが、残念ながら研修航海の間だけである。できるだけ多くのことを吸収して帰ろうと思っている。

さて、明日はいよいよ赤道祭である。大きな行事だ。みんないろいろと活発に準備を進めている。成功を祈る。頑張ろうぜ！明日は朝から忙しいが、終われば後々良い思い出となることであろう。航海はまだ 4 分の 1 が終わっただけである。楽しい事も苦しい事も、

この先たくさんあると思う。

腕の日焼け跡がすごいことになっている。本当に火傷^{やけど}の状態、ぐちゃぐちゃだ。

1.3.3 赤道祭 1992年2月29日(土)

楽しい一日だった。さすがに赤道直下だけあって、凄まじい暑さだった。赤道祭は大成功だったと思う。班ごとのかくし芸大会はいい企画だった。忙しく走り回ったが、とても充実感があり、時間の過ぎるのが速く感じられた。本番はクロコと裏方をやっていたあまり見ていないので、後でビデオをよく見せてもらおうと思う。赤道直下であるが、クロコの衣装は黒ずくめ。マッキー⁵の黒いTシャツを借り、自分の黒い巾着袋を頭にかぶった。長時間ではなかったが、言うまでも無く暑い！

夜の打ち上げは、これまた盛り上がった。みんなストレスがたまっているのか、凄まじい騒ぎだった。カラオケで盛り上がったが、酒の無くなるのが少し早かったような気がする。しかし丁度良い酔い加減である。赤道祭の担当班ということで後片付けも大変だったが、みんながとても楽しんでいたので嬉しかった。今日はこの研修航海の中でも思い出深い日の一つとなった。

明日、朝起きるのはとてもきつそうだ。しかも朝の食当である。まだまだ航海は長い。明日から気分を新たにして頑張ろうと思う。

赤道通過は今日の早朝、5時ごろだったらしい。

1.3.4 台風発生！ 1992年3月1日(日)

あー、よく寝た。昨日は30分時計を遅らせ、今日はさらに30分遅らせた。これで日本との時差は1時間となった。赤道祭の疲れか、今日はとても眠く、午前中の洋上講座と英会話はつらかった。

洋上講座5回目は、副団長による水の話だった。前回の団長の話は海水の話だったが、今日は真水の話で、水道や井戸水についてのことだった。その後の英会話はこれまたつらかった。ピエール先生の英会話は、クラブの方は面白いのだが、講座の方はつまらない。

ところで、今日は重大な発表があった。台風が近くに発生していて、直撃を避けるために進路を変更するそうだ。よってプリスペインに到着するのは2、3日遅れるということである。そうすると、ホテルには泊まれなくなるかもしれない。残念だ。

これからまた船が揺れる。もう船には慣れたと思っているが、酔うかもしれない。今日の午後は何もなかったので、たっぴりと寝ることができた。久しぶりによく眠った。それから、2班の部屋の床にダンボールを敷き詰め、土足厳禁とした。床に座り込めて、これはなかなか良い。明日はやっと2回目の洗濯ができる予定だ。洗濯物がたくさん溜まっている。

⁵牧野君。湘南校舎の2年生。ロック好きのベーシスト。クールでマイペースだが言いたいことははっきり言う男。船室では私の上のベッドで、横になりながらよく藪崎さんとともに熱く語った。彼は航海中に恋をしたようだった。

1.3.5 一言 … 1992年3月2日(月)

あたま痛え。

1.3.6 つらいんです 1992年3月3日(火)

今日予定されていたひな祭りは延期された。行事が延期になったのは初めてである。

今日も一日中揺れは激しく、気持ち悪さと頭痛に悩まされた。洋上講座は高田先生だったが、ほとんどみんな聞いていなかった。英会話もみんなつらそうで、大して身につけていない。この状況でやってもしょうがないと思う。洋上クラブではホームワークで書いた作文がなかなか良いとピエールに言われた。嬉しかったが、頭痛がしていたのでつらかった。洗濯はまだできず、できるのは明日になってしまった。着るものもなくなってきたので、明日は絶対に洗濯したい。

ところで、腕の日焼け跡がひどいことになっている。一度皮がむけたところに水ぶくれができ、それがやぶけたところから血が出ている。しかも色がまだらで、痛くはないが見た目が気持ち悪い。自分が見て気持ち悪いのだから、他の人が見たらなおさら気持ち悪いだろう。

今日聞いた話によると、台風の影響はあまりなかったらしい。進路を変更しなくても良かったようだ。従って、どうやらオーストラリアにはほぼ予定どおりに着くらしい。予定より少しだけ遅くなるが、一日以上ずれることはないそうである。明日も洋上講座と英会話はつらそうだ。そう言えば朝の食当でもある。んんー頑張ろう!!!

1.3.7 ギタリスト藪崎 1992年3月4日(水)

宇佐美先生⁶のマラソンの話は面白かったが、やはり洋上講座と英会話の時間はつらい。今日はやっと二度目の洗濯ができた。甲板に干すと乾くのが早い。しかし汚れはあまり落ちていなかった。

午後からは特に何もなく、^{やぶさき}藪崎さん⁷のギターを弾いたり、^{たいどう}躰道のトランペットを吹いたりして過ごした。楽器というのはついのめり込んでしまうものだ。とても楽しい。このごろよく思うのだが、夕飯の時間が早すぎる。今日は16時50分ごろだった。食欲がないのに無理に食べている。もっと遅くすることはできないのだろうか。

船は今日も揺れている。頭痛も治らないし、少々吐き気もする。これは陸に上がらないと治らないだろう。さて、明日はひな祭りである。行事があると単調な生活から抜け出せるので、楽しみである。オーストラリアも近いが、航海はまだ半分も終わっていない。長いぜ!

⁶体育学部の教授であり、元オリンピック選手。テレビのマラソン中継で解説者として登場することもしばしば。船ではよく学生を怒鳴っていた(これは我々のせいかな?)。

⁷湘南校舎の4年生。我が2班の班長にして70人の研修学生を束ねる学生長でもある頼れる男。私にとってはギターの師匠でもある。2班には3年生がいなかったのも、まさにみんなの兄貴であり、あらゆることにおいて良き相談役であった。でもちょっとエロ。

1.3.8 白塗りのおひな様 1992年3月5日(木)

疲れた。何だか知らないが、体がとても疲れている。今日は午前中は何もなく、午後からは延期になっていたひな祭りが行われた。お内裏様^{だいり}とお雛様^{ひな}役の2人の顔は、おしろいがムラになっていて、仮装大会のような雰囲気^{かもち}を醸し出していた。ちょっと面白かった。

途中、スコールで中断になったりしたが、ひな祭りはまあまあ楽しめた。赤道祭の時と違って自分たちで動かなくていいので楽だったし、ケーキもフルーツポンチも食べられたので嬉しかった。しかし甘いものだらけだったので、その後に出たおしるこまではさすがに食べられなかった。企画の方はあまりひな祭りとは関係ないゲームであったが、楽しく過すことができた。

夜の飲み会が始まるまでの間、甲板で大声で歌を歌ったり、楽器を弾いたりした。大声を出すとてもスッキリした気分になる。夕日がとてもきれいだった。あまり酒を飲む気にはなれず、少々頭が痛いので今日は早々に部屋へ引きあげてきた。昼頃から咳も出始めたし、どうやら風邪をひいたらしい。今、船の中では風邪がはやっている。

オーストラリアまであと少しだ。楽しいことがたくさんありそうで、今からわくわくしている。

1.3.9 流行りもの 1992年3月6日(金)

いかん。完全に風邪をひいてしまった。

声が変わる。頭が重い。

1.4 WALTZING MATILDA { Brisbane & Gold Coast }

1.4.1 お預け 1992年3月7日(土)

オーストラリアだ！しかし頭が痛く、熱も38°Cある。せっかくオーストラリアに来たのに、今日は一人で船に残って寝ている。みんなは出かけて、22時30分まで帰ってこない。でも選りに選ってこんな時に風邪ひかなくても…。

朝から頭が痛かったし熱もあった。無理して出かければ周りの人に迷惑になるだろうと思って行くのをやめたのだ。また、無理をしてこの一週間の滞在を棒に振ったら余計残念である。とにかく休もう。早く治ってほしいものだ。

1.4.2 ブリスベン市内観光 1992年3月8日(日)

楽しかった！今日はバスで市内の何箇所かをまわった後、17時ごろから自由行動となり、楽しい一日を過ごした。

⁸啓子さん。湘南校舎の3年生。船ではマドンナ的存在であり、我々一年坊主にとっては大人を感じさせる素敵な女性であった。だがこのひな祭りの化粧はちょっとかわいそうだったな。

バスで行ったのはまず City Hall。だが特に感動はなかった。そして日曜日だけやっているフリーマーケットを見に行った。そこは雰囲気楽しい。特に買いたくなるものはなかったが、パン屋の女の人がきれいだった。

その後に Woolshed へ行った。ここは羊がたくさんいて、ちょっとしたショーも見られて、食事もできるところだ。昼食はここで RAM ステーキを食べた。初めて食べたが、なかなかおいしかった。しかしこのサラダはどうも好きになれない。そのレストランではギターを弾きながら歌っているおじさんがいるのだが、みんなで Waltzing Matilda を歌って盛り上がった。そして藪崎さんが前に出てギターのおじさんと替わり、みんなで歌ってまた更に盛り上がった。とても楽しい一時だった。

昼食の後は植物園へ行ったが、そこあまり興味を引かれなかった。でもそこで初めてオーストラリアドルを使った。T-TOWEL とポストカード 2 枚を買った。外国通貨での支払い初体験である。普通に買い物しただけなのだが、ちょっと楽しかった。その後、バスが空港に寄ってくれたので両替 (1AUS\$=111 円) をした後、City Hall の前に再び戻り、そこでバスを降りて自由行動となった。

バスを降りてからの自由行動は、日曜日ということもあって町中の店は閉まり、人通りも少なかった。伊賀君⁹と一緒に、ぶらぶらと足の向くまま気の向くままに歩いたが、手元にあった地図が大雑把であり建物が載っていなかったために、発見が多く、夜は重要な建物がライトアップされていてきれいだった。古いレンガづくりの教会の後ろに新しいガラス張りのビルが立っていたりして、古いものと新しいものが混在する町の様子はとても面白かった。

夕食はなんとか Pizza という店でピザとパスタとサラダを食べた。そこは食べ放題で、値段は \$7.75。それに DRINK が \$1.60 (ちと高い!) だった。ピザとパスタは良かったが、サラダはまずかった。どうもあの豆がいやだ。その後はあるホテルへ寄ってトイレを使ったり、パンフレットをいろいろもらって、フロントで道を教えてもらったりした。宿泊客ではないのにとても親切で、感激した。

そして町を歩きながら建物を見たり写真を撮ったりした。その中で面白かったのは、公園の側にあった体重計。20 セント入れると体重が量れるのだが、それを見つけたとき、道端で 2 人で大笑いしてしまった。タモリ倶楽部でやっていた東京トワイライトゾーンに出てきそうだ。東京じゃないけど。2 人とも 20 セント硬貨を持っていなかったので、通りすがりの人に声をかけて両替してもらって (笑ってた) 体重計に乗ってみた。当然変わったことは何も起こらないただの体重計なのだが、なんだかおかしかった。

帰り際に飲んだコーヒーはなかなかうまかった。その店は Ko±es (スペルを間違っているわけではなくこういう名前) というコーヒーショップで、\$2.40 のカプチーノを飲んだのだ。ただ「コーヒー！」と注文せずにコーヒーの種類で注文した経験は初めてだ。店のメニューには他にもいろいろなコーヒーがあった。

帰りのタクシーは \$7.70 で、二人で割って \$3.85 だった。船がいるのは BRETTS WHARF

⁹清水校舎の 2 年生。彼とはとても気が合い、寄港地では行動をともにすることが多かった。どこでも物怖じせずに積極的に行動する男。航海中のイベントの企画においてはアイデアもよく出していた。彼の恋の進行状況は逐一 2 班に報告され、2 班の夜は恋の悩み相談室となっていた。

という所だ。船を見ると我が家に帰ってきたという感じがする。船に向かって歩きながら、初めて南十字星を見た。写真に撮りたいが、写らないだろうな。近くの木にはフルーツバット（こうもり）がぶら下がっていた。

今日は昼も夜も外食だった。金がかかるが、もう船の飯は飽きた。あのプラスチックの容器もいやだ。ここにいる間は外食の方がいい。明日はクイーンズランド大学へ行く。国際交流だ！

1.4.3 クイーンズランド大学 1992年3月9日(月)

寿司だ。本格的ではなかったが寿司が食べられた。今日はクイーンズランド大学を訪問し、大学を見てまわってから大学内で昼食となった。庭のようなところに用意されたテーブルで昼食をとり、その後に山水譜を披露した。彼らはこれを何だと思っただろう。日本の伝統芸能が武術とでも思っただろうか。夜は望星丸二世で、大学の人たちを招いて船上パーティーをした。寿司はそのパーティーで出たもので、久しぶりの味だった。

クイーンズランド大学はオーストラリアで最大というだけあって、想像以上の広さだ。それに建物その他も非常に美しく、何と言っても博物館があって資料が充実しているのがすごかった。でも何だが大学に来たというより博物館の見学に来て飯食って帰っただけという感じで、もっと学生との交流が欲しいと思った。しかし環境はとてもいいし、施設も一流ですが！という感じだ。学生もみんな頭良さそうだし。

それから、ここの人たちの話す日本語のうまいこと！目をつぶって声だけ聞いたらまさに日本人という人も何人かいた。自分たちが英語を話せないのがとても情けない。

夜の7時から始まった船上パーティーでは、自分は音響係をやって終始裏方だった。ちょっと寂しかったし、国際交流としてコミュニケーションしなきゃいけないとも思ったが、全然この人と話していない。パーティーは大成功で、お客さんも非常に楽しんでくれたようだ。今日は疲れたがいい気分だ。明日はやっとホテルだ！

1.4.4 オーストラリアの動物たち 1992年3月10日(火)

ホテルだ！ゴールドコーストにやってきた。今日は狭い船のベッドを離れ、RAMADA HOTEL というところに泊まっているが、部屋が広い。日本のビジネスホテルより広い。船に慣れているため、スペースに無駄を感じる。空間の「余裕」というより「無駄」と思ってしまう。テレビを見るのも久しぶりだが、外国のテレビ番組を外国で見るのは初めてだ。コマーシャルがなかなか面白い。何を言っているのか聞き取るのは難しいが。

今日はLONÉ PINÉへ行って、コアラやカンガルーをたくさん見た。\$5でコアラを抱いて写真を撮ってもらえるところがあったのだが、突然撮られたので笑顔ではなく、ポーとした顔で写っている。お兄さん、「撮るよー」とかひとこと言って欲しかったな。

ゴールドコーストに着いてから夕食までは寝た。テレビも少し見たが、堺正章の『西遊記』が吹き替えで放送されていた。ガンダーラも英語だった。夕食後、街中をぶらぶらしたが、同じものでも店によって値段が違うので、よく見てから買わなければならない。ま

た、こっちの店は閉店してからも店内が見えるようになっているのでとてもいい。夜でも楽しい。それから、今日初めてXXXX(フォーエックス)ビールを飲んだ。確かに飲みやすいが、ビールの味の違いはよくわからんな。

明日はムービーワールドへ行く予定だ。いろいろとやりたい事もあるので楽しみだ。まだ咳が出る。早く治れ！

1.4.5 異国の中の異国 1992年3月13日(金)

中国だ！と言っても本当に中国へ来た訳じゃない。そう、チャイナタウンである。ここは全くと言っていいほどオーストラリアを感じさせないところだ。全体的に中国だが、日本料理の店もあればインド人の店もある。夕方からずっと歩き回ったが、とても妙な気分で面白かった。でも疲れた。

ちょっと日記書くのをサボっていた。今日までにあったことは、カランビン野鳥園や州境のビューポイントなどに行き、ゴールドコーストからブリスベーンに帰ってきたことである。また船に寝泊りの生活である。今日はまたブリスベーン市内を自由行動し、楽しいチャイナタウンを体験したわけである。映画を見たり、電車に乗ったりもした。

さて、昨日知らされた事だが、出港が台風のために延期された。昨日の話では15日には出港する予定であったが、今日の夜の点呼の時、出港は15日以降になったと知らされた。正確にいつになるかはわからないらしい。オーストラリアでの滞在が延びても、上陸期限が過ぎてしまえばずっと船の中だ。それに次のラバウルとグアムでの滞在予定に変更が出るだろう。このような理由で明日も自由となった。これはとてもうれしい。まだオーストラリアを楽しめるのだ。しかも自由に。

それから明日、何人かの人たちが上陸禁止ということになった。これは、クイーンズランド大学の友人と個人的なパーティーに行った人たちが、門限の22:30までに帰れなかったために、団役員の方から申し渡された罰である。連帯責任ということで4、8、9班が上陸禁止である。しかしこの処分には皆、納得がいかないようだ。やるならば全体責任でなければおかし。学生長の藪崎さんらも役員に話しに行ったが、これは変わらなかった。

1.4.6 クイーンズモール 1992年3月15日(日)

まだオーストラリアにいる。出港は17日の8:00に延期されたが、まだ延びるかもしれない。また日曜日を迎えることができたのでマーケットに行ける。今日はフリーマーケットへ行って、冗談Tシャツを一枚買った。これはなかなか良い。最近、船に帰ってくるとすぐ眠くなってしまっているので、日記を書くのをサボってしまう。これではいかん。

昨日はあるおじさんに会った。SUZUKIのキャップをかぶっていて、POST OFFICEで伊賀君と私に自動販売機の使い方を詳しく教えてくれた。そして夜、Hungry Jack'sの近くにある公衆トイレの前で再び会った。とても楽しいおじさんだ。そこでいろいろと話をしていると、ある日本人の女の人とオーストラリア人男性のカップルが、困っていると思っ

て話しかけてきた。色々とお話して楽しいひとときであった。SUZUKIのおじさんにはまた

会うような気がする。

明日はスポーツ大会が予定されているが、できるかどうかわからない。

1.4.7 一人歩き 1992年3月17日(火)

昨日は一日中雨が降っていて、全く外出しなかった。船は朝からシフトして少し後方へ下がった。

オーストラリアの自由研修最終日だ。今日は単独行動をした。特に珍しい場所へ行った訳ではないが、一人で歩くというのはなかなか良かった。ただ歩いているのが、とても楽しかった。ずっとCityを歩き回っていて、コミックスの店を見つけたり、安い本屋を見つけたりするのも面白かった。Ascot 駅から電車に乗って行ったのだが、船を出てから駅を見つけるまでずいぶん歩き回ってしまった。でも、その辺りの街並みを見ることができて、いい気分だった。

そして、このところ調子が悪かったカメラがとうとうイかれた。もう使えない。しょうがないのでフジの「写るんです」を買った。また、今日もSUZUKI さんを見かけた。MALLの映画館の横のMcDonald'sの前で一人で立ってアイスクリームを食べていたのだが、この前と全く同じ服装だった。このおじさんは一体何者なんだろう。

夕方、Hungry Jack'sの近くに座っていると、伊賀君がプロペラを担いで通りかかった。それは非常に奇妙な姿で、思わず笑ってしまった。そのプロペラは空港で50ドルで買ったということだ。二人で夕飯を済ませた後、タクシーでプロペラとともに船に戻り、またCityに戻ってKoes でカプチーノを飲んで帰った。タクシーのドライバーは、とても気さくで楽しい人だった。

明日は朝6:00に出港予定である。波がまだ高く、船は揺れるそうだ。また酔うかもしれない。

1.4.8 食ったら寝るだけ 1992年3月18日(水)

よく寝た。でも爽やかではない。起きて食って寝る…ということしかしていない気がする。ベッドで寝ているより、甲板に出ている方が気分がいい。船は揺れているが、思ったほど気持ち悪くはなっていない。

夜はビデオで『あしたのジョー』を見た。何回見ても面白い。あの独特の絵がとてもいい。今日は他には何もなかった。明日は洋上クラブがあるので、英作文を書かねばならない。きつい。

1.4.9 調子が悪い一日 1992年3月19日(木)

頭が痛い。昼飯は食わなかった。今日の午前中は研修まとめで、午後は洋上クラブだった。英会話クラブの宿題は1時間ほどで書き上げた。クラブが終わってからはほっとした

が、やっている最中は少しつらかった。でもパプアニューギニアで話されている言葉を少しだけ教わったのが面白かった。

夕飯はカニの甲羅に入っているカニのグラタンと、鶏モモ肉の骨付き唐揚げ、とうもろこし、ご飯、たくあんであった。とてもうまかった。オーストラリアを出てから、メニューの傾向が変わった気がする。うまくていい。夜はまたビデオ鑑賞。

今日は一日中頭痛がつきまとっていた。咳もまだ出るし、あまり調子は良くない。明日はまた洋上講座がある。つらそうだ。

1.4.10 ギターは楽し 1992年3月20日(金)

また夕飯がうまい！今日はハンバーグが出た。朝食のメニューはほとんど変化はないが、夕食はうまいものが続いている。

今日の洋上クラブの時間、我が英会話クラブは活動しなかった。食堂でビデオ(ウォール街)が上映されていたため、それが終わってからということだったのだが、ビデオが終わったら16:00だった。また、午前中の洋上講座は来間先生の話だったが、10分ほどで終わってしまった。さすが来間先生、みんなの気持ちをよくわかっていらっしゃる！でもせっかく早く終わったのに、その後の英会話は1時間20分もやった。疲れた。

夜のビデオ上映は見ないで、私は部屋で藪崎さんのギターを弾いていた。たっぷり弾けてよかった。明日も朝、起きるのがつらそうだ。最近、6:30ぎりぎりにならないと起きなくなってしまった。これではいかん。

1.4.11 ビデオ撮影 1992年3月21日(土)

クロコ再登場！今日はビデオ撮りがあった。頭が働かないので、いいアイデアが出ない。まだラバウルに着いていないのに、夕日をバックにラバウル小唄の一説を朗読。もっと面白いことをやりたかったし、何も研修航海の感想を言わなかったのはまずかったかな。多分、何のビデオかわからないものになってしまっている。少々後悔している。

1.5 戦争の海、戦争の島 { Rabaul {

1.5.1 兵士の海に花束を 1992年3月22日(日)

暑い。暑い暑い暑い！今日はとても暑い日だ。今日は予定の変更があった。なんとラバウルに早く着きそうなのだ。したがって、今日の15時から慰霊祭が行われた。団長だったか副団長だったか忘れたが、学徒動員の話の中で

「でも僕はまだ死にたくない。」

という言葉聞いた時、胸にくっとくるものがあった。

それから、19時から明日予定されていた我が2班のラバウル予備調査の発表をやった。しかしN氏の発表は、みんなあまり聞いていないようだった。荒木船長にお願いした

スライド上映はとても良かった。最後にラバウル小唄も歌ってくれて盛り上がった。

最近ちょっと運動不足だ。腹筋背筋が緩んできた。今日少しやったが、続けなければならぬ。そして今日は海が不気味なほど穏やかだった。まさに鏡のような水面だった。波は全く立っておらず、船も揺れていなかった。英会話の時間に seasick と言って出てこない人が何人もいたが、全くの嘘だとすぐにバレてしまっていた。

明日はもうラバウルに着くそうだ。ポンペイよりもすごいところらしい。今日は藪崎さんと夜中の1時ごろまで歌った。

1.5.2 ニューブリテン島 1992年3月23日(月)

ラバウルだ！第一印象は「あやしい」。ポンペイの場合は聞かされていたほど怖いところではなかったが、ここパプアニューギニアのラバウルは本当にヤバそうだ。ここの人たちは今まで見てきた人たちと黒さが違う。本当に真っ黒で、夜はいるのかいないのかわからないほどだ。それに、前方から4、5人で横に連なって歩いて来られると非常に怖い。

着港したのは13:30ごろだったが、入国手続きは非常に長くかかり、終わったのは16時を過ぎていた。何でそんなに遅いんだろう。しかもうちの班は食当だったので、あまり外を見てまわれなかった。天気は曇りだが、高温多湿なのでとても暑い。

ここへ来て最初に聞いた現地の人言葉は

「バナーナ。」

であった。船の横までボートを漕いでバナナを売りに来たおばちゃん3人組が言った言葉だ。船が泊まっている湾はとても静かで、のどかな雰囲気である。岸壁から海を覗き込むとウニがいるのが見えた。魚も泳いでいる。近くにはものすごく巨大な船が泊まっていた。これが動くのか。人間ってすごいものを造るなあと思った。

夕食後、ちょっと町(?)へ出てみたが、あまり買うものはなさそうだ。LUXのニセ物石鹸でMAXというのがあった。オーストラリア製だ。それから、牧伸二が持っているようなウクレレがあった。欲しい。

今日は夜の点呼が19時だったので、あまり町をうろつけずに船に戻った。戻る途中、港ではすれ違う人たちがみんな

「Good night.」

と挨拶してくれて、とても嬉しかった。少しラバウルに対するイメージが和らいだ。

1.5.3 島の火 1992年3月24日(火)

戦争の遺物。ここには戦争の跡がたくさんある。今日は午前中は自由だったので町をぶらつき、午後はツアーだった。戦闘機や戦車、大砲などを見たが、これらが実際に動いていたというのは信じられない気がした。これらが今は観光資源となっているというのは、複雑な気持ちだ。見てまわっているうちは結構楽しんでしたが、最後のアドミラル・バンカーでは神妙な気分になってしまった。いろいろと考えさせられるが、戦没者の人たちの冥福を祈るだけだ。手を合わせてその場を後にした。

それから、ツアーの途中で生まれて初めてココナッツミルクを飲んだ。その場でカットして差し出してくれたので、みんなで回し飲みした。薄いポカリスエットといった感じで、もっと冷えていればおいしいと思った。しかし量が多くて最終的には誰も飲まなくなって捨ててしまった。

夜は全員でファイヤードダンスを見に行ったが、これが同じことを1時間以上も続けるもので、正直言ってつまらなかった。導入部分だと思っていた演奏とダンスはずっと変わらず、盛り上がり欠けた。でも子供たちとふざけ合ったりしたのは楽しかったし、別れるときに握手をしたのは良い思い出となった。

明日は出港だ。今日は、研修学生で留年する人はなく、全員進級できるという知らせも日本から入った。もう眠いから寝よう。現在 23:30。

大声で どなるのやめて 宇佐美先生

1.5.4 さらにラバウルよ 1992年3月25日(水)

今日はラバウルを15:00ごろ(定かでない)出港した。出港までは自由だったので、パプアニューギニアの通貨Kina(1Kina 144円)を全て使い果たすべく町へ出た。狙っていたウクレレを買ったが、中国製のものであまり良くない。おもちゃだ。がっかりした。郵便局へも行き、ポストカードを買って友達に書いて出した。

ここは暑いので、ついジュース類を飲み過ぎてしまう。今日飲んだ中では、Gold Spotの黄色いのがうまかった。他のはまずくはないが、あまり好きではない。他にも少しだけ土産のようなものを買って、紙幣は全部なくなった。残ったのは56Toea(1Kina = 100Toea)分のコインである。カービングを買ってくる人はたくさんいたが、自分はあまり欲しいとは思わない。土産にするにしても、もらった人はあまり嬉しくないだろう。

それから、今日は靴ではなくサンダルで出かけたのだが、足の皮がむけてサンダルと擦れて非常に痛い。靴擦れが足の親指の付け根と、鼻緒を挟むところの2箇所に起こっている。やはり出かける時は靴の方がいいようだ。

この湾はとても穏やかで、景色が美しい。マチュピット火山¹⁰と望星丸をバックに写真を撮ったりした。ときどき、湾にボートを漕ぎ出している人がいたりして、とても絵になる美しい景色だった。

さて、明日はもう洋上卒業式である。藪崎さんはもう卒業だ。ラバウルは来た時もあるときも曇っていた。ついでに、来た時もあるときも食当。寝ながら書いてるから字がきたない。

N氏は足が猛烈に臭い。班員みんなが迷惑している。

¹⁰Matupit Volcano。数年後、この火山が噴火したというニュースは我々を驚かせた。火山灰が広がっている衛星写真が新聞に載り、あの町はどうなっているだろうと心配した。

1.5.5 洋上卒業式 1992年3月26日(木)

藪崎さん卒業おめでとうございます。今日は洋上卒業式が行われた。雨のために開式時刻が遅れたが、式は無事に執り行われた。練習生の伊藤さんが泣いでいたのが印象的だった。

式の後には各班によるカラオケ大会が行われたが、うちの班は「人生いろいろ」を暴露ネタに替えて歌った。なかなか面白くてウケていたが、審査員の点数は辛く、入賞もしなければ罰ゲームにもならなかった。何だかつまらない。夜の打ち上げでは、酒の飲めない藪崎さんがビールを一気させられていて、とても辛そうだった。それから、罰ゲームの暴露大会はとても面白かった。特に練習生のが。

1.5.6 第2回洋上スポーツ大会 1992年3月28日(土)

惜しくも1点差で2位！今日のスポーツ大会で、我が白組は黄色組に一点差で負けてしまった。これは悔しい。応援合戦では我々白組はチアリーディングをやった。これはなかなか楽しかったが、その前にやった空手で、青、赤、黄、1班と書いた紙を破ったのが不評で（これが原因という訳でもないだろうが）3位であった。自分は長縄跳びと、手押し車パン食い競争に出た。なかなか楽しめたし、非常に盛り上がった。みなさん、お疲れ様。

さて、航海の残り日数も1桁となった。あさってはグアム入港である。早く自分のアパートに帰りたくもあるし、この航海が終わって欲しくなくもある。複雑な気分だ。

赤道マンが髪を切ってすごい頭になっている。親には見せられないだろうな。

1.5.7 気分はTHE ALFEE 1992年3月29日(日)

のんびりした。今日は午前中にグアムの予備調査の発表があり、その後は洋上入学式の話し合いがあった。午後は特に何もなかったので、後部デッキで1時間ほど寝転がって日焼けをし、のんびりと過した。

夜、藪崎さんからエレキギターのエレキギターらしい弾き方を教えてもらい、ずっとアルフィーの「星空のディスタンス」のイントロの部分を実践した。難しい。急にギターが違う楽器になった様に思えた。

1.6 近づく港と去り行く日々 { Guam & Japan }

1.6.1 グアムの短い1日 1992年3月30日(月)

たった一日のグアムだ。ここは軍港である。当初の予定より遅れたので港が替わったらしい。今日の朝グアムに入港し、8:30から入国手続きがあった。今までの寄港地でのチェックが緩かったのか、グアムが特に厳しいのかはわからないが、何だがすごかった。迷彩服を着たゴツイ体つきの軍人が入ってきて、部屋をチェックした。椰子の実や貝殻のチェツ

クが厳しく、何だか怖かった。部屋を見ると言われた瞬間、みんなあたふたして面白かったが。

昼食中に入国手続きは完了し、12:30 にバスに乗ってツアーに出発した。しかし、はっきり言ってこのツアーはつまらなかった。それにグアムは思っていたほど都会ではない。あまり見るところもないし、大きな店も GIBSON'S 以外はない。ツアーのガイドは韓国人のおじさんで、日本語はあまりうまくなかった。自由の女神像があるところではスコールに会い、びしょ濡れになった。ガイドさんが言ったとおり、体がかゆい。

自由行動は16:00 ごろからだだったが、ほとんど GIBSON'S の中で過した。ここは日本円が使えるし、店員は日本語を少し話せる。何だか外国にいる気がしない。

20:00 ごろから OKA GUN CLUB へ拳銃を撃ちに行った。もちろん初めての経験だ。44 マグナムを 25 発と、45 口径オートマチック銃を 25 発撃った。あまり当たらなかった。撃っている時はものすごく緊張感があってとても楽しめた。\$60 と高かったが、まあいいだろう。もう一生やる機会はないかもしれない。そして、こんなもので人が死ぬんだなあとみんなで話した。撃った後は手が真っ黒になった。

日本円がこんなに簡単に通用すると思わなかったので、船に 4 万円も置いてきたのはちょっと失敗だった。ラバウルでは 56t しか残さなかったが、今日も手元には 1 ドル残らなかった。別に考えて残さないようにしている訳ではないが、なかなかうまく使い方をしていると思う。でも記念に紙幣を取っておきたい気もする。紙幣で残っているのは AUS\$ の \$5 札だけだ。

明日はもう出港である。自由行動のできる日があと 1 日欲しかった。潜水艦に乗ってみたかった。日本でグアムは有名だが、自分は新婚旅行でここに来たいとは思わない。大したところじゃないよ。

次はいよいよ日本だ。長い航海ももうすぐ終わってしまう。今日も船に帰ってきた時、自分の住み家だという感じがした。まさに望星丸二世は我々の宿である。もうすぐこの宿ともお別れである。少し寂しい。

1.6.2 推進されてる？ 1992 年 3 月 31 日 (火)

昼と夜の飯を食べなかった。よく寝たが、あまりすっきりしない。船の揺れが大きい。最近、関山推進委員会というのが出回っている。なんだろう。

1.6.3 ブラッディーマリー 1992 年 4 月 1 日 (水)

今日は狩野^か先生が来て、2 班の部屋で飲み会をやった。先生が揃えた材料でカクテルを作ってくれた。楽しかった。

1.6.4 真っ黒け 1992年4月2日(木)

日焼けを強化した。長時間甲板で寝転がった。北井さんが来て、

「あ、なんかすげー黒いのがいる …? 関山かー。」

と言っていた。ものすごく焼けた。

最近、サイン帳やスケッチブックなど、個人的に一言ずつ書いてもらう紙が出回っている。たくさん紙をもらったが、ちょっと書くのが大変だ。夜はまた少しギターを弾いた。藪崎さんとマッキーからギターやバンドについての話を少し聞いた。高校のころは全く興味はなかったのに、自分のギターが欲しくなってきた。

1.6.5 二人きりの時間 1992年4月3日(金)

半分眠りながらチェスをやった。チーズはまずかった。でも、うまかった。

1.6.6 いつの間にやら 1992年4月4日(土)

大掃除をした。きれいにすると部屋が少し広くなった様な気がしたが、みんなの荷物を入れたらまた狭くなった。やっぱり変わらないな。

スミス島となんとか列岩というのが見えた。それから、明日は洋上入学式なので「洋上入学式」という垂れ幕を作った。船の揺れが凄まじい。でも船酔いしていないので、体が強くなったのだろう。

1.6.7 さよならパーティー 1992年4月5日(日)

もう明日で長かった海外研修航海は終わりだ。何だか信じられない。この望星丸二世は、もはや自分の家も同然であり、70人の仲間と別れてしまうなどとは考えられない。パーティーの最後はみんなで肩を組んで歌い、涙を流して抱き合い、握手した。本当にこの航海で得たものは多く、語り尽くすことができない。みんな本当に参加して良かったと思っている。そう思わない奴はいない。

我々は広い世界を感じ、一生の友を得た。友は人生最大の宝だ。この仲間たちとはこれから永い付き合いになるだろう。今、思い返してみると、この51日間は何て充実していたことだろう。何て楽しい毎日だったろう。決して忘れることはない。

この研修航海を我々に与えてくれた東海大学と、共に旅した仲間たちに感謝する。本当にどうもありがとう。必ずまた会おう！

1.6.8 私の国 1992年4月6日(月)

終わりはあっけない。荷物整理や掃除に追われ、なんだかあまり船と別れを惜しむ間もなく終わってしまった。望星丸二世が離れていくのを岸壁の側から見るのは初めてだった。

とても切なかった。港から一人、また一人と去っていくのも寂しかった。最後はもっと盛り上がりがあるかと思ったが、何かあっさりとしていた気がする。仲間たちと握手をし、自分も駅へ向かうタクシーに乗った。

広い世界を見てきただけに、日本に着くと妙に狭くてこまごました世界に帰ってきた感じがする。あまり懐かしさも感じないのだ。

大学近くの自分のアパートに帰ってきて早々、ESSの連中が7人ほどやってきて、部屋で飲み会となった。新学期からの予定などを聞かされて、急に現実に戻された。日本にはしがらみが多い。もっと楽しかった研修航海の余韻に浸りたかった。しかし帰国早々、こうやって友達が来てくれるというのは非常に嬉しいものだ。友達はありがたいと感じた。

船の荷物は宅配便で送ったので、明日にならないと来ない。長かった航海を感じさせるものが手元になく、帰国時にもらった出港時の写真を何分間も見続けた。ESSの連中が来てくれなかったら、とても寂しかったと思う。亮と佐伯が泊まって行く。

1.6.9 さくらさくら 1992年4月7日(火)

今日は学生証をとりて大学へ行き、新入生勧誘をしているESSのところにもちょっと顔を出した。昨日、^{やなだ}築田には「お前太ったな」と言われたが、今日は誰かに「やせたね」と言われた。人によって印象は違うみたいだ。日焼けも周りから見るとすごいらしい。船ではみんな日焼けしてたからわからなかったけど。

大学の書店では椎名君に会い、忠実屋の帰りにはマッキーに会った。マッキーは昨日帰ってからとても寂しかったと言っていた。自分と同じ様に、出発時の写真をじっと見つめたそう。昨日別れたばかりなのに、もう会いたくてしょうがない。おそらく全国に散らばっていった70人全員が感じていることだろう。あの船での生活、寄港地で歩いていた時間、のんびりしていて、日本のように車も多くなかった。もう戻れないのだ。この寂しく切ない感じはしばらく続くだろう。スムーズに大学生活に戻れるか心配である。

本当に昨日別れたばかりなのに、マッキーを見たときとても懐かしい気持ちになった。この研修航海で得た友人が今までの友人たちとは違うのがよくわかる。こんなに強い心の絆で結ばれた友人は今までにいなかったかもしれない。これからの自分の人生にとって一番大事なものがこの研修航海で得られたのではないだろうか。

今は寂しいが、必ずまた会える。それまで元気で。それぞれの場所でみんな頑張ろう！

第2章 マレー半島 ～タイ マレーシア シンガポール～

この旅行の後、私はアジアの魅力にとりつかれる。

2.1 微笑みの国

卒業旅行である。2月25日から、私にとっては2度目の海外である東南アジアへの旅に出発した。メンバーは自分と亮、生沼、山口、小崎、真下の6人。初めての成田空港からノースウエスト航空(NW)27便で、タイのバンコクへ飛んだ。

夜、ドン・ムアン空港に到着した私たちは、タクシーで宿へ向かった。さっそくクラクションの嵐。激しい運転。これがタイか。バンコクでの宿は、すでに日本で予約してあったスリウォン・ロード(Suriwong Rd.)にあるマノーラホテル(Manohra Hotel)。2部屋に3人ずつ泊まることになった。

バンコクは思ったよりも随分と都会だった。しかしそれは外国人の力によって作られている感じがした。これこそタイだと感じさせられたのは、屋台の飯、ムエタイ、ポン引き、そしてアユタヤの遺跡である。タイで最初に食べたのは、Hua Lam Phong 駅近くの屋台でおばちゃんが作っていたチャーハンである。値段は15バーツ(約60円)。これはタイの滞在最終日にもう一度食べに言った程、忘れられないものだった。タイにいる間いろいろな料理を試したが、あのチャーハンに勝るものには出会わなかった。どんな味なんだと聞かれても言葉で説明できない。とにかく日本では食べたことがない味なのだ。見た目は、でっかいキュウリをスライスした様なものが添えられている以外は、特に変わったものは入っていない。おそらく調味料が違うのだろう。

バンコクではよくタクシーでボられた。あれがしょっちゅう続くと、人を信用できなくなってしまう。でも、そういう目に会って「タイだな」と変な納得と、東南アジアのあやしさを味わったような、ちょっと面白い気分になったりもした。

観光は、時にはタクシー、時にはトゥクトゥク、時には歩きで、王宮周辺や川やマーケットなど代表的なところを6人でひととおり見てまわった。どこへ行っても仏像は金ピカであり、仏教と言っても日本とは違う文化であるというのが強く感じられた。仏像の顔も日本のものとは随分違って面白かった。

バンコク観光での最高の贅沢は、800バーツのリングサイド席でムエタイを観戦したことだ。あれはタイへ行ったら必ず見るべきだと思った。だがやはり料金の高い席だけあって、リングサイド席に座っているのは日本人ばかりであった。

タイのムエタイ 1995年2月27日(月)

ムエタイを見ずにタイは語れない。今日はリングサイドでムエタイを見た。面白いという表現は合わない。そこには闘う人の人生が見える。初めの踊りは実際に見ると真剣な表情で、とてもおごそかに見え、タイの歴史が感じられた。また、選手は強い人ほど常に冷静な心で闘っているように見えた。

観客は嫌いになった。人生をかけている人を気楽に見られる気分ではなかったし、自分もその中の一人だと思うととても嫌だった。あれは気楽に、笑ったりしながら見るものではない。歴史があるから、有名だから神聖なのではなく、人が人生の全てをかけている場だからこそ神聖になるのだ。世界には様々な人生がある。彼らの見ている世界はどれくらいの広さなのだろうか。賭けをして騒いでいる観客はとても狭い世界に生きている。瞬間、一緒に観戦している友人達が友人でないような気がした。私はとてもあの様な気分で見ることできない。

闘っていた選手達は私に生きる活力を与えてくれた。自分に怠け心が出て来たとき、私はきっと彼らの闘う姿を思い出すだろう。私はまた少し、自分の世界が広がったような気がする。人によって日常見ている世界が違うということ、世界には様々な人生があるということを知った。

スタジアムの帰りには小崎と2人で屋台で飯を食った。その後も、歩いていて見かけたチマキを買ってみたりして、屋台の雰囲気を楽しんだ。だが、あの何のラベルも貼っていないビンに詰めて売っている飲み物はなんだろう。とても気になったのだが、2人とも飲んでみる勇気はなかった。

タイでは他にも、道でみかけたいろいろなものを食べてみた。おいしそうなものがいっぱいあるので、飯時でなくても、ついつい立ち止まってしまうのだった。この屋台の飯こそ、アジアの旅の醍醐味ではないだろうか。ハズレということがないのだ。ホテルでの食事には特に感動はなかったが、屋台では何を食べてもおいしかった。

しかしタイで最も心に残っているのはアユタヤである。バンコクを東京にたとえるなら、アユタヤはタイの京都であろう。永く力強いタイの歴史を感じさせてくれる場所だ。バンコクのような騒がしさもなく、子供たちがとてもいい表情をしていた。廃虚となった遺跡も、修復されたものも、静けさと美しさに取り囲まれており、仏に祈る人々の姿も印象的だった。特に修復が進んでいるワット・ヤイチャイ・モンコルは壮大であり、今まで見た名所旧跡の中でも最も大きな感動があった。バンコクのタクシーでボられたことなど吹き飛ばしてしまい、

「タイっていい国だなあ。」

と思ってしまう程だった。バンコクでのくさくさした気分もアユタヤで癒すことができた。

タイの後にマレーシアとシンガポールへ行ったが、タイが一番面白かった。もう一度行きたいと思う国だ。

2.2 ペナンでダウン

結局バンコクのマノーラホテルには5泊し、3月2日、次は国際列車でマレーシアへ向かった。この列車は天井に扇風機が回っており、窓を全開で走る夜行で、マレーシアのButterworthまで約20時間かかった。快適とは言いがたいものだったが、まさに『世界の車窓から』という気分の列車の旅だった。しかし夜に腹を冷やして下痢をしてしまい、何度もトイレへ行った。亮が買ったトイレトペーパーを私がほとんど使ってしまった。出入国の手続きもとてもつらかった。頭の中はずっと《トイレ、トイレ、トイレ…》。到着した時にはすっかりフラフラになっていた。

その時、タイでは何でもかまわずに食べていたので、6人の中に「コレラか？」という心配も湧き起こり、少々怖くなった。とにかく宿に着いて横になりたいという気持ちが強かったので頑張って足を進めた。しかしなんと運の悪いことか、その日はイスラムの休日。店は全て閉まっていて、両替所も休み。なんとか通りすがりのおじさんを通じて、ある店でペナン島へのフェリー代に足るだけの換金をしてもらい、島へ渡った。

宿はそれから探すことにしていたのだが、その時期は日本の正月のようなものさそうで、マレーシアの人達が休みでみんなペナンへどっとやって来ているのだった。そのため観光地の宿はどこもいっぱい、島の中心地であるジョージタウンはどこも閉まっていて、人の姿はほとんどなかった。そして自分は下痢でフラフラ。そのうち吐き気もしてきて体はだるくなり、とうとう道ばたに寝転んでしまった。

その後、友人たちはもちろん、数々の島の人たちの親切のおかげで宿も見つかり、医者に診てもらい、注射を打ってもらって、コレラじゃないとわかって安心し、ぐっすりと眠ることができた。本当に一時はどうなることかと思った。この最初の宿は売春宿だったそうだ。私は完全にダウンしていたので何も気づかなかったのだが、他のメンバーはちょっとあやしい雰囲気を経験したのだと後日話してくれた。

次の日はこの旅行で最も思い出深い宿となった、バツーフエリングの弁慶民宿 (Beng Keit Guest House) に宿を移した。面白い親父と親切なおかみさん、そして旅行者たちとの語らい。そこには4泊し、ペナンの海で思いっきり遊んだ。

ある夜、近くの別のゲストハウスでギターで歌っている人たちがいたので、なんとなく誘われて入っていき、テーブルについてみた。彼らの中は我々日本人が来たのを喜んでくれる人と、ちょっと邪魔者扱いする雰囲気の人とに分かれた。最初はギターのおじさんが日本の歌や我々が知っていそうな英語の歌と一緒に歌ってくれたりして楽しかったのだが、そのうち彼らの中で喧嘩が始まった。明らかに原因は私たちだ。せっかくの楽しいひとときがそんな雰囲気になってしまっても残念だったが、去らなければならないと思った。心の中はちょっと複雑な思いであった。

「俺たちは常に歓迎されてる訳ではないんだな…」

6人はその場を後にした。

ペナンで夕食に入ったレストランは大体いつもちょっと高めだった。宿は安いところに泊まっていたが、夕飯はちょっと贅沢。どのレストランでもメニューには載ってないが、チャイニーズティーあるかと聞いたら、いつも必ずあった。それがうまかった。

ただ1つ心残りなのは、腹の調子が良くなるまで消化の良いものしか食べられず、お気に入りの飯屋であった Andrew's Cafe のカレーとフレッシュジュースを味わえなかったことだ。この店は高くない。朝と昼はここを利用することが多かった。カレーは大きな葉っぱの上にご飯とカレーを盛って、手で食べる方式だ。みんながうまそうに食べているのを見ながら、私だけ消化の良さそうな麺入りスープや雑炊をしつこいぐらい噛んで食べた。でもさすがインド人の店だけあって、紅茶はどこで飲んだものよりもうまかった。朝食メニューのロティも最高だった。ただそれだけは味わうことができた。だからマレーシアというのがどんな味なのか、自分は十分味わってこなかったことになる。

ペナンはビーチリゾートである。滞在中は毎日ビーチで豪遊したり、バスを乗り継いでペナン・ヒルやジョージタウンを観光したりして、とても楽しい時間を過ごした。ペナンだけしか見ていなくてこんなこと言うのも何だが、マレーシアは過ごしやすいところだ。ここなら住めそうな気がする。

2.3 世界三大がっかり

名残惜しいペナンを出てシンガポールへ。3月8日、ペナンのジョージタウンから出る夜行バスに乗って次の目的地へ向かった。このバスには約14時間乗っていたのだが、乗ってからすぐ照明が消されたので本を読むこともできず、凄まじく揺れ、さらに凄まじい冷房が体を襲い、ほとんど眠れなかった。あの冷房は本当に寒かった。現地の人たちも真冬のような格好をしており、いったい何であんなに冷房を効かせているのかわからなかった。冷房対策をしていないのは我々だけだ。バスの中にトイレは無く、途中何度か休憩のために止まった。そこで食事をとっている人もいたようだが、何分くらい止まっているのかわからないのでトイレに素早く行って戻って来るだけにした。

シンガポールに入って最初に思ったのは、街がとてもきれいだということだった。クリーン&グリーン政策で、ゴミは落ちておらず道は整備されていて、鮮やかな緑の木々には迫力があつた。宿はペナンの弁慶のおかみさんに紹介してもらった Lee Travelers' Club というゲストハウスに決めていたので、探す手間は省けた。

シンガポールはとてもきれいな国だが、現地の人々の暮らしは見えてこない。まさに都会である。そして Duty Free Shop の中は日本人ばかりで、ただ買物をしに旅行に来ているような団体だらけだった。その他の店でも変な日本語を話す店員がいたりして、日本人でなんだろうと思った。

だが、インド人街やアラブストリートは面白かった。街の雰囲気ガラリと変わるのだ。ガラクタ市やサリーの店やヒンドゥー寺院。多民族の国であることを実感する。街の雰囲気を肌を感じながらゆっくり歩きたい。でも他のメンバー、歩くの速すぎ。

世界3大がっかりのひとつ、マライオンは思った通りがっかりさせられた。なぜあんなものが世界的に有名なのだろう。最初に目にしたときは、ちょっと笑ってしまった。わざわざ見に行く程のものでもない。シンガポールは今回の旅行で一番つまらなかった。やはり、海外旅行へ行くのは現地の人々の暮らしが感じられる国が良い。都会、特に観光地

化されて、日本人の買物ツアーがうじゃうじゃいる所はあまり好きではない。でもヤオハンは便利だったな。歩き回った後は、必ずそこでほっと一息ついた。

夜は屋台の集まっているところへ行き、ビールで乾杯。いろいろな屋台が並んでいて、どれにしようか迷う。うまい飯とビール。最高だ。シンガポールも屋台の飯はうまい。

最後の日はラッフルズホテルのバーでシンガポールスリングを飲んだりもした。このオリジナルカクテルだ。やっぱりこれは飲んどかなきゃと思ったが、よく考えたら日本で飲んだことないから違いはわからないや。ラッフルズホテルは、とても私たちが泊まれる値段ではないが、バーやカフェは宿泊客でなくても利用できるのがうれしい。庭のベンチに座ってくつろいだりして、ちょっとだけ豪華な気分を味わわせてもらった。

シンガポールのチャンギ空港で一夜を明かした後、3月11日、ノースウエスト8便で真っ黒に日焼けした我々6人は、元気に…とは言いがたいが日本に帰ってきた。この2週間の旅行はあっという間だった。帰ってきたとたんに寒さを感じ、思ったとおり風邪をひいてしまった。

この旅は私にとって教師であった。東南アジアの魅力を見せてもらった。陸路移動の面白さを感じた。そしてゲストハウス、地球の歩き方、値段交渉、バックパッカー、現地での情報交換、身振り手振りでの会話などなど、個人旅行において必要な、今まで知らなかった知識をたくさん教えてもらった。一緒に旅した仲間、旅先で出会った人々も私にとっては教師であった。東南アジアはとても面白い場所だ。前回の旅の影響で、これまでは外国と言えばまず太平洋地域を思い浮かべていた。私の目は、これから東南アジアへ向くであろう。

そして何よりも、初めて出会った屋台で食べる飯の味とあの楽しい雰囲気忘れられないのである。うーん、また食べたい！

第3章 ここにはすべてがある ～インド～

この旅行の後、私は長かった学生生活を終え社会人となる。

3.1 デリー

3.1.1 夜の到着便 1997年2月27日(木)

今日は朝早い出発だった。今、とりあえずこうして宿が決まり落ち着いているが、空港に降り立ってぼつんと一人になった時は、どうすればいいのかわからず不安になった。バスを待っているところで日本人に話しかけられ、彼も一人だということで一緒に宿探しをしようということになった。

ニューデリー駅近く、メインバザールで宿探しをし、声をかけてきたインド人の兄ちゃんについて行ってそこに決めた。一人 Rs100 (100 ルピー)。トイレ・シャワー付きである。名前は HOTEL RAVEENA PLACE DX。

インドは思ったより寒い。夜だからかもしれないが、日本を出たときのままの格好で良い。一人だったらこうやって今、宿に泊まっていられるかどうかわからない。いやー本当に不安だった。ちなみに、一緒にいる彼は大東文化大のS君という。

メインバザールはもっと車の走りやすい道路かと思っていたのだが、実際は、まるで路地裏という感じだ。最初は一人旅ということでわくわくしたが、空港を出た時のあの不安はすごかった。めぐり合わせに感謝感激である。

さて、3月12日にカルカッタで亮^{りょう}と会う予定だが、会えるだろうか。一人になってみたくもあるが、夜一人で宿探しは本当に不安だ。薄井¹、大丈夫か？

この旅行、トラブルが無ければ良いが、いずれ何かが起こるだろう。その時、自分の知らない自分を発見することになるのかも知れない。インドを楽しむ余裕を持とう。久しぶりに日本を出たんだ。きっとまた新しい眼が開かれるに違いない。おやすみ。

3.1.2 洗礼 1997年2月28日(金)

靴にうんこ付けられた。

¹東京工業大学の小俣研究室の同僚で、山登りが趣味の男。彼のインド到着はこの数日後であり、私とは別の日程でインドを旅行した。彼にとってはインドが初の海外、初の一人旅であった。

「靴が汚れてるよ。クリーニングしてあげる。」

と言われ、足もとを見たら右の靴に牛の糞を付けられていた。足の甲に自然に糞が付くはずはなく、知らないうちに付けられたのだ。朝、出かけてコンノートプレイス中心の噴水へ向かう途中の出来事で、少々不快だったが、インドを語る上でちょっとしたエピソードである。まあ、そんなもんだと思えばあまり腹は立たない。S君は

「なんだ、あいつ。殴ってやれよ。」

と言っていたが、それはまずいよ。でも後から靴を洗っている時にちょっと腹が立ってきた。

今朝は荷物を背負って宿を出て、まずツーリストオフィスへ行った。そしたらしきりにインドは危険危険と言われ、ツアータクシーを雇えと勧められた。

「値段は安いぞ。何が問題なんだ。」

と言われたのだが、それをやってしまうとただのバック旅行のようになってしまう。それはいやだ。なんとかごまかして出て来た。

二人で歩きながら、私が見かけた公園などに入っていこうとすると、S君は

「襲われそうだよ。やめとこう。」

と言って行こうとしない。そんなことないと思うんだけどな。無理強いすることもできないので、私はいくつか見たいところはあったが足を踏み入れずに通り過ぎた。

途中、一人旅の日本人の女の子に声をかけられた。彼女はとても元気はつらつとした様子で、ニューデリー駅への道を聞いてきた。なんだかとても生き生きとしている。私たちは彼女の後姿を見送りながら、声をそろえて

「たくましいなあ。」

とつぶやいていた。

街をうろろうろした後、メインバザールに戻って今日の宿を決めた。昨日の宿よりもっとメインバザールを奥に入った、AMAR HOTEL というところだ。二人で Rs300 である。値段相応の、良い宿だと思う。ここなら何回でも泊まれる。少々難を言えば、通りに面した部屋なので車その他の音がしてうるさい。でもそれほど気にはならない。

荷物を置いた後、宿の近くの APPETITE というレストランで14時ごろ昼飯を食った。私は Egg Kurma というのを注文したが、出てきたものは日本語で説明すると「カレー」と言うしかない。ゆで卵が、ごろんとまるごと2個入っていた。それと、Plain Lassi を飲んだ。私が面白がっていると、S君は疲れた様子で

「まだ食事の味を楽しむ余裕はないよ …」

と言った。確かに味自体にはあまり感動はなかったけど、インドでの初飯なんだし、もうちょっと楽しもうよ。彼とは少し感覚が違う … 内心そんなことを思いながら、お店のお姉さんが美人だったので思わずそちらへ目が行ってしまった。

明日は鉄道の予約に行こう。

3.1.3 オールドデリーの人々 1997年3月1日(土)

今日はニューデリー駅の予約オフィスへ行き、アーグラークアント駅行きの切符を買うのに午前中全てを費した。非常に疲れた。昼飯は彼の望みで、高いレストランで食べた。彼

とはどうも興味の湧くところが違い、行動を共にしにくく感じていた。午後は別行動ということにし、宿は同じところにもう一晩泊まることにした。

午後はとてもとても楽しかった。まず徒歩でルール・キラへ行った。その途中、裏通りを沢山見ることができ、普通の人々の暮らしを垣間見ることができた。宿の周辺と違って、視界には日本人どころか外国人旅行者らしき人々の姿は一切ない。私に変な日本語や、商売じみたセリフを言うてくる人は誰一人としていない。ときどき挨拶してくれたり、ここはどの辺か尋ねると笑顔で教えてくれたりした。

過去と現在が溶け合っている街並み。人は多いし騒音も凄いのだが、なぜかニューデリー周辺のように腹立たしさが無い。車をよけて通りを行き来するのも、人ごみの中を向こうから来た人とすれ違うのも、何だかとても楽しかった。

ジャーマスジッドが視界に入ってきたときも何だか嬉しかったが、ルール・キラの城壁は圧巻だった。広いせいもあるが、その周りの土地に幾らかの余裕を持たせているので、より荘厳に見える。入口でおばさんに、インド国旗の小さな紙をピンで胸のあたりに付けられた。

「No! No!」

と言ったら、別に金は払わなくても良かったらしく、その小さな国旗はその後、嬉しくてずっと付けたままにしておいた。ルール・キラの中はとても穏やかな雰囲気、ずっとそこにいたいと思うようなところだった。芝生には人々が寝転んで休んだり、展示のある建物の中も人があまりなくて、ゆっくり見ることができた。POST OFFICE が中にあったので、親と亮に葉書を出した。

ルール・キラを出た後、チャンドニーチョウクを歩いたのだが、ミシンをまわしているテイラーは見付けられなかった。しかしあるおじさんに声をかけられ、見るだけと言われて入っていった店でクルターとパジャーマを買った。買ったかったのだが普通どれくらいの値段なのかかわからず、最初 Rs800 と言われたのを Rs600 にまで値切った。しかしそれでも高すぎたらしい。普通、高くても Rs200 ぐらいで上下そろえられるらしいのだ。人にこれを言うと「やられたなあ」と言われてしまうかもしれないが、おじさんとの会話がとても面白かったので、あまり損をした気がしない。楽しい思い出のひとつなのだ。

その後も裏通りをあちこち巡りながら帰ったのだが、通りの名前などろくに表示されていないので、案の定、道に迷った。最後は足の裏にまめができ、自分にギブアップをしてリクシャーをつかまえた。

ニューデリー駅まで Rs25 と交渉して決めたのだが、おつりが無いと言われ、自分も Rs5 を持っていなかったので仕方なく Rs30 で手を打った。しかしそれも全くいやな気分ではなかった。それは、その運転手が Rs10 をくずそうとしてあちこちの人にあってみてくれたからだ。くずせずにどうしようもなかったので、Rs30 払った。

チャンドニーチョウクで Rs600 も使ってしまったので、もうルピーがちょっとしかない。現在手元にあるのは Rs38.5。飯も食えない。宿に戻る前に飲んだ Rs1.5 のチャイは本当にありがたくてうまかった。

さて、今日まで一緒にいた S 君はもうここにはいない。今日、彼はあるインド人青年（名前は聞いたのだが忘れた）と友達になり、彼の家でやっかいになることにしたそうで

ある。北の地方に家があるそうで、スキーもできると言っていた。そのインド人の彼は21才。多分学生だろう。ちょっとしか話をしなかったが、いい感じの青年だった。一緒に来ないかと誘われたが、本当の一人旅をしたかったので別の道に行くことにした。

一緒にここで写真を撮り、手紙でその後の報告をしようと約束し、握手をして別れた。お互い良い旅をしよう！元気で。

3.2 アーグラ

3.2.1 タージ・マハル 1997年3月2日(日)

今日は朝早く宿を出て、アーグラカントへ向かう列車に乗った。窓から眺める景色は、のどかな中にもたくましく生きる人々の暮らしぶりが見えてとても良かった。

アーグラカント駅ではおっさん(リクシャーの運転手)が車両の中まで入ってきて、降りると言われるまで着いたのがわからなかった。え？ここ本当にアーグラカント駅か？見渡したが駅名の表示はない。降りて近くにいた人に聞いたら、そうだと言う。そしておっさんのリクシャーを雇って、今日と明日、アーグラの足になってもらうことにした。しかしこれが、あやしいインドを体験する始まりであったのだ。

まず、今日は日曜日で BANK が閉まっているというのをおっさんに言われて初めて気がついた。どこか両替できる場所はないかと尋ねたら、あるあやしいオフィスへ連れて行かれた。ちょっとときどきしたが、持参した計算機を出して計算したら適正だったので、安心した。

その後、HOTEL AKBAR INN というところへ行ってもらい、そこに泊まることにした。Rs100の部屋は全てふさがっていたが、Rs80の部屋があったのでそこに決めた。しかしここは独房のような部屋で、ヤモリや虫がいたりする、ちょっとワイルドなところである。ベッドは寝るとかゆくなりそうだ。

午後はタージマハルやアーグラ城などをリクシャーでまわった。タージマハルは想像以上の素晴らしさであった。正門に立ったとき、奥行きのある美しい敷地の向こうに白い大きなタージマハルが見えた。一瞬にして、これまでと空気が変わった気がした。完璧である。これは本当にすごい。敷地を歩いて近くまで行くと、さらに想像よりも大きいのに驚かされる。そして美しい。靴を脱いで上がると、足がひんやりとして気持ち良かった。人がたくさんいるのだが、何か落ち着いた気分させられた。

敷地を南門へ戻るとき、ある人に声をかけられた。私はインドに来てからの癖で反射的に、

「No!」

と、きつく言ってしまった。するとそのおじさんは小さな声で

「No...」

と言って、すぐ引き下がってしまった。あれ？と思って目で追うと、どうやらそのおじさんはインド人の観光客で、シャッターを押してくださいと私に頼もうとしたらしかったのだ。これは悪いことをした。でもそこで初めて、いかに私が毎日「No」と言いまくって

いるのかを認識した。もはや人の顔も見ずに、話しかけられたらまず「No!」だったのである。

その後、リクシャーは布屋や大理石屋（ガバメントを名乗っているが、とてもあやしい）により、さんざん買わせようになった。始めは見るだけでお金はかからないと言っておきながら、やはりあれこれ買わせようとしてくる。

大理石の店では、まず石に模様を掘ったり色のついた石をはめ込んだりしているところをみせてもらい、本物と偽物の違いの説明があった。作業をしている人は2人だった。なんだか、私が来たから急に作業を始めたという感じだ。リクシャーの運転手の話ではここまでだったので来たのだが、やはりその後に商売の話がないはずがない。商品の並んだ部屋へ通された。興味がないという次の部屋へ通され、これはどうだ、というのを3回ぐらい繰り返された。次から次へと奥に部屋が現れるので面白かったが、商品はよく見るとあまり良くなかった。ガバメントだからこれだけの品質のものをこんなに安く提供できるんだと言っていたが、非常に嘘くさい。最後はとうとう、働いている人への寄付をねだってきて、私が全く払う気がないとわかると、あからさまに不機嫌な顔になった。

その後、今日あった出来事のメインとも言うべき、宝石店へ連れていかれた。入れ替わり立ち替わり何人かのおっさんや兄ちゃんが出てきて、まさに『地球の歩き方』に出てくるトラブル例のまんまの展開となった。私が店に入ってから、気づかないうちに入り口のドアは閉じられていた。どこから来たんだというような話から始まって、しばらくは普通の話をした。徐々に、鉄道チケットを取ってやるから名前を書けと紙を出されたり、俺は宝石の輸出をしていると言ってあやしい商売の話をもちかけ、奥の部屋へ誘おうとしたり、いらぬと言うのにチャイを出して来て、しきりに飲め飲めと勧められたりした。

それは、実を言うと内心とてもとても面白かった！あまりにも典型的で、多分その時私の顔はニヤけていたに違いない。チャイが出て来たときには、面白くて拍手したくなる程だった。これって飲んじゃいけないんだよなー。Noというところをきちんと押えておけば、これは本当に楽しい出来事ではないだろうか。調子にのっていると痛い目に会いそうだが。

リクシャーは今日 Rs200、明日は Rs100、計 Rs300 ということにしてしまったが、今考えるとこれはだまされているに違いない。ボられたんだろうな。宿に着いてから降りようとした時、ちょっと待てと言われてリクシャーに再び座らされた。おっさんは私に小声で話した。今日は Rs200 だと。おっさん、なんで小声なの？多分、ボってるから宿の人に聞かれたくないんだろう。しかし約束したのは自分だから仕方ないか。

アーグラは大体一日で全部見てまわれるので、もう明日にはバラナシ（ベナレスまたはバナーラスとも言う）へ出発したい。しかし鉄道の当日券が買えるかどうかはわからない。

この宿は部屋がもっと良ければ何日か泊まっていたい。それは、庭にテーブルと椅子が出ていて、あのペナンの弁慶ゲストハウスのように日本人やその他のツーリストと情報交換や談笑ができるからだ。とても楽しい。

明日はボられないことを祈りつつ、眠りにつこう。ヤモリよ来るな。

3.2.2 I'm Korean. 1997年3月3日(月)

朝早く7時半ごろ、アーグラークアント駅へ向かって歩いた。とても心地良く、歩くのを楽しんだ。思ったとおり、昨日着いた時に降ろされた駅はアーグラークアント駅ではないことが判明した。だまされた。

予約オフィスは混んでいて、なかなか順番がまわってこなかった。用紙がなかったので、私はどこにあるのか聞こうと思って並んでいる人に話しかけた。彼は自分が持っていた用紙と一緒に書けばいいよと言ってくれた。そしてその一人旅の韓国人 MUNJUN (私と同じ25才)と一緒にチケットを取ることができ、しばらく行動を共にすることにした。とりあえず待ち合わせ時間を決めて、私は宿へ戻った。

今日は特に予定はなかったので、ツーリストオフィスへ行って地図をもらい、宿の近くを散歩した。実は昨日のリクシャーのおやじが10時半に迎えに来る予定だったが、会いたくなかったのでわざとバス停から遅く帰ったのだ。宿に着いてみるとあのおやじは来てなかった。良かった。

散歩は同じ宿に泊まっている中川君と二人で、裏通りをいろいろと歩いた。デリーの裏通りとは少し違い、きれいできちんとした商店街と、きれいな家に住んでいる人々の町だった。とても良い雰囲気、観光などに行かなくてもそこに何日もいられそうだった。彼がサンダルが欲しいと言うので、ある店で選ぶのに付き合った。その親父はとても親切に細かな要求を聞いてくれた。いろんなサンダルを出してきては彼に履かせる。そして結局気に入ったのがなく、やっぱり買わないということになった。でもその親父は、そうか、別にいいよという返答だったのである。これは新鮮だった。インド人が怒らなかった。無理やり買わせようとしてこなかった。アーグラークは人が悪いと思っていたが、それは観光地のせいなのだ。こういう、普通の人たちが利用していて観光客があまり来ないようなところでは、ボッタくるようなことはしないのだろう。当たり前のことのような親父の態度が、とても気持ちが良かった。

しかし当然ここはインドで

「ハロー、サー。」

と言って手を出しながらずっと付いて来る子供はいた。また、軍関係の施設だと思うが、学校を含んだ広いきれいな土地へ2人で足を踏み入れた。軍の家族が住んでいる特別な地区のようなものだと思うが、そこは地図には何も載っていない。子供たちが合掌して

「ナマステー。」

と挨拶してくれた。でも入っちゃいけないみたいだ。出るところで呼び止められて、パスポートを見られている質問された。ちょっと怖かったが、日本人の旅行者だとわかると解放してくれた。入り口の守衛は我々に気づかなかったのだろうか。それとも、あまりにも堂々と入って行ったから呼び止めなかったのかな。

MUNJUN と予約した列車は TUNDLA 駅発なので、そこまではバスを利用した。それはそれは窮屈で、つらいバスの1時間だった。あれはもういやだ。

今、TUNDLA 駅の待合室でこれを書いている。明日はバラナシだ。

3.3 バラナシ

3.3.1 ガンガー 1997年3月4日(火)

疲れたあー。列車がムガルサライ駅へ着いたのは午前11時頃だった。そこからバスに乗ったのだが、また前と同様の混雑ぶりで、立ったまま1時間以上かかった。その後、オートリクシャーを利用したが途中までしか行けず、ガンガーを見るまでにずいぶん歩いた。昨日会った1人旅の女の子とも列車から一緒だったが、ガンガーまで行く途中で、はぐれてしまった。Rs5 借りてるのに。

MUNJUNと二人で宿探しをし、HOMY GUEST HOUSE というところの、ドミトリーに泊まることにした。一晚 Rs25 だそうだ。ここは周りが静かでいい。今までは宿の近くはいつもうるさかった。宿で食べたチャーハンはとても旨かったが、夕食に外のレストランで食べたカレーはあまり旨くなかった。

そして、印象的な出来事がひとつあった。宿で記帳するとき、MUNJIN と私が韓国人と日本人であることを知った宿のおやじさんが

「はあ！ 韓国人と日本人が一緒にいるのか！」

と言って驚いていた。私たちは

「え？ 何驚いてんの？」

という感じだった。どうやら韓国人と日本人は仲が悪いと思われているようだ。

「一緒に旅してるのか。それはとてもいいことだ。うん。」

とおやじさんは言った。そんなに驚かれて、私たちはキョトンとしていた。

この宿のおやじさんはとても良い人だ。ここなら、あまり他の宿へ行こうとは思わない。しかし今日は本当に疲れた。しばらく何もしたくない。あ、ヤモリ君が天井にいる。虫の鳴声もするが、窓の外じゃなくて部屋の中で鳴いてる。うるさい。

3.3.2 夕暮れのガート 1997年3月5日(水)

夕暮れ時、ガートで子供達が凧上げをしている。兄弟らしき2人が私の座っている目の前を右へ左へと走り回っている。だんだん高く上げられるようになり、歓声をあげている。昔、自分もこのようにしていた頃があったであろう。近頃、日本では正月ですらこのような光景を見ることは無くなった。ガンガーの河沿いはとても落ち着く。ボートの客引きやハッパ売り等がいなければもっと良いのだが。

今日はガートをずーっとみて歩いた。マニカルニカーガートでの火葬も見たが、なぜだか特に何も感じられなかった。明日、朝早く起きてまた見に行くことにしよう。

ラームナガル城付近からの景色がとても良いというのを、アーグラの宿で聞いていたので、歩いて行ってみた。2時間くらいかかったが、途中の町がなかなか面白かった。その後、バナーラスヒンドゥー大学へ行った。やけに広いのに建物も少なく、あまり大学という感じはしなかった。しかし落ち着いた雰囲気があり、しばらくスタジアムでボーっとしてきた。大学の中にも牛がいた。

やはりバナナシはガンガー付近が一番良い。ガートではクリケットをして観客ともども盛り上がっていたり、子供が走り回っていたりしてほほえましい。

さて、明日はどうでしょうか。

3.3.3 沈黙 1997年3月6日(木)、7日(金)

記述なし。

3.3.4 無力の正露丸 1997年3月8日(土)

昨日まで下痢で倒れていた。バナナシに着いたのは4日、その日は疲れてただ寝た。5日、歩いてラームナガル城とBHU(バナーラスヒन्दゥー大学)へ行った。その翌日の6日、映画でも見ようかと思ったが、朝から何だか腹の調子がおかしい。トイレに行きたくなり、昼ごろ急いで宿へ戻ってトイレに入ったら、水のような便が出た。ひどい下痢だ。その後、体から水分は失われ、徐々に衰弱していった。

夜に宿のおやじさんが心配して見に来てくれて、

「水をたくさん飲んで、腹の中のものを全部出せ。」

と言われた。しかし、水を飲み過ぎて腹を冷やしたのが原因だと思われるので、水を飲めば飲むほど治るのが遅くなる気がした。でも水分は必要なので、一回に一口ぐらい飲むことにした。トイレに何回も通った。飯は食べられなかったので腹の中は空っぽだったが、一向に良くならなかった。ある時、眠っていると誰かに腕をつかまれて揺り起こされた。目を開けると、おやじさんが心配そうに私の顔を覗き込んでいた。そして、いいと言ったのだが医者を呼んでくれた。医者に処方箋を書いてもらって薬を買い、飲んだらすぐ良くなった。ものすごい効き目だ。いやー、しかし大変だった。

東南アジア旅行に続いて、今回もまた医者にかかってしまった。でも治って本当に良かった。今日は久しぶりに外へ出た。日差しがとても強く感じられ、歩くのが少々きつかった。両替のため State Bank of India へ行ったが、現地の人達と乗り合わせのオートリクシャーで、Rs10で行けた。帰りは Bank で会った日本人と一緒にサイクルリクシャーでゴドウリヤーまで乗った。それも Rs10 だった。その日本人の彼は現地の人といろいろ話をしてるらしく、面白い話を沢山話してくれた。宿に戻ってからはずっと今後の予定を考えていた。

今日、隣のベッドに新しい日本人が来た。南の方から旅して来たそうで、乗っていた列車が脱線事故を起こしたそうだ。結構大きなニュースになったようで、新聞の一面に載ったらしい。全然知らない。彼の話によると、プリーはとても良いところのようだ。バナナシよりプリーに多く行ったほうが良かったかなと思う。でも、スーリヤ寺院だけは一目見なければ。

明日は鉄道予約オフィスへ行ってチケットを取るつもりだが、取れるだろうか。それから、エアインディアへ電話してリコンファームしなければならない。今日、エアインディアのオフィスへ行ったが閉まっていた。結局電話だ。大丈夫だろうか。

鉄道の予約ができなければ、予定が大きく変わる。明日が勝負だ。

3.3.5 100ルピー 1997年3月9日(日)

今夜がバラナシ最後の夜だ。ほとんど何もしていないのに6泊もしている。早く抜け出したいと思いつつ、結構居心地が良いのかもしれない。

今日はバラナシ駅へ行って今夜発のチケットを取ろうとしたが、取れなかった。困ってしまい、どうしようかとベンチに座り込んで次の案を考えていると、職員の人が出て来て親切に相談に乗ってくれた。明日 10:10 発で翌朝の 7:00 頃着くという列車を教えてもらい、そのチケットを取った。ムガルサライ駅発だが、一番早いそう。本当に嬉しかった。その職員のおじさんは表情があまり変わらない人だったが、なんていい人なんだろうと思い、とても感謝した。

宿に一旦帰ってから、サールナートへでも行こうかと思い、再びバラナシ駅へ向かった。ただし徒歩で。Mall 通りの方にあるファーストフード店へ行って見たが、ちょっと思っていたのと違って。サールナート行きのバスを見付けるのが大変だったので結局サールナートへは行かなかったのだが、それから宿に帰るのがとても大変だった。

駅や歩いている途中の店でミネラルウォーターを買おうとしたが Rs100 札しか持っていなかったのも、みんな

「つりがない。」

と言って売ってくれなかった。のどが乾いてどうしようもなかった。つりがないとはどういうことだ。ここにお金がある。そして相手は水を持っている。それなのに誰も私に水を売ってはくれない。Rs100 札とは本当に金と言えるのか？ インドに対する怒りがこみ上げて来た。

車のクラクションも、「ジャパニー！」とかけられる声も、私をいらいらさせた。腹が立って、クラクションを鳴らした車に向かって

「うるせー！」(日本語)

と何度も叫んだ。細かい金がないので、リクシャーにも乗れない。仕方なく長い道のりを歩いた。途中何度か日陰で休みながら、ひたすら歩いて歩いて歩き続けた。あるところでサイクルリクシャーのおっさんに呼び止められ、おつりはあるかと聞くと

「私の知ってる店でくずせばいい。」

と言われた。連れて行かれた店で Thums Up を 1 本飲んだ。とてもうまくて、体に水分が浸みわたる感じがした。これでようやく細かいお金ができた。その後はそのサイクルリクシャーに乗ることにした。リクシャーのおっさんはこぎながら「サラサ、見るだけ。」とか「ガバメントの店。」とか、今までさんざん聞いてきた言葉を吐き続けた。とても疲れていたのも、それにノーと返答するのも億劫^{おっくう}だった。

ガートに着いて腰を降ろしていると、子供が絵葉書を売りにやって来た。安かったので何枚か買い、絵柄になっていたヒンドゥーの神の名をいくつか教えてもらったりした。他の子供たちが売りに来ても、その子が

「この人は僕から買ったからもう買わないよ。」

というようなことを（多分）言って、ガードしてくれたのはうれしかった。

しばらくすると蛇使いが現れて、

「ハロー、ジャパニー！」

と言って、頼んでないのに勝手に目の前でコブラを出して笛を吹き始めた。周りには私を中心に人だかりができ、そのおやじはしきりに写真を撮れ撮れとジェスチャーをする。そして最後に籠のふたを差し出して言った。

「マネー。」

頑として払わなかったら、ヒンドゥー語で何か捨てゼリフを吐いて去って行った。その後はいつも通りボートの客引きがやって来たり、別の子供達が絵葉書を売りに来たりした。なんで落ち着いて座らせてくれないんだろう。放っというほしかった。宿近くでのクリケットを少々見物した後、宿のベッドへ戻った。

明日は朝早い出発だ。さらばパラナシ。長かった。早くプリー、コナーラクへ行きたい。あ、それから今日、エアインディアに電話してリコンファームしたが、意外に簡単だった。

3.4 コナーラク

3.4.1 脱出 1997年3月10日(月)

長い列車の旅だ。今日は朝7時に宿を出た。MUNJUNが宿の門の前まで見送ってくれた。ガンガー沿いを少し歩いてから、ベニヤバーグまで徒歩で行った。バスでムガルサライまで行こうと思ったが、止まっているバスを見つけた辺りで、オートリクシャーの運転手がたくさん寄って来た。その中に、なんとRs10でいいというおじさんがいたので、それに乗ることにした。

この旅行中、どこでも必ず最後に良いこと、思い出深いことがひとつはある。今日のオートリクシャーはとても楽しいものだった。Rs10というのは、おそらく現地の人と同じ料金なのだろう。たまにこういういい人に会えるのは、とても嬉しい。

リクシャーは途中で人を拾いながら駅へ向かった。人の集まっているところに何箇所か寄り、おじさんが

「ムガルサライにいくぞー。」

と声を上げる。仕事へ向かう人々、通学の小さな子供達、その他いろいろな人が同乗者となり、降りていった。まさにインドの日常を見せてもらった。こんなに面白い体験を1時間もしてRs10は安い。いつも町中の移動でRs15ぐらい払っていたのがくやしい。なんて差だ。

列車は1時間程遅れたが、無事車中にいる。朝、ムガルサライ駅でトーストとコーヒーの食事を取ったが、久しぶりに飲むコーヒーはとてもおいしかった。車中でもチャイだけではなく、

「コーヒー、チャーイー。」

と叫ぶ売子が行ったり来たりしている。南へ向かうに従って、コーヒーも良く飲まれるようだ。

ムガルサライでフルーツケーキ(スポンジケーキ)とミネラルウォーターを買い込み、車中で横になっている。体の調子はいたって良好である。少々車内は暑い、扇風機が回っている。夜に腹を冷やさないようにせねば。

明日はスーリヤ寺院が見られる。

3.4.2 太陽神スーリヤ 1997年3月11日(火)

列車が止まっている。7:05着のはずであったが、今は8:25。辺りは霧がたちこめていて、あまり遠くが見えない。視界50~100mといったところだろうか。太陽よ、照ってくれ。これから太陽神スーリヤの寺院を見に行くのだから。到着があまり遅くなると、予定が狂う。ハウラー(HOWRAH)行きの今夜のチケットが取れなくなるかもしれない。

8:40、列車は動き出した。しばらくすると車中に日光が差し込んできた。でもまだ空は白い。晴れてくれ。しかし腹減ったなあ。

プリーに着いてから今夜のハウラー行きのチケットを取り、駅近くのほったて小屋で飯を食った。現地の人しかいない店で、ダールとプリーとチャイを注文したのだが、値段が全部でなんとRs4。なんて安さだ！それからコナーラクへ行くため、サイクルリクシャーをつかまえてバス停へ向かった。途中、道端で魚を売っているのを見かけた。久しぶりに魚を見た。今までのところとは雰囲気ちょっと違う、ここは漁村だ。

| | | | | | | | | | | | | | {

頭にきた。やはりここはインドだ。プリーから1時間程ぎゅうぎゅう詰めのバスに乗って、スーリヤ寺院に11:30頃着いた。寺院の脇で手招きする男がいて、何やら7つの像が並んだ小さな建物の中へ誘われて入ってみると、お祈りを勝手にされ、

「51ルピー。」

と言われた。とても腹が立った。何か口ウソクのようなものを使ったので、一応Rs10だけ置いてさっさと出て来たが、一気に嫌な気分になってしまった。プリーに着いてからここまで、とてもいい雰囲気のところに入っていたのに、観光地はやはりこうなってしまうのか。悲しい。さらに、馬車をかたどっている寺院の車輪は思ったより小さく、期待していたほどの感動はなかった。あまりにも想像を膨らませすぎているのかもしれない。そして、本殿にあった本尊はイギリスが持って行ってしまっている。大英博物館にあるそう。これも腹が立った。

また、これを書いていると若者が3人来て、一緒に写真を撮ろうと言われた。彼らのカメラで撮ったのだが、あれはただ本当に私と写真を撮りたかっただけなのか、何か商売に利用するのはわからない。金は取られなかった。

考古学博物館を見た後、寺院近くのレストランで食べたドーサは安くて大きかった。スナック感覚で頼んだのに、一食分あって食べるのが大変だった。

| | | | | | | | | | | | | | {

帰りのバスはまた混んでいたが、スーリヤ寺院から出るので座ることができた。ぎゅうぎゅう詰めの中、しばらくすると足元で何かが動いた。バタバタバタ…ええ?! びっくりして足を上げて見ると、そこには鶏がいた。うわ! なんだ? これ! どうやら隣りに座っているおばあさんのものらしい。何にも入れないでそのまま持ち込んだのかよ。その後はおばあさんが捕まえてずっと持っていた。あーびっくりした。

海だ! もう夕暮れ時だが、久しぶりに海の水に触れ、頭、手、顔、足に浴びた。なんて気持ちいいんだー。もっとここにいたい。これまでのインドのイメージとは違う場所だ。海岸は遠浅で、しかもほとんどビーチリゾート化していない漁村である。うーん、こんなところがあるならもっと早く来て長居したかった…。やはり海はいいねえ。

列車は21:00発だからまだ時間がある。しばらくここでのんびりしよう。でも、子供達にボトルをねだられたり、もの売りがしつこく来るのはやはりここもインドだということだ。

え? 駅の Waiting Room って金取んのか? プリー駅に2ndの Waiting Room があったので入ってみた。トイレに行ってからちょっと顔と手を洗って髪をとかした。今までの駅にもあったかどうか知らないが、初めて使って、

「うーん、便利だ。」

と感心していた。しかし入口にいた人がやって来て、

「2ルピー。」

何かちょっと嫌な気分だ。だったらもっと派手にシャワーを頭から浴びて、体中洗うんだっただ。しかもうんこ出なかったし。損した。

駅でフルーツケーキと水を買った。鉄道の旅にこのフルーツケーキはなかなか良い。でも今日は前買った時より高く、Rs20した。今回の席は寝台が狭い。足をまっすぐ伸ばせない。ちょっと小さめの席にあたってしまったが、これがインド最後の鉄道の旅だ。

さて、明日は亮に会えるのか?

3.5 カルカッタ

3.5.1 サダルストリート 1997年3月12日(水)

無事、亮に会うことができた。

今日は朝9:00頃 HOWRAH 駅に着き、歩いて地下鉄の駅まで行った。カルカッタは今までの中で一番都会である。なんか整い過ぎている。よくカルカッタからインドに入るとカルチャーショックを受けると言うが、そんなことはないと思う。

午前中は宿探しに奔走した。何軒かまわったがみんな FULL であった。Blue Sky Cafe の横にあるこの HOTEL PALACE に10時半ごろ来ると、部屋はあったが高い部屋しか空いていなかった。あきらめて出ていこうとすると、

「1時間程たったらもっと安い部屋を提供できるよ。」

と言われた。そこで、近くで暇をつぶしてから再び訪れた。

この部屋はRs175。今まで泊まった中で一番高い値段だが、部屋は最低である。正確に言うとも部屋自体ではなく、この値段でシャワー、トイレが共用になっていることだ。しか

し他の部屋には付いているようなので、部屋の外にあるが実質的には私専用となっている。しかしこれがひどい。照明はつかないし、シャワーは少ない本数の水が変な方向に勢い良く出て全然シャワーじゃないし、頭を洗っている最中に水が止まったりする。2晩泊まると言ってしまったから泊まるが、なんてひどいんだ。値段が高すぎる！でもベッドは2つある。無駄だ！カルカッタは好きになれそうもない。

亮とは12:00に観光局で待ち合わせだった。宿探しのために遅刻してしまったが、亮は待っていてくれた。不思議な気分だ。懐かしい顔がインドにいる。思わず手を差し出し、握手した。ここへ来るまでにいろんな面白いことがあった。ここから旅を始める彼に、話したいことが山ほどある。

エアコンが効いていて涼しい観光局の中に入り、しばらく話をした。この観光局は全然うるさいことを言ってこないの、のんびりできていい。2人でしばらく話していると、台湾から来たという旅行者が話しかけてきた。彼は東京の地下鉄路線図のハンカチを持っていた。どこで買ったんだろう。日本語の勉強をしているそうで、いろいろと日本語を聞かれた。インドで台湾人に日本語のレクチャーするとは思わなかったな。

観光局を出てからは、2人でヴィクトリア記念堂へ行った。これも白い大理石の建物だが、ヨーロッパスタイルだ。中は博物館か美術館のようになっている。でもこれまでの旅の話をしながら見ていたので、何を見たのかあまり印象に残っていない。

アイスクリームがうまかったから是非食べてみると誰かに言われたのを思い出したので、道端のアイスクリーム屋で初めて買って見た。選ぼうとしたら、勝手にスプーンを差して「ほら」と出された。あまりうまくなかった。私たちが買ったら、その兄ちゃんもアイスクリームのワゴンとともに風のように姿を消してしまった。なんだあのアイスクリーム屋は。あまりの素早さに、2人でちょっと笑った。

亮は今夜の列車でバラナシへ向かった。その後、私は一人で街をぶらぶらし、映画『ラジャ・ヒンドゥスタニ』を見た。これはインドで、なんと99週間もロングランしている映画だ。ポスターに99と書いてあるのでそう思ったのだが、もしかしたら99週間という意味ではないかもしれない。でも今インドで大ヒットしている映画には違いない。インドでは誰に聞いても知っていて、話が盛り上がる映画なのだ。途中ちょっと間延びして疲れたが、最後はまた盛り上がってハッピーエンドだった。場内の人々の反応も面白かった。映画だけでなく、場内の雰囲気も楽しい。でも場内はもっともっと盛り上がるかと思っていたのだが、それ程でもなかった。

帰りに宿の前で食ったサモサとチャイはとてもうまかった。

3.5.2 Hero No.1 1997年3月13日(木)

今日は南の方にある大きな池の公園(名前がわからない)へ行った。とてもいいところだった。その近辺も歩いたが、日本の住宅街に似た、落ち着いた雰囲気の町だった。池では沐浴している人達や、日陰で寝ている人などがいた。池の端から端まで歩いて30分くらいかかったが、歩いて良かった。

カシミール州の物産店では、どうも日本人が馬鹿にされているような気がして、少し不

愉快だった。その店で土産としてカシミールの布を1枚、宿近くの店でダージリンティーと音楽テープを買った。

宿の近くでダージリンティーを買った直後、MUNJUN と再会した。まあ、カルカッタといってもツーリストはこの辺に集まって来るので、会ってもちっとも不思議ではないのだが。元気で良い旅を！

夜はまた映画を見に行った。『Hero No.1』という映画だ。なかなかクオリティーが高いと最初は思ったが、ストーリーがほとんどないに等しい。セリフもわからないので、みんなが笑っているところで笑えないのがくやしかった。でもものすごいところでロケしている映画だ。エッフェル塔の前で踊ったりしている。ヨーロッパの町中でロケした映像では、撮影を見物している人々が思いっきり映っていて笑えた。喫茶店のテーブルで2人の俳優が演技していて、そのまわりは全部一般の人々なのだ。みんな俳優の演技をじろじろ見ている。今回は2階席で見たが、この前見た1階の方が良かったと思う。2階はちょっと金持ちそうな家族しか来てなくてつまらなかった。

カルカッタは屋台の飯が充実している。タイの屋台にはかなわないが、安くてうまい。それに街がきれいなので、今までのところよりも心理的に安心して食べられる。タクシーの激しい往来がなければとてもいいところである。やはり飯のうまいところはいい。もっといろいろ食べたいなあ。

明日の今ごろは、もう飛行機の中だ。

3.5.3 最後までインド 1997年3月14日(金)

インド博物館にいる。広いのだが、あまりこれといって注目すべきものがない。まさにただの暇つぶしに来るところという感じだ。

ただ、わざわざ見に行ったコナーラクのスーリヤ寺院から運び出されて、ここにあるものがいくつかある。ちょっと腹が立ったのは、スーリヤ寺院前面の、欠けていた馬の頭部がここにあるということだ。なんでここにあるんだ！いくつかの像も持って来ちゃってるし。元あったところに戻せよ。それができないとしても、コナーラクの考古学博物館に置いておくのが正当じゃないのか？

しかしカルカッタは日本人多いなあ。町中を歩いていても、どこかの店に入っても、何を見に行っても日本人を見かける。

| | | | | | | | | | | | | | | {

地下鉄の駅で尾崎君という日本人と一緒にあって、今空港にいる。手続きがやっと終わった。搭乗券をもらうカウンターでの混雑ぶりというか、渋滞ぶりはすごかった。なかなか前に進まない。日本人の女の子達、シートへの記入ぐらい並んでるうちにすませといてよ。なんでそんなに時間かかってんの？

また、搭乗手続き前に飯を食おうということで、彼と空港内のレストランへ行ってみたのだが、いかにも高そうだったので入るのをやめた。他にないかとエレベーターで上に行くと、スタッフオンリーの食堂があった。スタッフじゃないけどいいかと聞くと、かま

わないというのでそこで食べた。そこは本当にインド人スタッフばかりで、搭乗客らしき人は一切いない食堂だった。二人でラッキーだねとか言いながら喜んでた。

「まさか、値段もスタッフオンリーで、俺らは高いってことはないよね。」
と冗談で言っていたら、なんとその通りだった。

やはりここはインドだ。最後まで気を抜いてはいけない。

3.5.4 いつかまた 1997年3月15日(土)

帰って来た。いつものことだが、あまり懐かしくない。2週間だから当然かもしれないけど。周りを見ると、ちらほらとインドから帰国したらしき汚い格好をした人がいる。私も結構汚れている。飛行機の中で飲んだビールはうまかった。日本食も食べたい。

一緒だった尾崎君は半袖に短パンで、荷物も海外旅行とは思えないほど少なかった。あれはすごい。しかも、彼の家は北海道だ。成田で一息ついてから、彼と別れた。彼のおかげで、空港内や帰りの飛行機も楽しかった。

果たしてインドとはどんな国なのか、自分はどう思うのか、これからはっきりして来ると思う。今この瞬間は正直言ってインドに戻りたくはない。「No!」と言いまくるのには疲れた。プリーには何日かいたかったが、他の場所は非常に疲れる。旅の途中で出会った人々は今ごろどうしているだろうか。インドには当然多くのインド人がいたが、多くの日本人もいた。それぞれにインドに対する思いがあるだろう。

ある本によると、インドは初め打ちのめされて帰って来て、しばらくするとまた行きたくなってしまふ。そしてまた出かけて、また打ちのめされて帰って来る。でもまたなぜか気になってしまうという国なのだそうだ。確かに魅力がたくさんある国だ。だが今、私にとって初めてのインドの印象を一言で言い表すならば、

「疲れた。」
これに尽きる。

第4章 韓国料理に舌鼓 ～ 韓国 ～

この旅行の後、私は再び刺激的な旅を熱望するようになる。

4.1 仏国寺と石窟庵 { 慶州 {

4.1.1 地下鉄で居眠り 1997年12月28日(日)

久しぶりの旅行だ。福岡空港でチェックインの時、ある荷物がカウンタの前に置きっぱなしになっていた。アジアナ航空の人が気づき、それをどけて並んでいる人の後ろの方へ持っていったのだが、韓国人のおばちゃんがそれを持って私の前に置いた。そして割り込んだ。日本語がわからないらしく、どうしようもなかった。アジアナのお姉さんは韓国語ではなく日本語で

「みなさん並んでるんですから。」

と一応ひとこと言ったが、効果なし。おばさんパワーに圧倒されてしまった。おいおいアジアナ、韓国語しゃべれないのか？ でもかわいいから許す。

飛行機が離陸するあの瞬間は、やはり気分が高揚する。さらば日本。心の中で叫んでしまふ。とても楽しい。所用時間1時間45分であっという間にソウルだ。一応、機内食も出た。ちょっとした寿司のセット+デザート。

ソウルに着いてから地下鉄に乗ったのだが、地下鉄路線図の駅名がハングル文字+英語読みの表記だったのでとてもわかりにくかった。『地球の歩き方』を思いっきり広げ、照らし合わせながら行き先を確認した。判読して切符買うまでにえらく時間がかかった。

韓国は町のパーツが日本と同じだ。歩いている人も日本人と見分けがつかない。何のわくわく感も緊張感もなく、外国に来た感じがしないのだ。(そうか、インドは空港出たとたん「インド」だったもんなあ。) そのせいもあって地下鉄では1時間以上眠りこけてしまい、気がついたら乗り過ぎて全然どこかわからんところにいた。とりあえず降りてまた路線図にとらめっこし、30分ぐらいかけて引き返した。

鐘路3街^{チョンノサムガ}で降り、地上へ出てみた。あまり感動がない。露店がずらっと並んでいるのは楽しいが、何かもの足りない。新宿を歩いているような感じだ。あまり寒くもない。看板はハングルばかりで全く何が何だかわからない。McDonald's と KFC だけは良くわかる。とりあえず宿を探そうと思いき(その時点で17:00 ちょい過ぎ) 大元旅館^{テウォンヨクアン}を目指した。

そこでは思いっきり日本語が通じ、部屋も空いてると言われた。シングルを頼んだら、

そこから5分ほど離れたところに連れていかれた。系列旅館か？旅館の名前を控えるのを忘れたんで、どこに泊まったのかわからん。1泊11,000ウォン。一晩だけ泊まることにした。前日遅く寝たのでとても眠い。

この旅行、面白くなるのだろうか。

4.1.2 コソップス・トミノル 1997年12月29日(月)

8時ごろ起き、顔を洗いに部屋を出たら日本人に会った。彼も昨日来たらしく、ソウルの町に私と同じような印象を持ったそう。何かつまらない。彼は、予定より早く帰ろうかと思ってると言っていた。私はまだ眠く、9時半ごろまで部屋で寝ころんだ。

ソウルにはまた戻ってくるので観光は今日せず、^{キョンジュ}慶州へ行くために高速バスターミナルへ地下鉄で行った。ソウル高速バスターミナルは京釜線ターミナルと嶺東・湖南線ターミナルがあり、慶州行きは京釜線の方なのだが、『地球の歩き方』に載っているターミナル図とその中の構造図は、京釜線と嶺東・湖南線が逆になっている。逆の方に行っちゃったじゃないか！

さて、切符売場ではまたハングル文字に悩まされた。ここでは『旅の会話集 韓国語』がとても役に立った。持って来て良かった。切符を買う時、初めて韓国語をしゃべった。聞き返されることもなくすんなりと切符を手にした時、「旅の楽しみ」を少し感じた。なんか嬉しかった。

バスが出るまで少し時間があつたので、売店でパンと缶紅茶を買って慶州行きのバス乗り場でベンチに座っていた。そしたら韓国人の女の人が2人、私に話しかけてきた。何を言われたのかわからず、

「すみません、わかりません。」

と言ったら

「日本人ですか？」

と聞き返された。彼女たちは片言の日本語で

「家が大変でアルバイトをしています。このチョコレートかキャンディを買ってくれないませんか。」

というようなことを説明した。1,000ウォンでチョコレートを1枚買った。多分、相手がおっさんやおばちゃんだったら買わなかっただろう。美人は得だねえ。

バスに乗り込み、途中休憩1回で4時間半かけて慶州にたどり着いた。着いてすぐ^{ハンジンチャンニョグァン}韓進莊旅館へ歩き、簡単に見つけた。部屋もあり、すんなりと慶州での宿が決まった。トイレ・バス付きで1泊20,000ウォン。とにかくきれいだ。布団2人分敷けるだけの広さがあり、当然オンドル。トイレトーパー、タオル、石鹸まである。お湯も出る。まともだ。壁には絵が掛かってるし、屏風なんてあるし、引出し付きの台に乗ったちゃんと映るTV。極め付けは全身どころか部屋全体が写る、布団と同じくらいの大きさの鏡…。なんて快適なんだあー。

こんないいところに泊まれるとは。日本円に換算すると2千円だぞ。この快適さならずっといられる。いや、住める。か、感動的だ…。「莊」旅館レベルって、ただの旅館と

こんなにも違うのか。驚いた。

今日はロビー（部屋のすぐ隣り）で他の旅行者と話しをして過ごし、夕食はその多国籍メンバーみんなで近くの食堂へ行った。韓国へ来て初めて食堂に入った。壁のメニューはハングル文字だけで、さっぱりわからない。『地球の歩き方』に折り込みの、写真付き韓国料理紹介を使って注文した。これはとても便利だ。

スンドウブチゲというもので、「とろみのない麻婆豆腐アサリ入り」といった感じだった。でもこれ、なんかちょっと違うんじゃない？ でもあったまった。ごはん、キムチその他のつけ合わせがいろいろ出て来た。最後に高麗人参茶（以前、新川さんにもらったのと全く同じもの）を出してくれた。でも、まだ「韓国に来たぞ！」という感じがしない。明日はようやく観光のはじまりだ。

4.1.3 古墳のある景色 1997年12月30日(火)

今日はカメラとガイドブックを上着のポケットに突っ込み、朝9:00ごろ出発した。市内バスは座席バス102に乗ったが降りるところがわかりにくく、途中ちょっと不安になった。しかし着いてみるといかにも観光地のバスロータリーというところで、とてもわかりやすい。

降りる時に日本人のおじさんに声をかけられ、その人たちと一緒に^{フルクサ}仏国寺へ向かった。メンバーは、韓国通らしい大阪のおっちゃん、芸大で建築を専攻している先生と助手、そして私の4人。仏国寺では観音堂の観音像のバックにある絵に魅きこまれた。また寺にはあらゆるところに龍があしらってあり、色も派手すぎず堂々とした建物だった。芸大の2人が仏国寺出口の門を見て

「かるやかで、横に伸びがある。とてもいい門だ。」

と評していた。また、寺の石の使い方が面白いと言ってたり、専門的な話しを2人でして、横で聞いているのが面白かった。

仏国寺の中で大阪のおっちゃんとははぐれてしまい、その後会うことはなかった。3人で^{シルラ}新羅食堂で昼食をとり（ビールがうまかった）、午後は^{ソックラム}石窟庵へ向かった。石窟庵行きのバスを降りてから石窟庵までの徒歩の道は、お2人いわく

「日本ではこんな風にはできない。」

という良いつくりのものであった。2人がいなければ、私は何とも思わなかっただろう。

石窟庵自体は仏像の存在感は素晴らしかったが、

「え、これだけ？」

という感じだった。ガラス越しにしか見れないようになっており、また写真を撮るのも禁止なので、じーっと見てきた。

それから、タクシーを拾って3人で^{ユフンコンウォン}古墳公園へ行った。タクシーはメーター制で、ボられなかった。古墳公園は今日一番のヒットだった！何かちょっと不思議な世界へ入り込んだ感じがした。大きな土の盛り上がりが連なっている景色はすごい。遠くの山と古墳とがひとつの景色となり、夕暮れ時という効果も加わってとても幻想的であった。

お2人は写真を撮りまくっていた。

「シュールだ！」

を連発し、

「雪が降ったら、緑だったら、もっとシュールだ。」

と言っていた。それに比べて東洋最古の天文台と言われている^{チョムソンデ}膽星台の方はあまりパツとしなかったが、膽星台へ向かう途中の古墳群はまた素晴らしかった。

その後はちょっと民家が集まっている裏路地を2人の批評を聞きながら巡り、サムゲタンの店、^{ファンニョン}黄龍を目指した。17:00 ちょい過ぎにようやくたどり着き、そこで3人で酒を飲みながらサムゲタンを食べた。いや～、とてもうまかった！最高だ！

店を出ると外はもう暗くなっていた。少し商店街や市場をぶらつき、駅の近くで2人と別れた。2人は明日、^{アントン}安東へ行くということだ。タクシーを借りているそうで、結構金かかってるらしい。一緒にどうかと誘われた。ただ、朝7:00に2人の泊まっている慶州朝鮮ホテルへ来いというのがつらい。多分起きられませんか。

行きたいけど、他にも行きたいところあるしなあ。とりあえず「行きます」とは言っておいたが、7:00にホテルに来なかったらもう来ないもんだと思って出発して下さいとも言っておいた。2人と別れた後、駅で時刻表を買って宿に帰った。

今日は2人につられて写真を撮り過ぎてしまった。もうフィルムがない。しかし、楽しい一日だった。慶州が好きになった。古墳と現代の街が一体となっているのは面白い。歴史のある街というのはやはりいい。一緒だった2人は東京芸術大学のK助教授とKさん。2人の話を聞きながらの観光も面白かった。

さて、宿に帰ってから時刻表と『地球の歩き方』とを使っているいろとプランをたてた。さんざん悩んだが、明日は2人には会いにいかないことにする。やはり、もう1つの世界遺産、海印寺へ行こう。何とかスケジュールに入れられた。バスの乗り継ぎがちょっと面倒だが、何とかなるだろう。もう1日あればなあ。やっぱり1週間は短いよ。旅程、欲張り過ぎかな？ソウルもあまり見れないかもしれない。

とにかく明日は慶州におさらばだ。ちょっと名残り惜しい。素晴らしく居心地のいいところだ。商店街はかなり充実している。市場の中の食堂で食べたかった。時計屋がいっぱいで、約50メートル毎にある。なんでこんなに多いんだ。時計屋ってそんなに儲かるのかな？街を歩いているお姉さんはみんな美人に見える。うーん、いいところだ。しかしどうも緊張感がない。外国にいる気がしない。明日はリコンファームせねば。あ、明日って大晦日じゃん。

4.2 八万大蔵経と板庫 { 海印寺 {

4.2.1 八万大蔵経 1997年12月31日(水)

今日は忙しかった。朝9:00ごろ宿を出て、まずは郵便局へ向かった。絵はがきを5枚買いい、日本へ年賀状を出した。郵便局にタダでもらえる卓上カレンダーがあったので、2つもらってきた。それから慶州駅の売店でテレフォンカードを買い、アジアナ航空ヘリコンファームの電話をかけた。

それから気になっていた^{ファンナン}皇南パンへ行ってみた。慶州のおみやげとして有名なパンの店だそうだ。建物を見つけて正面に近付くと、入口が2つあって店が2つに分かれている。どちらも同じに見えるが、何がちがうんだ？ 客がいなかったんで入りづらかったが、とりあえず右のドアを押して入った。20個入りを買ったが、それとは別にできたてを1個手渡ししてくれた。温かくてとてもうまかったが、パンというより饅頭である。20個は多い…。今、食べきれずにまだ残っている。

高速バスで大邱^{テグ}へ向かったのだが、大邱はバスターミナルが複数あって、それぞれ離れた場所にある。やっかいた。高速バスが着いたのは東大邱^{ドンテグ}駅近くのバスターミナルで、海印寺^{ヘインサ}へ行くには西部バスターミナルへ行かなければならない。市内バス12番に乗った。この市内バスの終点が西部^{ソブ}バスターミナルだと思っていたのだが、最後に着いたところはバスが集まってはいるが西部バスターミナルではなかった。実は途中にあって、いつの間にか通り過ぎていたのだ。やはり運転手に「着いたら教えてくれ」と言っとくべきだった。

そのバス庫にいた兄ちゃんに海印寺行きのバスはここから出るのかと聞いたところ、何やら韓国語で答えを返された。どうもここではないらしい。その時点で、私はまだそこが西部バスターミナルだと思い込んでいた。しかしその兄ちゃんはまた12番のバスに乗れと言う。今12番で来たのに。そして運転手に一言言ってくれた。ろくに礼も言えず、あたふたしてる間にバスが出発してしまった。「カムサハムニダ」の一言も言えず、とても申し訳なかった。

さて、そのバスも突然

「ここで降りろ。」

と言われ、降りたらバスはさっさと行ってしまった。降ろされたバス停に海印寺行きのバスが来るのかと思ったが、どこにも海印寺行きの表示はない。道の反対側にも渡ってみたが、そちらにもない。おいおい、なんちゅう場所で降ろしたんだ。本当にここでいいのか？ おかしいと思い少しそこから歩いてみると、ありました。バスターミナル。降ろされたところからは全然見えない。壁のハングル文字を調べたら「西部停留所」と書いてある。中へ入ったら確かに海印寺行きの切符売場があった。良かった。

それに乗り込み海印寺へ向かった。バスが山の入口にさしかかったところで係の人が乗り込んで来たが、入山料取られなかった。なんでだろう。気付かなかったのかな。他の人も払ってる様子なかったんだけど、ただ？ 正月サービス？

結局着いたのは17:00頃になってしまった。しかしそれがなかなか良かった。他に來ている人はほとんどなく、小川のせせらぎと遠くに聞こえる鳥のさえずりがとても心地良かった。道はまさに「登山」という感じで疲れたが、そのおかげで体は暖まった。夕暮れ時の静かな雰囲気の中で上へ上へと登って行き、最後にあの八万大蔵經の板庫を見たときはとても感動した。思わず

「うわー、すげー。」

と声をもらしてしまった。仏国寺や石窟庵よりいい。すごい。大晦日という時期と、夕方という時間がとても良かったのかもしれない。あの静けさと落ち着いた雰囲気の中での大蔵經のずらーっと並んだ景色は強く印象に残った。本当に来て良かった。

その後、宿をとってそこで正月を向かえるのもいいなあと思ったが、下りて来て大邱行きバスが止まっているのを見たら大邱まで戻ろうという気になってしまった。初日出を海印寺で拝むというのも悪くはないが、なにしろ日程に余裕がない。明日のうちにソウルに着いておかなければならないのだ。もう景色は暗くなっていたが、切符を買ってバスに乗り込んだ。

西部バスターミナルに着いてバスを降り、どうやって東大邱駅まで行こうかと考えた。ふと地下鉄の駅が目に入った。あれ？大邱って地下鉄あるんだ。下りてみると券売機の上の路線図には「東大邱駅」がある。450ウォン。なあって、地下鉄なら簡単で便利じゃないか。この地下鉄のことは『地球の歩き方』に載ってなかったから、新情報として投稿しようなどと考えながら地下鉄に乗った。

が、しかし…。途中の駅で降ろされた。ある駅でいきなり乗客が全員出て行ってしまい、私には何のことやらさっぱりわからない。東大邱駅はもっと先なのに、なんでだ？路線図にはもっと先まで載ってたじゃないか…。実はこの地下鉄、まだその駅までしか開通していないらしいのだ。だから降ろされたという訳。だったら開通してない駅まで路線図に表示すんなよ！まぎらわしい！

しかたなく地上へ出ると、そこは中央なんとかという国鉄大邱駅の近くだった。自分のいる場所がわかってほっとし、とりあえず大邱駅まで歩いた。そこから東へ行けば東大邱駅に着くはずだ。途中、バス停で20番が東大邱駅へ行くという表示を見つけたので、20番に乗ることにした。

しかし、またもや東大邱駅をいつの間にか通り過ぎていて、川にかかった橋を渡ったところで

「これは絶対おかしい。また知らんところに行ってしまう。」

と思い、とにかくバスを降りた。標識を見ると案の定、今バスで来た方向に東大邱駅の矢印が向いている。私は歩いた。ずいぶん歩いて駅に着いてみると、駅の正面でなく裏の薄暗いところだった。大きな駅のはずなのにバスに乗ってて全然気付かなかったことも納得できた。いやーとても疲れた。今日は歩きっぱなしだった。

今いる宿は今までで最高だ。広い、きれいで、設備が整い過ぎるくらい整っている。これで20,000ウォンは安い。部屋はホテル並だ。今日、年越しの瞬間は近くのコンビニで買ったビールで一人で乾杯した。韓国の年末テレビ番組を見ながら。明日はソウルへ向かう。あー疲れた。

4.3 宗廟 { ソウル {

4.3.1 あけましておめでとう 1998年1月1日(木)

今日はまず鉄道の駅へ、ソウル行きセマウル号のチケットを買いに行った。しかしあっさり

「ない。」

と言われ、また高速バスで行くことになった。バスの切符売場のお姉さんがきれいだった！

ソウルまで約4時間。途中、雨が降ってきてやだなーと思っていたが、ソウルに着いたらやんでいた。

地下鉄で鍾路3街まで行き、適当に見つけた旅館ヨグァンに今日明日と泊まることにした。2泊と言ったら5,000ウォンまけてくれた。ここのおばちゃんは韓国語しか話さない。

宿に着いたのが15:00頃だったので、少し休んでから宗廟チョンミョへ行くことにした。宗廟は雨の後で道がぬかるんでいた。吐く息は白く、池は凍っていた。正直言って宗廟は見てもあまり面白くない。また、同時に見られるはずの昌慶宮チャンギョングンへは、門が閉まっていた行けなかった。休みだったのかな？

その後、この辺りをぶらぶらした。夕飯は近くの食堂でピピンパブを食べ、20:00ごろ酒場に入ってみた。日本語は通じず、メニューも写真なしのハングル文字だけだったので何もわからなかった。困っているとバイトの兄ちゃんが英語は話せるかと聞いてきた。何か食べるものがほしいと言うと(つまみが欲しいというつもりだったのだが)、フライドチキンと教えてくれたのでそれと生ビールをたのんだ。しかーし！出て来たのは直径40cmぐらいの皿にフライドチキン4個とスイカ、りんご、それからサラダ。そしてビールに付いてくるらしい、カリントウとトウモロコシの粒であった。なんだ、つまむものも付いてくならチキン頼まなくて良かったのに。

でも、ビールもフライドチキンもとてもうまかった。一気に平らげてしまった。多分、酒場で独りで大食いするこんな奴、他にいないだろう。その店を出た後は、酔った勢いで18才未満お断り映画を観た。はっきり言って金損した。

明日はもう実質的に最後の日だ。

4.3.2 ことごとく閉店 1998年1月2日(金)

今日はまず東大門トンデムン方面へ行ってみた。市場シジャンでは、いちおう店は出ていたが少々活気が少ない気がした。大きな店が閉まっているせいだ。地下商店街も閉まっていた。露店ではキンパブやウドンの店があり、まるでコピーしたように同じ店が10軒ぐらい並んでいるところがあった。品揃えも店構えも全く同じなのだ。その中の1軒でウドンを食べた。関東風のうどんにコチュジャンと海苔と、ハンペンだか油揚げのようなものが入っていた。

東大門市場があまり面白くなかったので、次は期待の新堂洞市場シンダンドンシジャンへ行ってみた。犬鍋があるとしたらこの市場であろう。しかしここも軒なみ閉まっていた。何も面白くない。中央市場はやっていたが、見飽きた食材しか並んでいない。

次は南大門ナムデムン。しかしここもあまり面白くなかった。近くの百貨店も全て閉まっていた。そしてそのまま歩いて明洞ミョンドンへ行った。目指すは全州屋チョンジュウク(全州中央会館チョンジュジュンアンフェグァン)のピピンパブ。店では日本語が通じ、メニューや店内の案内にも日本語があってわかりやすかった。店員の衣装も良く、とても感じの良い店だ。日本人観光客向けなのだろう。そして、出て来ましたピピンパブ！待ってました！ご飯の焦げた感じがとても良く、とてもとてもうまかった。昨日のとは大違いだ。この店、日本に支店出したら流行ると思うんだけどなあ。もしかしてもうあたりして。大満足で店を出た後は、ぶらぶらしながらそのまま鐘閣チョンガクへ

歩いた。しかし町はどこも新宿みたいだ。目指していた本屋も閉まっていた。がっかりだ。

そして景福宮^{キョンボックン}。なんて広いんだ。これはソウルの中で最も見応えのある場所だ。やたらと工事中なのが残念だったが、そんなのどうってことないほど他に見るものがある広さだった。全体が完成（復元工事完了）したのを見てみたいものだ。過去に日本人によって破壊されたものが沢山あった。文化を破壊するなど、とんでもないことだ。長い歴史のあるものを壊すなんてもったいない。しかも王妃を殺したりして、なんで憎しみをうむようなことばかりやったんだろう。非常に腹が立った。閔妃の碑のところの説明には、日本語の説明文がなかった。あれはいかん。日本人観光客は全員見なければ。夕暮れ時、正殿の石畳とまばらな人影はとても良い景色を見せていた。新婚さんの記念撮影の姿も良かった。

景福宮を出た後、仁寺洞^{インサドン}を歩いた。閉まっている店もあったが渋い茶店が脇道に入ったところにあたり、道端の物売りが面白くてとても良い雰囲気を通りだった。そこを抜けてから MusicLand に行ってみたら、そこも閉まっていた。しょうがないので鐘路^{チョンノ}に何軒もある CD 店の 1 つに入って、韓国の CD 1 枚とカセットテープを 1 本買った。一応、ヒットしているものらしいが、どんなのか聞いた事はない。

それからちょっと T-ZONE を覗いて、また仁寺洞へ戻った。途中、鐘路でかっぱえびせんのお化けのような菓子を手に持って食べながら歩いている人を何人か見かけた。しばらく行くとそれを売っている露店があった。らせん状で長さ 1 メートルぐらいの菓子がたくさんぶら下がっていた。そして機械かららせん状のものがぐにゅーっと押し出されて、どんどん作られていた。面白いけど 1 人で 1 本食べるのはつらそうだ。おいしいのかな。

仁寺洞では景福宮で見た韓国ゴマや凧を売っている店があった。お土産用の安そうなコマとうちわを買った。いや、その前にプルゴギを食べに行ったのだが、やはり 1 人で食べるに来ているのは私だけだった。店の人は忙しそうに動きまわっていて、対応もそこそこにあっちこっちに行っていた。昼間の全州屋も忙しそうに動きまわっていたが、店の雰囲気はとても良かったぞ。この新迎賓^{シンウビン}ガーデンは店の印象がちょっと良くない。しかし、プルゴギはとてもうまかった。やはり大満足。

明日はもう日本へ帰らなければならない。やり残したことは、安重根^{アンジョングン}に関するものを見に行かなかったこと、カルグクスを食べていないことである。しかし、今回の旅行は閉まるとこばかりだったなあ。

今回の教訓：正月は家で休もう。

4.3.3 旅の終り 1998 年 1 月 3 日 (土)

「カルグクス」。宿近くの店にハングル文字でそう書いてあるのがわかった。店に入ってみたが、まだやってないと言われた。朝早かったので、店はまだほとんど閉まっていた。結局、韓国最後の飯は空港のカフェテリアで食べたハンバーガーとなった。うーん、食べたかったぞカルグクス。空港で土産を買い、両替をして搭乗手続きをすませた。空港の免税店は結構充実していたが、買いたくなるものは特になかった。

時間が来て飛行機に乗り込むと、席を替わってくれというおっさんが来て強引に替わら

れてしまった。本来、左側の窓際席が私が取った席だ。私のとなりの1席とその前の1席、その席から離れた右側の窓際2席が彼ら4人の取った席だった。私はせっかく窓際席だったのに、前の席に移らされた。

「親子だから。」

と言われたが、なんだその理由は。1時間半ぐらいしか乗らないんだからそれくらい我慢せい！なんでそんな隣どうしじゃないといやなんだ？取った座席どうりに座れよ！いやなら搭乗券取るときになんとかしとけ。とてもとても腹が立った。

でも気の弱い私……。 「そんな小さなことで怒るのも大人げないな」などと無理矢理自分を納得させたりした。あ～情けない。ああいう時は、言われ方ひとつで随分ちがう。もしも、

「すみませんが、席替わっていただけますか？」

と丁寧に言われたとしたら、気持ち良く席を譲ることができただろう。腹も立たなかったにちがいない。(本当は勝手に搭乗券の番号でない席に替わるのはいけないと思うが。)

自分の席にまだ座ってもいないうちに、急に

「替わって。親子だから。」

と言われて、ずっと自分の席に座られてしまったら、あなたならどうしますか？

腹の立つ日本人に会ったこと | それが今回の旅のしめくくりであった。後味悪すぎ。

第5章 アンコールの笑顔 ～カンボジア ベトナム～

この旅行の後、私はアンコールの素晴らしさを人に語る。

5.1 カンボジア

5.1.1 カンボジアは遠いか 1998年4月24日(金)

朝6時に寮を出た。昨日は寝たのが2時頃だったので非常に眠い。眠りながら歩いていて、地に足がついていない感じだ。福岡空港までの道のりと空港内は前に一度来ているので見慣れたものだ。それでも空港に来ると何だかわくわくして、腹の底から喜びが湧き上がってくる感じだ。自然に顔がニコニコしてしまう。空港で買った貴重品入れは失敗だった。T/Cがぎりぎり入らない大きさなのだ。あと5mm長さがあればいいのに。もう無駄なものを買ってしまった。

出国手続きで初めて手荷物検査に引っかかった。ハサミは以前にも持って行ったことがあるが、引っかかったことはないぞ。また、キンチョールのスプレーもいけなかったらしい。機械が反応したのはそっちか。その二つは預けることになった。キンチョールの缶とハサミ…二つ並べて置かれると、なんか怪しく見えるな。俺が何か企んでるみたいだ。今回の旅行中、全ての空港で引っかかるのだろうか。面倒なもん持ってきちまったな。

9:35に福岡を飛び立ち、現在10:35。10時ごろから鹿児島空港上空にいる。天候が悪くて着陸できないそうだ。なんで鹿児島経由なんだ？知らなかったぞ。鹿児島なんか寄らずに直に香港行けよ！国内でつまづいてるなんて腹が立つ。乗り継ぎできなかつたらどうなるんだ。機内放送では、最悪の場合福岡に戻ってから香港に行くとか言ってるぞ。おいおいおい！香港行け！戻んな！俺は今日カンボジアまで行くんだ。ロイヤルエアーカンボージュ(VJ)に乗れなかつたら行けないじゃないか！

11:05 着陸した。約1時間鹿児島上空にいた訳だ。ごくろうさま。でもこの先も安心できんな。何かこの旅の先行きを暗示しているような…。

14:45 香港着。現地時刻は13:45。間に合うのか？と思ったけど、そうか、時差があったんだ。時計を1時間前に戻した。噂に聞いていたとおり、香港の空港は都会のど真ん中にある。高層住宅が立ち並ぶすぐ上を飛行機が飛ぶのだ。以前中央林間に住んでいた時、厚木飛行場の飛行機がうるさかったけど、ここは想像を超えるうるささに違いない。こんなとこ住みたくないな。

15:45(香港時)ごろ離陸。今度はJAA(Japan Asia Airways)だ。窓のない席になってしまった。途中、ベトナムのダナン上空を通るそうだ。ダナンには行かないけど、何か見えるのかな。でもどっちにしろ窓がないから見えない。機内ではまた朝7:00のNHKニュースが流されている。もうさっきの飛行機で見たって。

今回はスチュワーデスがとてもきれいだ。日本人かと思ったけど、しゃべっているのを聞いたら日本人じゃない。中国語かな。周りの客と同じ言語らしい。私もその中華系の客の1人だと思われたのか、同じ言葉で聞かれる。その後英語だ。しかし綺麗だなあ本当に。

17:15(現地時)バンコクに到着。時計を更に1時間前に戻す。キンチョールのおかげで乗り継ぎに時間がかかる。キンチョールとハサミを受け取った時、出発まで1時間を切っていた。入国した意味が全然ないぞ。VJのチェックインカウンタを探して走り(途中であのスチュワーデスさんを一目見られた!)、見付けるとそこは人けがなかった。ヤバイのでは?心配になる。次は出国審査の場所がどこかわからず走った。なんのことはない、チェックインカウンタの柵を出た真正面だった。しかし!500バーツの空港税が必要だとそこで知る。おいサンボード(今回航空券を買った大阪の旅行会社)、前もって教えとけよ。飛行機に乗り込むと私のボーディングパスにある座席番号の席が埋まってる。なんで?空いてる席に座らされた。しかしめっちゃくちゃ暑い!小さい飛行機だな。

20時ちょい過ぎ。ようやく到着しました、プノンペン。外は真っ暗。着いてすぐVISAの申請用紙に記入していると、

「一人か?ホテルはどこだ?連れてってやるぞ。5ドルで。」

と話しかけて来る30才前後の兄ちゃんがいた。VJの職員だ。まだ入国審査もしていないところでだ。信用して良いものかどうか、初めは適当に聞いていた。もう一人別の兄ちゃんはアプリケーションフォームを記入してくれて、手続き中ずっと付きまどってきた。

外へ出るとタクシーやらバイクの兄ちゃんがたくさん寄って来た。どんどん値段は下がったがバイクは怖いのでやめておいた。そしたらバイクの連中は最後に、

「フリー!」

ときたもんだ。なんなんだ、とても疑わしい。結局最初に声を掛けてきたVJの兄ちゃんに付いて行き、彼の車に乗った。

私は後部座席に座り、助手席には彼の奥さんと子供が乗った。ちょうど帰るところだったのか、安心させるための作戦かはわからないが、私の警戒心は少し和らいだ。Rex Innに行きたいと最初に言ったのだが、彼のおすすめの宿に連れていかれた。外が暗かったのでいったいどこに連れてこられたのかわからなかった。宿の名前はMORAKAT HOTEL。セントラルマーケットの近らしい。食事するところも近くにたくさんある。

途中車の中で彼と話したが、私が英語を10年間も勉強したと言うととても驚かれた。彼は1年間勉強したそうだ。しかし彼の方が明らかに流暢に英語を話す。いつもながら恥ずかしい。彼は英語のTeacherをやったこともあるそうだ。町の英語塾が何かだろう。彼は来月からO±cerになるそうだ。空港からO±ce勤務に移り、給料もアップする。会社にO±cerは何人もいない、ととても嬉しそうに話してくれた。途中大学があり、彼はそこを出たと言っていた。VJって国営だからな。やっぱりスタッフは国の中でも優秀な人たちが集まってるんだろう。

シエムリアップに行くチケットを取りたいといったら、明日朝 8:00 に迎えに来て、トラブルエージェンシーに連れて行くことを約束してくれた。航空会社の人だからその辺は詳しいだろう。明日は土曜日だし、とても助かった。

自分の中でのこの、人を半分信じて半分疑ってる感じ。これまでの旅行で身につけたものだと思う。いいのか悪いのか。でもこの部屋、ちょっと良すぎる。テレビと冷蔵庫はなくてもいいぞ。鏡台も。快適すぎる…。まあ初日だから安心できていいか。

いやー今日は本当に強行軍だった。特にバンコクではあわただしかった。なんとかここまでたどり着けて良かった良かった。さて、今後はシエムリアップへのチケット次第。それによって予定が変わる。決まっているのは 29 日にはカンボジアを出国するということだけだ。トラブルが起こらないことを願う。

現在 23:08。おやすみ。キンチョールは VJ で没収された。

5.1.2 タイ + インド = プノンペン？ 1998 年 4 月 25 日 (土)

カンボジアでの初飯。朝 7 時に外へ出て、セントラルマーケットあたりをうろついてみた。町は活気にあふれていて、ようやく外国へ来たという感じがした。アジアだ。町の様子はタイとインドが混ざった感じ。歩きまわっている途中でうまそうな飯を見かけたので食べてみることにした。鶏肉のせご飯。うまい。テーブルにあったトゥクトレイ (魚醤) もかけてみたが、なかなかいける。US\$1 払ったら 500 リエルのつりが来た。いくらだったのかはわからない。

8 時の約束だったので宿へ戻り、カウンタの前の椅子で待った。8 時ちょっと前に彼が現れ、チケットを取るべく旅行会社へ向かった。そこは中華系の店で、3 人しか人がいない。対応してくれたのは 17 か 18 才ぐらいの女の子だった。それから、その子と同じくらいの歳の男の子もいた。《店番かな？》とも思ったが、やけに慣れていてどうやら本職らしい。それとも見た目より歳とってんのかな。チケットはあっさり取れた。まずはひと安心だ。明日はシエムリアップへ行ける。

その後は再び VJ の彼の車に乗り、市内観光へ行くことにした。まずは王宮。ここはタイのワットプラケオにそっくりな雰囲気のところだ。しかしちょっとヒンドゥーが入っている。人はほとんどいなくて、庭はとても手入れが行き届いていてきれいだった。その後の国立博物館でもブッダだけでなくヴィシュヌの像が沢山あった。インドに行ってからラーマヤナとかマハーバーラタについての知識を深めていたので面白かった。知ってるキャラクターがいっぱいいるのだ。だが博物館の中で最も気をひかれたのは、目を閉じて座っているジャヤヴァルマン七世の像である。その像はまるで生きているようであり、顔を真っ直ぐ見つめるのにどきどきした。今にも目を開けてこっちを見られそうな雰囲気があった。

王宮を見た後 VJ の彼が、O_{±ce} に呼ばれたから行かなければならないと言ってきた。その変わり俺の弟が後を引き継ぐと紹介された。彼は車のキーを弟に渡し、弟が乗ってきたバイクで去った。

それからトゥールスレン博物館へ行った。ここはかつて刑務所だったところである。血の跡がついたベッドのある部屋。そして壁にはそのベッドに人が縛り付けられている写真。

床に拘束具。まるで今さっきまでそこに人が居て苦しんでいたような生々しさ……。殺された人の写真が壁にずらーっと貼ってある部屋は、入った瞬間、思わず

「うっ。」

と言って後ずさりしてしまった。空気が違う。壁の全ての人の目がこちらを見ている。拷問器具や、本物の頭蓋骨で作ったカンボジアの地図などもあって、とても沈鬱な気分させられた。

《恐ろしい。》

いろんな恐ろしさがそこにはあった。これはポル・ポトがやったことを知る場所だ。カンボジアの人たちは我々外国人旅行者にこれを見せ、語り、何ごとかを訴えたいのだろう。その後キリングフィールドにも行ったが、実体験に基づく話はすごかった。残酷な話が次から次へと語られた。キリングフィールドにいたあのガイド、最後に金をねだらなければいい奴だったのに、ほていとやす布袋寅泰に似ていた。

何だかとても疲れた。宿のチェックアウトタイムを過ぎていたこともあったが、もう宿に戻って休みたかった。暑さと体力の消耗と、さらに沈鬱な気分とでまいりそうだった。宿に着き、ドライバー（弟）に20ドル払い、明日の朝空港まで送ってもらうことを約束して別れた。早朝のフライトなので、5:30には宿を出なければならない。

フロントでキーを受け取り、もう一晩同じ部屋に泊まることにすると、明日は日本に帰るのかと聞かれた。シェムリアップに行くことを話すとホテルを紹介してくれて、もしそこに泊まるなら連絡するよと言ってくれた。シェムリアップの空港に迎えにも来てくれるというので頼んだ。このフロントの兄ちゃんはとてもいい人だ。人の良さが顔ににじみ出ている。

部屋に戻ってから1時間ばかり眠って、今日の午後の予定を考えた。まず、金が足りない。『地球の歩き方』を見るとカナディアンバンクが土曜日でも15:30まで開いているということなので、そこへ行ってUS\$のCASHを得ることにしようと思った。それから、ベトナム航空（VN）のリコンファームをしなければならない。プノンペンにいううちにしておいた方が良さそう。14時ごろ再び出かけた。しかし、カナディアンバンクは閉まっていた。土曜日は11:30までと書いてあった。くそー。町の両替屋で¥から\$に替えられるところがあると聞いていたので、歩いて目に入ったところで1万円を\$71に替えた。

それから歩いてVNのオフィスへ行ってみたが、そこも閉まっていた。まただ。『地球の歩き方』の情報は古いのかな。帰る途中、電話があったのでかけてみたが、FAX音みたいなのがピーガーと鳴っていた。もう一つの電話番号では呼び出し音は鳴ったが誰も出なかった。宿に戻ってからフロントの電話でも掛けてみてもらったがダメだった。リコンファームできん。どうなるんだ？月曜日までできないとすると、72時間切っちゃうんだけど。

フロントの兄ちゃんはシェムリアップの宿に明日の予約をしておいてくれた。ここから空港までのタクシーもただで手配してくれると言ってくれたのだが、もうすでに約束があるので断った。あーもったいない。

17:00ごろに夕飯のためにまた出かけた。うろろうしているとある店先で誘われたので、その店に入った。カンボジアンヌードルスープはやはり独特の味だ。麺は平たい。牛肉と

ミンチボールと葉っぱが入っている。うまかった。テーブルにはお茶(烏龍茶系のもの)が置いてあり、ただで飲み放題だった。この店にはフランスパンのサンドイッチもある。麺は2,000リエルだったが高いのか安いのか全然わからん。店を出て、水を買って宿へ戻った。

カンボジアはタイとインドが混じった国。タイとインドへ行った人に、プノンペンはこちらのもの足りないと思う。特にインドに行ってしまうと、その後に旅行するどの国ももの足りない感じがしてしまうのではないだろうか。アンコールに期待。

今日はとても疲れた。明日は5:30出発だ。おやすみ。

5.1.3 シェムリアップへ行け 1998年4月26日(日)

昨日の兄ちゃんは来なかった。寝坊したのか忘れたのか、初めっからすっぽかす気だったのかはわからないが、5:30を過ぎたのでバイクタクシーを使うことにした。空港まで2ドル。バイクの後ろに乗って朝の町を通り抜けるのはとても爽快だ。空港へ着いたのは5:45ごろだった。チェックインカウンタには6:10 closedの表示がある。早く出て正解だった。空港税US\$10を払うカウンタの人はナインティナインの岡村隆史にそっくりだった。顔だけでなく、背格好や仕草まで。早朝の便だからかもしれないが、飛行機の座席は結構空いている。

シェムリアップに着いて空港を出ると、私の名前を書いた紙を持っている人が立っていた。男3人。車に乗って宿(BOREY ANGKOR VILLA)へと向かった。とても陽気で楽しい奴らだ。宿では最初、えらく綺麗な部屋に通された。いかにも高そうだ。いくらかと聞くと\$20だと言う。プノンペンで\$20の部屋に泊まっていたからだろう。でももうすこし安い部屋がないかと聞くと\$15のがあると言うのでそっちにしてもらった。でも部屋を整えるからちょっと待ってくれという。どうやらこの\$20の部屋は私のために準備してくれていたらしい。ごめんね。

9:00からアンコール遺跡観光に行くことにした。バイクタクシーの彼の名はSavey。遺跡までの道のりもまた楽しい。いい景色だ。

| | | | | | | | | | | | | | | {

今、アンコールワット第3回廊の一角に座っている。さっきまで日本語を話す子供ガイドが付いていたが、今は一人。ガイド料\$5は高いぞ。ここはとても静かだ。観光客はほとんどいない。なぜだろう。思っていたよりも人がいなくて、孤独に浸れてとてもいい。階段が「うそでしょー」と思わず叫んでしまうぐらいきついので疲れるが、全然かまわない。のんびり観てまわれれば良い。第一回廊の壁にはラーマーヤナなどのレリーフが続いている。また、十字回廊には昔々にやってきた日本人、森本右近太夫の墨で書いた落書(?)が残っていたりして面白い。でも「1997」とか自分の名前を彫ったバカものもいる。ヒンドゥーの寺院だが、現在は仏陀も奉られている。ところどころに僧侶が座り込んでいたりもして、土地の人々は日常的に自由に入出入りしているようである。尼僧に何やら背中をポンポン叩きながらお祈りをしてもらったりもした。入口から寺院を遠くに見るのも、寺院

内から周りを見るのもとても素晴らしい景色。ここは私の大好きな遺跡のひとつとなった。絶対に来て損はしない。ただし、体力のあるうちに来るべきところだ。

そしてバイヨン。アンコール・トムを中心に位置するこの寺院はすごい。アンコール・ワットより感動的な遺跡だ。すごいものを作ったもんだ。これは多くの人に「見に行け！」と言いたい。この素晴らしさは言葉で説明しづらい。私はこのバイヨンが一番好きだ。

アンコール・トムの印象的な南門をくぐると、木に挟まれた長い真っ直ぐな一本道が続いていた。その道の向こうにバイヨンの一部が見える。Saveyのバイクで真っ直ぐな道を走り、近づいて行く。すると…両脇の木々がパツとはれて、開けた視界の左の方に想像よりも高いバイヨンの中心部分がそびえ立っていた。遠くから見えていた部分はバイヨンの中心ではなかったのだ。想像よりも巨大だ。

「うわー。」

バイクに乗ったまま声を上げ、見上げる。無数の四面仏。なんともいえない石の色。ものすごい存在感。バイクを降りて近づくと、崩れ落ちそうになって補強されていたり、進入禁止と書いてある部分がいくつかある。歩き、立ち止まり、ぽかーんと口を開けて見上げてしまう。

ここでは4人組の小さな女の子がついてきた。ときどき横や後ろから扇子であおいでくれる。また、こっちを見るとバイヨンの中を案内してくれたり、お祈りしたり、一緒に写真を撮ったり、ポリスを見かけると一緒に逃げたりした(なんでだ?)。それは、とてもとても楽しかった！一応最後にガイド料として\$3渡した。

「もっと！もっと！」

と言われはしたが、別にながめつくしていやな感じはしなかった。それ以上払わなくても笑顔は変わらず、バイクはあっちだよと待っているSaveyを見つけて、手を振って送ってくれた。今までいろんな国で、観光地にいる「勝手にガイド」には腹がたった。だがここシエムリアップでは全然腹がたたない。それどころかとても楽しいのだ。なんていいところだ。素晴らしい遺跡と子供たち。そして遺跡を修復する国際プロジェクトの力を感じる。1日でここが大好きになった。今日は暑さで倒れそうになりながら、アンコール・トムをひととおり見てまわった。

宿に帰ると、ここを取り仕切っている彼女が笑顔で迎えてくれた。荷物は\$15の部屋に移しておいてくれた。このミニホテルは改装&増築中で、これから部屋数が増えるらしい。\$15の部屋も改装したばかりでなかなかきれいだった。増築作業がうるさくてごめんねと言われたが、どうせ昼間は出かけてるから気にならない。\$20の部屋との違いはTVがないのと、風呂がなくてシャワーだけというところぐらいだ。石鹸もタオルもトイレットペーパーもある。冷蔵庫まである。エアコンと扇風機もある。とても快適だ。中庭もあってなかなかセンスがいい。部屋代とバイクタクシー代はいつでも好きな時に払ってくれればいいと言ってくれた。なんて大らかなんだ。そんなに人を信用してもいいの？観光客の中にはタチの悪い奴もいるよ。

5.1.4 遺跡と笑顔に囲まれて 1998年4月27日(月)

たくさんあるアンコール遺跡の観光は体力勝負だ。どの遺跡に行ってもとても疲れる。だがどこも静かでのんびりできていい。観光地としてまだ出来上がっていない感じもとてもいい。

そしてこの宿もとてもいい。女主人(?)をはじめスタッフはみな感じのいい人達ばかりだ。信用できる。安心して過ごせるのだ。こんなに安心できる場所は今まであっただろうか。全てが魅力的だ。

遺跡のあるところを日常的にバイクをとばして走り抜ける。何ともかっこいいじゃないか。それからこの宿の彼女。なんて素敵なんだろう。昨日、夕飯を食いに部屋を出たら、フロントに彼女がいて、男どもがいっぱい集まっていた。彼らはただのスタッフかな。でも彼女は男どもの憧れの的に違いない。若くて明るくて器量よし、という感じ。こういう人を性格美人って言うんだろうな。そして何より安心感を与えてくれる。うーん、好きになりそうだ。ここにまた来たい。

昨日見たバイヨンが一番感動的だったが、今日観た中ではタ・ケウが素晴らしかった。最初見た時にはそこまでの遺跡観光で疲れていたのだから、あのすさまじい階段に驚ろかされた。《えー？これ登るの？》という感じだった。あまりにもハードだった(へばりついてロッククライミングやってんのかと思った)ので、上で1時間ぐらい休憩した。ここに限らず、アンコールの遺跡の中では安心して眠れる。一人になれるし、程良い日陰もあってとても静かだからだ。場所によっては子供たちがしつこくついてくるところもあるが腹は立たない。

今日バイヨンの前をバイクで通りかかったときには、昨日のあの女の子たちが気付いて手を振ってくれた。例の

「お兄さん！」

を叫びながら。また今日最後に行った東メボンでは、ジュースの入ったクーラーボックスを持って、大声で

「お兄さぁーん！」

と叫びながら全力疾走でやってくる面白いお姉さんがいた。笑った。疲れていたけどとても愉快だった。

5.1.5 Good luck! 1998年4月28日(火)

Saveyに勧められ、今日の午前中はアンコール・トムから北へ40kmほど行ったところにあるバンテアイ・スレイへ行った。この遺跡の彫りは深くて鮮やかだ。石は赤みがかっている。アンコール遺跡群の中で最高の美しさを誇る彫刻だ。舗装されていない道をバイクで行くので、帰ってきたときには全身真っ赤な砂だらけだった。アンコールワット近くでは、弾薬を積んだトラックが西の方へ走って行った。ここに武器は似合わない。午後は町をぶらぶらした。シェムリアップは本当に素晴らしいところだ。

さっき Savey のバイクで空港まで来た。

「もし友達が来るなら言ってくれ、迎えに行くから。」

と言ってくれた。彼は高校を卒業して、大学に行くお金を貯めるためにバイクタクシーをやっているそうだ。カンボジアの大学はプノンペンにある一つだけと言っていた。私を乗せて遺跡めぐりをしているときも、彼はバイクのシートの下に常に英語の本を携えていた。日本語が話せなくてごめんと言われたが、そんな必要は全然ないよ。君の英語は大したものだ。お互い

「See you again. Good luck!」

と言って握手して別れた。これが一人旅の醍醐味だ。友人になったという確かな手応えがあった。彼はとてもいい奴だ。宿の彼女も。彼女は女主人ではなかった。名刺の Mrs. というのは彼女のボスだそうだ。良かった。(って、何を期待してるんだ俺は。)

17:15 のフライトだが、まだ空港に飛行機は来ていない。小さな空港だから、私の乗るのが来ていないということはこの飛行場に飛行機が1機もないということだ。

ここはいずれ大きくなるだろう。大きなホテルもいくつか建設中だった。今日の午後、川べりのベンチに座っていると日本語を学んでいて私に話しかけてきた男の子がいた。教科書「しんにほんごのきそ」を見せてもらったり、通っているのはプライベートスクールで、授業料は1か月\$10 だと言うのを聞いたりした。がんばっている。底抜けの明るさと素直に人を信用するところ。そして素敵な笑顔。どうか変わらないでほしい。

旅行者なんてみんな勝手なものだ。ちょっとの滞在で好き勝手なことを言う。私もその一人。ここも便利になり、観光地として発展してくると人も変わってくるだろう。よりタイヤインドに近付いて行くに違いない。でもどうか金、金、金という目にだけはならないで欲しい。それは観光地として最悪の完成形なのだ。

この時期にここへ来れて本当に良かった。シェムリアップという素晴らしい土地と素敵なあなたたちのことは一生忘れない。ありがとう。

5.2 ベトナム

5.2.1 新たなる出会い 1998年4月29日(水)

昨日プノンペンではまた MORAKAT HOTEL に泊まった。フロントの兄ちゃんにお礼を言い、シェムリアップは楽しかったと報告した。部屋はまた同じ 208 にしてくれたが、シャワーの温水器が漏電していて感電した。危ない。でもなんか我が家に帰ってきたような安心感があった。TV で NHK を見たのでまるで日本にいるみたいだった。

今日の朝は宿に一番近い店でクイティウを注文した。ベトナムのフォーと同じようなものだ。なかなかうまかった。そして、テーブルの上に置いてある揚げ春巻も1つ食べてみた。これもいける。でも、烏龍茶っぽい熱いお茶が一番おいしかった。私が座ったら新しく持ってきてくれたのだ。カンボジアの食堂では、たいていこのお茶の入ったポットが各テーブルに置いてある。前に違う飯屋へ行った時には氷入りのグラスが出て来て、それにこのお茶をついで飲んだ。でもこれ、熱い方がうまいな。

昼ごろフロントの兄ちゃんに別れを告げて、バイクタクシーで空港へ向かった。今日も

とても暑い。顔や腕は日焼けし、カンボジアにもなじんできた。風がさわやかだ。今日でカンボジアともお別れ。空港へ行く途中には大学がある。Saveyの顔が浮かぶ。彼はいつでもここへ学びに来るのだろう。シエムリアップでの素晴らしい日々が思い出される。戻りたかった。

飛行機はベトナム航空。また小さい。飛行機の中での私のセンチメンタルな気分は、隣りにすわったフランス人のおちゃんがブーっと鼻をかんだり、やたらと落ち着きがなくてごそごそするので笑ってしまい、ふっ飛んでしまった。次はベトナムだ。

| | | | | | | | | | | | | | | {

1時間もかからずに私はホーチミンの空港へと降り立った。入国手続きがこれまた長い。係の作業がのんびりしていて遅いとは聞いていたが、客は30人ぐらいしかいないのにえらく待たされた。本当に遅い。別に急いでないからいいけど。

空港を出てからは空港タクシーに乗った。出入国カードに書く滞在先を適当にNhu Lanと書いたが、別にそこでなくてもいいやと思い、運転手にファンゲラオ周辺の適当なところを紹介してもらうことにした。途中、統一会堂（旧大統領官邸）前を通りかかると、軍服を着た連中がたくさん集まっていた。なんかのセレモニーをやっているみたいだ。運転手に聞くまで気付かなかったのだが、明日は4月30日。ベトナム戦争が終結した日だ。明日の朝、ここでイベントがあるということで、その予行演習なのだろう。

ファンゲラオ¹近くのブイビエンへやって来た。運転手は部屋を見付けるのに付き合ってくると言ってくれた。まず最初に来たのはPhuong Hoang（フーンホアンって読むのかな？）というミニホテル。若い女の子が中から出て来て日本語で

「こんにちは。」

ときた。中華系かな。顔は日本人っぽい。フロントにパソコンがあって、彼女はそれで日本語の勉強中だったようだ。

部屋を見せてもらった。最上階の部屋。え？ソファがある！豪華すぎるぞ！

「ここは高そうだな。」

と言うと、彼女は3泊してくれたら1泊\$20にしますよと言ってきた。\$20か。値段はプノンペン²の宿と同じだな。でもフエ²へ行かなければならないから2泊しかできん。そう言うのと、フエへ行った後にまたここへ戻ってきて1泊して、トータルで3泊と提案された。いいか。この辺にはもっと安い宿があるはずだが、人間、一度\$20の部屋に泊まったことがあると贅沢になってしまうようだ。あっさりここに決めた。彼女いい人そうだし。

しかし金がピンチだ。3泊で\$60か。それから空港タクシーの兄ちゃんにも\$7払わなきゃならん。そんなにCASH持ってたかな。あらゆるポケットをごそごそし、まず\$7を払った。それから細かい紙幣も合わせてなんとか\$60あった。残ったのは\$5紙幣が2枚。まあ、食いつなげるだろう。でもフエ行きのチケットとか観光とかに金かかるだろうから、銀行に行かねば。

タクシーが帰ってから彼女に銀行の場所を聞いた。

¹ホーチミンの安宿街。バンコクのカオサン、香港の重慶大廈と並ぶバックパッカーのたまり場。

²ベトナム中部の阮（グエン）王朝遺跡のある街。

「疲れてない？今すぐ行くの？」

と驚かれたが、早く CASH を確保しとかなないと不安だ。ベトナムの通貨は全然持ってないし、T/C はそのままでは使えないし、ドルの CASH は \$10 しかない。今行くと言うと、声を掛けてくるシクロには気をつける、特に日本語で話しかけてくるやつはあなたを日本人かどうかテストしているから返事をするなどと言われた。

銀行に行って T/C を CASH に替えたあと、適当な食堂に入ってみた。ベトナムのテーブルと椅子は低いな。座るとそこのおばちゃんが

「Beer?」

と聞いてきた。とりあえず Saigon Beer を注文し、Fried Rice があるそうなのでそれを頼んだ。ビールのグラスには氷いるかと聞かれた。ここではビールに氷入れるのは普通なのだろうか。別に氷入れなくても、とても冷たくておいしいビールだった。そして、Fried Rice。ベトナム語でなんと言うのかはわからないが、かなり大盛りで嬉しい。唐がらしの入ったヌックマム³が付いて出てきた。Rice は黄色い。カレー粉かな。具たくさんで、上には葉っぱが載っている。これがベトナムでの初飯。う、うまい！これはうまい！最初にいい店に当たった。一気に平らげ、大満足で宿へ戻った。

部屋のエアコンをつけると、ブーンと変な音がした。フィルタを外して洗面台でジャブジャブ洗ったら直った。掃除しろよ。まだこの宿の周辺しか見ていないが、それほど治安が悪い感じはしない。声を掛けてくるシクロやバイクもタイやインドほどしつこくない。社会主義だからといって、違いは全然見あたらない。

宿のカードには日本語が書かれているのだが、「便利です」の部分が「便利ごす」になっているのに気付いた。戻ってすぐフロントの彼女に言うと

「知ってる。」

という答え。もう少し会話がはずむことを期待したんだけどな。でも、教えてくれてありがとうと言ってくれた。

5.2.2 シクロには乗るな 1998年4月30日(木)

めーっっちゃムカついた！こんなに腹が立ったことはない！二度とシクロ⁴なんか乗るもんかあーっ！それは旧大統領官邸前から始まった。あるシクロが声をかけてきた。初めは BANK へ行き、両替をしたあとベトナム航空オフィスへ行くという予定だった。

| | | | | | | | | | | | | | | | {

まずその前のことから。今日は朝から歩いて旧大統領官邸へ行き、その一番上の見晴らしのいい部屋でとても楽しい出来事があったのだ。椅子に座って休んでいると、ベトナム人の男の子(18才)が私をベトナム人だと思ってベトナム語で話しかけてきた。腕とか日焼けして黒いからな。彼は自分の腕と私の腕を指差しながら同じ同じということをやっていた。それから昼ごろまで(2時間ぐらいかな?)、片言の英語でいろいろ話した。

³魚から作る醤油。タイのナンブラー、カンボジアのトゥックトレイと同じ。

⁴自転車の前に座席のついた人力のタクシー。サムロやリクシャーと同じようなもの。

『地球の歩き方』の写真や日本語をネタにベトナムのことを聞いたり、日本語を教えたりした。そのフロアには観光客相手にマイクで何か(ベトナム語だからわからん)を説明している、アオザイを着たお姉さんがいた。フロアに客が少なくなった時には彼女も交えながら、(彼女は日本語がうまい!)それはそれは楽しいひとときだった。

彼とはお互いに住所を交換し、最後は彼に

「今度いつ来るんだ。あなたに日本語を習いたい。」

と言われた。今度はいつになるかわからないと言うと涙ぐまれてしまった。彼は英語があまり得意ではないようなので、彼との間は自然に案内の彼女が日本語とベトナム語で通訳をしてくれていた。彼は私と話せてとても楽しかった、感動してますと言ってくれた。私もとても楽しかった。でも何をしてあげただろう。涙ぐまれると何か私もとてもうれしかった。

昼にはここは一旦閉まるそうなので、3人で(その時、私たちの他に客は誰もいなかった)エレベーターで下へ降りた。最後に彼が家へ来ないかと誘ってくれた。彼はとてもいい奴なのだ。お姉さんも、彼が住んでいるのはここからバスで2時間ぐらいの田舎で、とてもいいところだから、行ってきたらどうかと私に勧めた。田舎はフレンドリーでいいですよ、行くといいです。(私と彼女は日本語で会話。)私は本当に迷った。しかし今後の日程を考えると日数がどうしても足りない。フエでの新川さん⁵との約束がなければ行くことにしただろう。でもどうしてもだめだ。ちくしょー、せめてあと1日多くあればいいのに。また彼を涙ぐませてしまった。一緒に写真を撮り、堅い握手を交わし、手紙を書くことを約束して彼と別れた。

そしてそう、まさにその時、奴(シクロ)が現れたのだ。18才の彼はその時、メモした私の宿を奴に見せてしまった。そして私は宿ではなく、銀行とベトナム航空へ行きたいと奴に言い、いくらだと言うと

「あなた次第。」

と言ってきた。値段は決めないといけないと思い、\$1でどうかと言うと奴は2,000ドンでどうだと言ってきた。2,000ドン。その時、私は復唱したから奴がそう言ったのは間違いない。でも今考えると\$1よりも相当安い値段で、とってもあやしい。ろくに値段交渉もせず私はシクロに乗り、18才の彼ともう一度握手をして、写真を送るよと言って別れた。感動的だったのだ。私は油断した。シクロの運転手を疑うことすらしなかったのだ。

その後シクロは両替所、サイゴン駅(Airlineより安いからと奴に勧められて、鉄道でフエに行くことにした)、仏教系の寺、チョロンのピンタイ市場へと、奴に勧められるままに行った。今考えると、その都度いくらなのかを問い正すべきだった。そして宿へ帰り着かないうちに、疲れたから私はここまで、後は友達にシクロに乗ってくれと言われ、奴の友達という1台のシクロがいるところで降ろされた。その時点で16時ぐらいになっていた。どうも帰り道は行きよりも長くかかるなあとは思っていたが、暑いし、ずっと漕いでたからな。仕方ないかと思い、私はそこで奴のシクロを降りた。

さて、そこでいくら払うことになったのか!

⁵同じ職場の1コ上の先輩。私と同時期にハノイからベトナム北部を中心に旅行。

| | | | | | | | | | | | | | | {

私は朝、宿を出た時にタクシー1日\$5でどうだと声を掛けられていた。また、空港タクシーは市内まで\$7だった。『地球の歩き方』によれば空港から市内までバイクタクシーでは\$3となっている。シクロならもっと安い\$1か\$2だと思っていた。

私はまず\$1を差し出した。奴は冗談だろと言う顔をした。じゃあ\$2、と出してもダメだ。私は相場がわからないんだ、いくら欲しいんだと奴に尋ねた。すると

「50,000 Japanese Don.」

という答えが返ってきた。Japanese Donというのは奴が意味するところのYenのことである。私は最初50,000ベトナムドンのことだと思い、ちょっと高いけどいいかと思っていた。しかし手持ちのドンが少なかったのでUSドルでいいかと聞くと、なんと\$200払えと言う。むちゃくちゃだ。私はドンを得ようと思って、議論しながら近くのバーへ入った。そこで何と2時間半もねばることになるとは知らずに…。

さて、Saigon Beerを飲みながら（今思うと奴の分まで払ったことに腹が立つ）、延々と続く議論が始まった。まず私は奴が勘違いしているのだと思い、US\$1は約16,000ドン（後で確かめたら12,000ドンだったけど）、US\$1は約¥130だという説明をした。奴は

「お前は何もわかってない。サイゴンの物価は高いんだ。」

だの

「俺には仲間がたくさんいる。シクロ仲間が明日お前を殺す。」

だのさんざん脅しにかかった。運の悪いことに、奴は私が明日9:00にフエ行きの列車に乗るために駅へ行くことを知っていた。本当に仲間を集めて駅に来るかもしれない。

US\$, ベトナムドン、Japanese¥入り乱れての議論。こいつ、混乱させようと思ってわざと3種類言ってるのか？ 私は自分の中で相当折れて\$10と決めた。それ以上払うもんか！ 奴は\$100払え、Japanese Donなら50,000と言って譲らない。冗談じゃない、50,000もあつたらシンガポールへ行けるぞと言ったが奴は

「そんなの信じない。」

と言う。さっき買った鉄道チケットだって\$51だぞと言っても奴は

「I can't believe.」

である。このやろー、絶対負けるもんか。

私は覚悟を決めた。とことん闘ってやる。奴が何を言おうと。奴の目を険しい目でにらみつけ、\$10を持った右手をテーブルの上に出したまま、ときどき歯を食い縛って見せたりした。敵もさるもの。\$10や\$20ならば受け取らないと言って拒否し、私が無理矢理\$10渡そうとすると、しまいには\$10札を私に投げつけたり、破ろうとしたりした。奴は

「俺じゃなかったら話を聞かずにお前は殺られてる。」

とか

「お前みたいな外国人は初めてだ。お前は悪い外国人だ。」

とか言う。

それでも、奴の言う値段は徐々に下がっていった。\$100から\$60、\$60から\$50+1,000ドンへ。しかしそこからは変わらない。どちらも譲らないまま、私のにらみと奴の脅しが

続いた。内心、

《やべー。明日で俺の人生終りか？メコン川に死体が浮かぶのか？》
と思ったりもした。でもダメだ、JAPANESE をなめるな！

ちょっとでも多く払うと言ったらこいつはつけあがるぞ。私はにらみつける目を更にきつくした。そして長い長い間の問答が続いた。途中から私は "\$10 only!" とか "Never!" とか言ってただけで、後は聞き流していた。目は絶対に奴の目からそらさないようにした。奴は

「おー、おー、強そうだねえ。」

と私の腕を掴んでからかったりもした。いくらこちらが強がっても動じないというアピールだ。(こいつの顔、アパッチ賢に似てるな …。)

ときどき奴はベトナム語で店の人とやりとりして、何を喋っているのかわからなかった。全員が\$10では少ないと言っているらしい。でも\$50、\$100はどうなんだ！奴が全てをちゃんと話しているかどうかどうかも怪しい。奴は私に

「それは安い、とみんな言ってるぞ。」

と言う。英語を話せる人はいない。隣のテーブルで食事をしている夫婦は、我々に関わりたくなさそう。話しかけて巻き込むのはやめよう。外は暗くなり始めていた。しかもここはどこなのかわからない。

| | | | | | | | | | | | | | | {

奴はいらいらしていた。そして 18:30 を過ぎたころ、帰ると言い出した。\$10 なら受け取らない、だが明日サイゴン駅で待っていると行って立ち上がった。私はその時、店にいた人に向かって

「誰か英語の話せる人は？」

と聞いた。

いた。英語の話せる人が一人。奴を座らせ、これまでの経緯を説明した。昼ごろに旧大統領官邸前から乗ったこと、行った場所、奴が\$50 払えと言ってることなど。その人は全てを聞き、今の時刻を見て、最後に …

「\$40。」

という決定を下した !!!(まさに「判決！」という感じ。)

なんだとー！納得いかないのは、その内 16 時ごろから 18:30 までの時間も加味しているということだ。好き好んでここに座ってるんじゃないよ！時間かかっているけど、市内をまわっただけだぞ。それになんで時間で計算するんだよ。時間がかかったのはシクロだからだろ？

私はがっかりきた。\$40 なら宿にあと 2 晩も泊まれるじゃないか。朝聞いたタクシー\$5 というのが嘘だったにしても、\$40 もするシクロ(しかも屋根なし)に誰が好き好んで乗るか！大ショックだった。奴は、シクロは自分の足で漕ぐからタクシーやバイクタクシーよりも高いんだと言う。なんだその論理は。遅くて暑くて、さらに料金が高いシクロなんか誰も利用するわけねーだろうが。

\$50 と言って譲らなかった奴"に\$40 でいいかと確かめ、\$40 を手渡した。私の負けだ。しかし奴は最初\$200 とかぬかしやがったんだぞ！金を渡すと奴は笑顔で

「どうもありがとう。」（日本語）

と来やがった。本当にうれしそう。手のひらをかえすよう、というのはまさにこのことだと思った。私を罵った数々の暴言。\$10 を投げつけたあの態度。決して許せはしない。二度と「あなた次第」とか言うな、料金は始めにちゃんと教えろと奴に言ったが、金を手にした奴"はもう何も聞いちゃいない。さっさと帰りやがった。

奴が帰ると、私はえらく疲れているのに気付いた。2時間以上も過ぎていたとは。既に外は真っ暗。もう二度とシクロなんかに乗るもんかと堅く決心した。バーの英語を話せる兄ちゃん、もっと早く助けてよ。彼はその後シクロについていろいろと忠告してくれたが、聞くまでもなく身をもって知りましたよ。私は Beer をもう1本頼み、一気に飲み干した。兄ちゃんは

「ビジネスで来たのか？」

と私に聞き、私が

「ツーリストだ。」

と答えるとちょっと驚いた表情で笑った。多分、

《JAPANESE のツーリストにしては良くねばったな。》

という意味だったのだろう。

彼にタクシーをひろってもらい、宿へ帰りついた。\$1 + 2,000 ドン。安い…。帰ると部屋のアコンが動かなくなっていた。リモコンの電池切れだろう。暑い。フロントへ行ったが待っててと言われたまま何の音沙汰もない。しばらくしてまたリモコンをいじったらついた。おー涼しい。

今日は本当に内容の濃い、暑い、そして「熱い」一日だった。英語であんなに白熱した議論ができた自分に今、驚いている。しかし、どう考えても\$40 は高すぎるよなあ。バーの兄ちゃん、シクロに目を付けられるのが怖くて\$40 なんて言ったのかな。さて明日、駅で何か起きるのか？

20:45 無言電話あり。フロントが間違っ掛けたんだったらいいけど。何か言えよ。気味が悪い。

5.2.3 おいしいご飯が食べたい 1998年5月1日(金)

鉄道の旅。目的地はフエだ。今日は駅にあのシクロは来てなかった。良かった。サイゴン駅にはひとつだけ列車が入っていた。それが私の乗る列車だ。中へ入ると通路が狭い。めっちゃめっちゃ狭い。私のベッドの位置をもの売りの子供が教えてくれた。一番下の席に座ってみると頭が上にぶつかる。高さがないので前かがみに座らなければならない。きつい。でも横になればそこそこ快適だろう。

3段が向かい合って、計6つのベッドがある。下の2つは老夫婦。中段は私と、英語の話せる日本通のスポーツおじさん。上2つは上半身裸のじいさんと連れれの兄ちゃん。狭い空間に、この6人が入った。

日本通のおじさんは空手と柔道の有段者だそうだ。他の人は皆サンダルなのに、このおじさんはくつ下を履き、2002（日韓開催のワールドカップの年）のロゴが入ったスニーカーを履いている。Tシャツの袖をまくり、下は短パン。そしてベジタリアンだそうだ。車内で軽いランニングをしたりして、かなり健康的である。私は剣道と柔道を高校の体育の授業でちょっとやっただけだったが、2人で日本の武道の話をして盛り上がった。空手の師匠（師範かな？）が強いという話しや、相撲レスラーは体がとてもでかかったというようなことを話してくれた。

この列車では、飛行機の機内食のように飯時になると車内食が出る。これがとてもまずい！ 寮の飯よりまずい。計4回出たが、違いなんか関係ないくらいまずかった。おかずが変わってもまずさは全然変わらん。弁当箱みたいなものに入っていて、スープは後からつく。飯がパサパサでおかずもとてもまずかった。スープはまあまあかな。

でも同じ時間に6人で一緒にとる食事はとてもとても楽しかった。英語を話せるおじさんがいてくれたのも運が良かった。せま～い車内で小さな簡易テーブルを囲んで、みんなと食事しながら話しをしたり、老夫婦が果物を切ってくれたりして、本当に楽しかった。まるで家族で旅行しているみたいだった。どこへ向かっているかはどうでも良く、この鉄道の旅がずっと続いてもいいなあ～と思わせるほどだった。ただし、まずい飯を除いて。

日本ではランチにいくらぐらいかかるんだと聞かれたので、

「\$3ぐらい。」

と答えたら

「そんなにすんのか！」

とみんなに驚かれた。ディナーは\$5ぐらいだと言うのにも全員がびっくりしていた。

「ベトナム人と結婚してベトナムに住んだらどうだ。」

と言われ、

「おお、それはいい！」

とみんなで笑った。途中、老夫婦がトウモロコシを「食べなさい」と差し出してくれたが、その時腹の調子があまり良くなかった。トウモロコシなんて一番消化が悪い食べ物だ。せっかくだが断った。みかんとリンゴは食べたけど。

5.2.4 世界遺産のある街 1998年5月2日（土）

長い長い列車の旅が終ると、川のある景色が美しいフエだ。この列車は昨日の朝9:00発で、フエに着いたのは今日の11:30ごろであった。つまり26時間半乗っていたことになる。ハードベッドはお尻が痛いと『地球の歩き方』に誰かが書いていたが、私は十分眠れた。

新川^{にいがわ}さんとの待ち合わせはミニホテル18に12:00。しかーし！『地球の歩き方』に載っているミニホテル18のある場所はカフェがあるだけでホテルなんてなかった。どういうこっちゃ。橋の入口でまず腰をおろし、どうしようか考えた。ちょっと近くの様子を見よう。ミニホテル18があるかもしれない。そう思って歩き出すと…すぐ見つかりましたミニホテル18。さて、新川さんはいるだろうか。

まず部屋を見せてもらってからこのミニホテルに泊まることにし、ホテルのお姉さんに

私の他に誰か日本人が来たかどうかを尋ねた。来ていないと言うので待たせてもらうことにした。だが1時間待っても新川さんは現れなかった。

私も時間がないので待つのをあきらめ、まず帰りのチケットを取るためにベトナム航空のオフィスへ向かった。オフィスはあるホテルの1Fにあった。チケットは6日の分まで満席で、ないそうだ。鉄道で帰るしかない…。思い浮かんだのはあのまずい飯。いやだー。でも仕方ないか。駅へ向かう途中からシクロの兄ちゃん(まだ15ぐらいに見える)が自分の横を付いて来る。かなりしつこい。いらないってのに。

あんまりしつこいのと歩きつかれたのとで、カフェに寄ることにした。屋根があるだけのオープンな店だ。ここは『地球の歩き方』ではミニホテル18になっているところだ。川岸の見晴らしのいいところに座り、7UPを頼んだ。氷入りのグラスについて飲むジュースはうまい。2本飲んでしまった(250mlぐらいのやつ)。そこのおばちゃんが話していいかと言うので、いいよと横に座ってもらった。英語での会話なのだが、彼女の英語は聞き取りにくい。私には彼女はいないと言うと、娘を紹介しようかと言ってきて返答に困った。また、私はエンジニアだと言うとサイエンスへ話題が移った。面白かったのはおばちゃんは月へ最初に行ったのはソ連のガガーリンだと信じていることだ。アメリカのアームストロングだと私が言っても信じない。ソ連がそう言いふらしたのだろうか。また、ゴーストを信じるかなど、ちょっと宗教がかった話が出て来たりもして楽しかった。

カフェを出るとシクロの兄ちゃんが待っていた。俺は乗らないぞ。駅へ行ってチケットを買おうと、今日は\$60だった。前は\$51だったのに。なんでだ? 駅から引き返すと、途中でまたさっきのシクロが待ちかまえていた。しつこい。

駅でチケットを取った後はシクロを振り切り、王宮へと向かった。もしかしたらこのシクロはサイゴン⁶のようにタチの悪い奴らじゃないかもしれないが、もうシクロはごめん。それに王宮まではそんなに遠くなさそうだから必要ないだろう。観光は今日だけだ。いくら時間がないと言っても、フエに来たからには王宮ぐらいは見とかなきゃ。シクロの兄ちゃんは遠いと言っていたが、全然そんなことはなく、歩いて行ける距離だった。

王宮内は多くの遺跡がベトナム戦争で喪失している。入口の門と主要な2、3の楼閣が残っているだけだ。あとは広い草っ原に古い壁や階段、新しく作ったらしい休憩所のようなものがある。せっかく来たが、あまり感動がない。アンコールを見た後はどんな遺跡もかなわないだろう。アンコールを見る前だったらこのフエの遺跡を見て何かを感じたかもしれないが、これとって特筆すべきものは無かった。フエには他にも多くの寺や廟があるが、それを見に行くだけの時間ももうなかった。カイディーン帝廟などは特にすばらしいと聞いていたが残念だ。

夕日。ノンラーをかぶった人が歩いている。白いアオザイを着た学校帰りの生徒達が自転車で通りすぎる。のどかでいい景色だ。フラッグタワーの前の広場ではみんながサッカーをしている。その景色を暫く眺めてから宿へ戻った。

宿へ帰ると女主人(歳は多分30代、美人だが気が強そう。)にパスポートを渡せと言われた。明日の朝まで預ると言う。なんだ? そんなの聞いたこともない。スッと渡してし

⁶ホーチミン市の別名(1975年の解放前までの名称)。

まったが、良く考えるとそんなの今までなかった。

「なんで預けなきゃなんないんだ。理解できん。」

と食ってかかった。しかし、なにせ英語力のない私。向こうは《わからん人だねえ。》と言いたげだ。でもパスポートを手放すことはとても不安だ。何やらポリスのコントロールだとか言ってる。

「パスポートを肌身放さずもっていることはとても重要なんだ。」

と言ったら、

「もちろんそうだ。それはわかっている。」

という答え。必要なのは8時から9時までの1時間だとか。その後返すから、と聞き分けのない子供に説明するように言われた。でもなんで今晚から預けるんだ？ 納得がいかん。1晩も預けるなんて、偽造パスポートを作るには十分な時間じゃないか。こんなルール聞いたことないぞ。ホーチミンでは預けるなんて言われなかったし。でも彼女はどうしても返してくれない。不安な夜を過ごした。(結局預けたんかい！)

しかしこの部屋はブレーカーがよく落ちる。また、落ちててもすぐに回復しない。自分で廊下に出てブレーカーをONにしないといけないのだ。めんどくさい。流しは排水管がなく、汚水がそのまま足もとに落ちてくるし。内装はとてもきれいだがなんか不便だ。

夜は宿近くをうろうろし、バーへ入ってみた。なにか飯を食おうと思ったのだが飲物しかないそうだ。Tiger Beerを1缶飲んですぐ出た。裏通りのほったて小屋の飯屋へ入り、いろいろ載っかってるご飯を食べた。まずくはないが、うまいとも言えない。でも雰囲気良かった。近くに住んでいて店の人と顔なじみの人しかいないようだ。途中、停電になったりしたが、それもまた楽しい。ろうそくを出してくれた。帰り際におやじが

「コリアンか？ ジャパンか？」

と聞いてきたのでジャパンだと答えると、笑顔で

「そうか、またな。」

と言ってくれた。あんまりこんなところに食にくる日本人はいないんだろうな。それにしても、この国ではよく「Korean?」と聞かれる。海外旅行していると「Chinese?」と聞かれることはよくあるが、韓国人かと聞かれたのは初めてだ。韓国人旅行者が多いのかな。

5.2.5 ベトナムの車窓から1998年5月3日(日)

9時ごろ宿を出た。出るとき女主人が

「あなたのパスポートなくなっちゃったわよ。」

と冗談を言った。二人で笑った。パスポートはもちろん無事である。部屋番号の書いた袋に入って、鍵のかかる引出しにしまってあった。

「Have a nice trip!」

そう言って送り出してくれた。

今日も良い天気。さわやかな朝だ。途中で広場に座って休んだりしながら駅まで歩いた。列車に荷物を入れてからパンと水を買って車内へ戻った。今度は前のように英語が話せる人はいない。おばあちゃん2人、おばちゃん1人、7~8才の男の子1人、4~5才の女の

子1人である。

今回、なぜか私だけみんなと飯が違っていた。なぜか特別メニューなのだ。特別と言っても大して違わないのだが、おかずが違う。朝はみんなパン1個(大きめのクロワッサンみたいな)と水200mlなのに、私はフランスパンいっぱいと目玉焼き、水500mlだった。今回は前よりうまい。コックが違うとこんなに違うのか。昼のご飯もパサパサ感が少なく、あったかい。食べられる。でも、私の分だけみんなより早めに別に持ってこられるので、みんなとの一体感がない。乗ってすぐの時に職員の兄ちゃんが話しに来たりもしたから、外国人の乗客は私だけなのだろうか。乗員が私を気遣ってくれているのがわかる。また、前回と違うのはみんな食事を受け取る時に食券のようなものと引き替えていることだ。なんだそれ。前の時はなかったぞ。私は持ってないし。

おばあちゃんたちは自分で赤飯を持って来てたりして、私にも分けてくれた。お腹いっぱいだ。フエでの観光時間は少なかったけど、鉄道の旅は本当に楽しかった。

ちょっとお腹こわし気味。正露丸を飲んだ。

5.2.6 旅の終り 1998年5月4日(月)

14:30ごろ、再びサイゴンへ来た。さて、今日はベトナム旅行最後の日だ。とりあえず宿へ戻ろう。3日に帰ると言っていたのだが、フエで飛行機のチケットが取れなかったのが今日になってしまった。最初の日には3泊分払ったが、部屋は使えるだろうか。もちろんシクロは使わず、バイクタクシーをつかまえて宿へ向かった。彼女は笑顔で迎えてくれ、旅はどうだったかという会話をした。そして、シャワーを浴びてゆっくりして下さいと言って鍵をくれたので部屋へ上がった。いやー気持ちいい。シャワーを浴びてほっとした。この宿にして良かった。

ベッドに横になっていると、外から聞き覚えのあるメロディが聞こえてきた。アイスクリーム屋だとすぐわかった。以前、タイで聞いたのと同じメロディだったからだ。懐かしい。アイスクリームのメーカーが同じなのかな? 2時間ぐらい後、外へ夕飯を食べに出た。宿の隣のテラーでは何やら中華系の太鼓や笛が断続的に演奏されている。

最後の飯はベトナムで最初に入った飯屋に行った。夕飯時なので客が多い。みんなビールを飲みながら話に花を咲かせている。今回はみんなが飲んでいるビアホイを注文してみた。私は1人なので、プラスチックのピッチャーに半分ほど入って来た。飲みやすい薄いビールだ。飯は最初に食ったのと同じFried Rice。おいしかった。

帰りがけに土産屋によって、いくつか土産を買った。明るくて楽しいお姉さんだった。その後は街をぶらぶらした。サトウキビジュースをもう一度飲みたかったが、夕方だったのでもうどこもサトウキビがなくなっていた。まあ、1度飲んだからいいか。歩いていると、やはりシクロがしつこく付きまとして来た。乗らないよ。宿の隣のテラーは葬式が法事のような。飾り付けが赤や金で派手なのと、みんながおそろいのハチマキをしているので、てっきり祭りだと思ったのだが、おばあさんの写真が飾ってある仏壇(?)に向かって坊さんがお経を唱えてるぞ。祭りじゃないや。店の創立者の命日とかかな。宿へ戻ると、あいかわらずエアコンが動かない。原因は電池じゃないのかな。

飛行機は23:25発。21時に部屋を出て、1階へ降りた。タクシーを呼んでもらい、タクシーが来るまでの間彼女と話をした。結局この近くとフエしか見ていない。ホーチミンまで来ていながら、メコンデルタには行けなかった。つくづく休みが短いなあと感じた。まだ帰りたくないぞ。

タクシーが来た。彼女は最後に私に握手を求めた。手を握り、お互いにお礼と別れの言葉を言った。とってもいい思い出だ。うーん、また好きになっちまいそうだ。そういえば彼女が私にかけた最初の言葉は「こんにちは」だったけど、彼女が日本語をしゃべったのは最初のそれだけだったな。タクシーに乗り込み、窓から彼女に手を振って宿を後にした。あ、彼女と一緒に写真撮るときゃ良かったかな。彼女の写真1枚もない。

空港での手続きが終り、研究室へのお土産にコーヒーを買った後、喫茶店で休んだ。日本人多いな。相席した日本人のおじさんはベトナムは2回目だという。ニャチャンへバスで行ってお尻が痛かったという話や、サイゴンのシクロの話などを聞かせてくれた。おじさんも、初めて来たときはサイゴンのシクロにやられたそうだ。誰でも一度はシクロに腹を立てるんだなあ。私がカンボジアの話をする、興味をもってくれたようだ。いいですよー、シムリアップ。おかげでお互いに出発まで退屈しなかった。

帰りは日本航空。席は通路と通路の間にある中央5列のど真ん中だ。しかも上に荷物入れがない席。荷物は足もとに置いたが、うおー、狭い。トイレに立つのも大変そうだ。当然、両脇の4人も荷物は足の下。狭いー。機内では、ヘッドホンをつけてチャンネルをいろいろ変えてみたが、ずっとおんなじ音楽チャンネルのままだった。スクリーンに写されているNHKニュースの音声が欲しいんだけどな。まあいいかと思って暫く聞いていると、隣の女の子がヘッドホンをつけて彼女の席のチャンネルをカチャカチャまわし出した。あれ？俺の方に聞こえてるチャンネルが変わるぞ。おいおい、なんだこれ。配線ミスか？

5.2.7 思い出とともに 1998年5月5日(火)

真夜中、4~5時間のフライトで関空に到着した。全然眠れん。日本はやっぱ日差しがやわらかいな。関空は初めてきたが、何かすんげー近代的な建築物だ。ちっちゃくて素朴な空港ばかり見て来たからな。

福岡までは全日空。手荷物検査では案の定、はさみが引っかかった。でも

「機内で出さないで下さい。」

と言われただけで、預けなくても良かった。国内線はそんなんでいいのか。機内に入って驚いた。座席のスペースが広い。シートもなんか豪華だ。フットレストまでついてる。今まで乗ったなかで一番快適だぞ。国際線でこれぐらいの座席に座りたいなあ。客はほとんど乗ってなかった。

9:00ごろ福岡空港に着いてからフードコートへ行き、和定食と生ビールを注文して一気に平らげた。うまーい！大満足。周りの人を見ると、自分が日に焼けてるのが良くわかる。なんか服も汚い。

あっという間だったな。さっきまでベトナムに居たんだよなあ。帰ってきたけどあまり疲れていない。うおー、戻りてえー。今度旅に出られるのはいつだろうか。今回はとても

思い出深い旅であった。もう一度行きたい場所、もう一度会いたい人がたくさんできた。
あの強い日差しが思い出される。

みんな、元気でな！

5.2.8 後日談

カンボジア - ベトナムの国境は陸路で越えたかったのですが、出発前に集めたあらゆる情報は「危険だからやめた方がいい」というものばかりでした。でも今は陸路越えるようです。タイ - カンボジア間の国境も開いたと聞きました。ただ、カンボジア側ではワイロを要求されるようです。やろうと思えば払わずにぶっちぎれるそうですが、やると撃たれるかも。

アンコールのバンテアイ・スレイへは、途中が危険だから行くのは控えたほうが良いと
いうのを、帰国してから外務省のホームページを見て知りました。確かに銃持ってる軍人
とかいたな …。

フエで新川さんは体調を崩して寝込んでたそうです。同じ街の中にはいたのに会えなくて
残念でした。新川さんその他の旅行者によれば、たちの悪いシクロドライバーはサイゴン
だけだそうです。ハノイはいいところらしいですよ。

第6章 太平洋の果て ～イースター島～

この旅行の後、私はまだ見ぬ南米への想いを強くする。

6.1 南へ、そして東へ { 南太平洋 }

6.1.1 シンガポール航空 1998年7月18日(土)

朝早く起きた。いつもは起きないくせに、こういう時は早起きになる。7時ごろ朝飯を食った後、荷物をリュックに詰め込み、8時ごろ寮を出た。駅へ行くと特急は9:04までなく、30分程あったので会社に寄った。亮と小林の新住所を控えるのを忘れていたのでちょうど良かった。旅先から葉書を出すのに必要だ。Lotus Notesの個人アドレス帳に入れてあったものをメモした。土曜日であったが、研究室には柳さんが来ていた。30分程後、再びリュックを背負い、黒崎駅からソニックに乗って福岡へ向かった。

空港は賑やかだ。今日は高校生や子供連れがたくさんいる。どうやら高校生は修学旅行でグアムやシンガポールに行くらしい。その他にも団体が多い。みんな夏休みなのだろう。チケットを受け取り、チェックインを済ませ、売店でシャンプーやメモ帳を買い込んでから早めに出国手続きを済ませた。ロビーでこれを書いていると、高校生の団体が周りにどーっと来た。私服だが「先生～」とか言ってるから高校生だとわかる。どうやらグアムに行くようだ。今グアムは日本の団体旅行客だらけなんだろうなあ。さて、初めてのシンガポール航空(SQ)。ランキングでいつも1位になる噂の航空会社だ。前から一度乗ってみたかった。楽しみだ。なんかこのロビー、どんどん人が増えてる。こんなに混んでは初めてだ。でも思ったほどうるさくはないな。なかなかマナーいいぞ、高校生。わかまえてるな。

搭乗口を入ったときの匂いは、これまでの旅行を思い出させる。福岡空港に慣れてしまったせいか、今回は空港に来てワクワクすることがなかった。日常の一部になってしまっていた。でも飛行機へ続くあの匂いは「外国へ行く」という何とも言えない高揚感と、旅で出会った懐かしい人々との記憶を甦らせてくれる。

飛行機に乗り込んだ。すごい！聞いてはいたが、各座席に液晶パネルが付いているのは実際に見るとやはり感激する。シートはとても綺麗だ。スチュワーデスの制服もみんな似合っている。きれいだ。素晴らしい。搭乗券を見られて、座席まで丁寧に連れて行ってくれる。うれしい。シンガポール航空よ、もう既に浮かれ気分が止まらないぞ。でも高校生

とおばちゃん団体の笑い声がなんかちょっと…。これのビジネス、ファースト（ラッフルズ）クラスってすごそうだな。機体はBOEING777。加速のときは自然に顔がニコニコする。どうしようもなく楽しい。旅の始まりだ！

発見。またすごい。肘置きのところにあるボタンがいろいろ付いた操作パネル、取り外せるぞ。ゲームコントローラみたいだ。説明読んだら、実際ゲームもできるじゃないか！本当にゲームコントローラだった。映画のチャンネルもいっぱいある。いやー、あきさせないねえ。機内食もうまい！ただ座席が狭いのはエコノミーだからしょうがないのか。狭さだけは他と同じだ。でもまた乗りたいと思わせる要素が十分あるぞ。飛行機の中では眠ろうと思っていたのだが、眠ってる場合じゃない。面白がっているいろいろいじくった。

もうすぐシンガポールに着く。5時間半乗っていた。時差があるから現地時刻は16:30になるそう。予定より30分早い到着だが、ケツが痛い。チャンギ空港は以前来た時とずいぶん印象が違う。まるで一大ショッピングセンターだ。こんなだったっけ？時間があったのでスカイトレインなるもので第1ターミナルへも行ってみた。3年半前に夜を明かしたのはこっちの方だったようだ。管制塔の位置でわかった。でもやっぱり、以前ここに来た感じがしない。本当にこんなだったかなあ。空港をひととおりうろろした。なんかあんまり外国にいる気がしないなあ。

自分にとって外国とは、やはりあのアジアの喧騒だろうか。今いるここは東南アジアには違いないが、たくさんの日本の高校生が学校帰りの雰囲気そのままの格好でうろろしている。シンガポールの繁華街も日本人だらけなんだろうなあ。空港内のレストランでは懐かしい、麺のスープの匂いがした。時間がないせいもあるが、もしあっても空港から出てどこか観光しようという気は起こらない。ただ、屋台の飯には今でも誘われるので行きたい。前に来たとき、

「観光は一度見ればもういいけど、そこでしか食べられないおいしいものがあるとまた来なくなるよなあ。」

と友人たちに言った覚えがある。今もそれと同じ思いだ。

外国の空港へ来ても、飛行機を降りたとたんにガラッと何か変わるというあの感じは、今の自分にはもうない。ここシンガポールのようにきれいな大空港だと特にそう。ただ、この空港は香港やバンコクより大人の落ち着いた感じがあるけど。

AUCKLAND行きは再びシンガポール航空。機体はBOEING747-400だ。やはりこれにも制服姿の日本人高校生が乗っている。制服で外国に来るってのは管理する先生側には好都合だろうけど、生徒はいやだろうなあ。はっきり言って変だぞ。飛行機は約15分遅れで20:57にターミナルを離れた。今度は前の席だ。前に座席がないから足のスペースが広いぞ。ラッキー！

6.1.2 寒い南国 1998年7月19日(日)

足伸ばして寝たい。きつー。シンガポールとの時差は4時間。所要時間約9時間で到着。今腕時計の表示は5:58。4時間進めて9:58になった。空港のSQのオフィスでリコンファームできた。帰りの分のAUCKLAND-SINGAPOREとSINGAPORE-FUKUOKA

の両方とも。なんだ、簡単じゃないか。前からこうすりゃ良かった。

ニュージーランド。うひょー、ここは寒いぞ。みんな冬の格好をしている。私だけ素肌にシャツ一枚…変だ。シャツの下にTシャツ着た方がいいな。両替すると、US\$60がNZ\$105.xxになった。なんだ、両替すんのUS\$40ぐらいにしときゃ良かったな。多すぎたかも。空港を出て真ん前にAirBus(空港バス)が止まっていた。太っちょの黒人のおじさんが

「どこ行くんだ？」

と声をかけてくれた。市の中心まで片道\$10、往復だと\$16だそう。もちろん往復で買い、バスに乗りこんだ。バスは20分ごとに出ているそうである。20を「トゥエニイ」と言う癖がついてしまっている。ここじゃ「トゥエンティ」。オークランドの空港はあまり大きくない。人も多くない。ここってニュージーランドの中でも大きい都市のはずだよな…。

途中、牛がたくさんいた。50頭ぐらいかな。牛はインドで見たのとは随分ちがう。日本でおなじみの白黒模様だ。牧草地がとても広く、のどかだ。チーズやヨーグルトの商業シャルみたいな風景が続いている。でも空港から市中心部までちょっと遠いのが難点だ。成田ほどじゃないけど。天気は曇り。まあシンガポールから出発した時の情報では雨って言ってたから、それよりはまし。バスは40分ほどでダウンタウンエアターミナルに着いた。数時間後にまたここへ戻ってこなければならぬ。

まず昼飯。インドネシア、タイ、すし屋、中華、インド、韓国、…各国の料理人が一つの店に入っている屋台村のような店がある。これはうれしい。何度も足を運びたくなる店だ。全部食べてみたい。こんなの日本にあつたらいいなあ。タイの麺を食べた。ん？あまりスパシーじゃないな。まずくはないんだけどちょっともの足りない。別のを注文すりゃ良かった。

巨泉のOKギフトショップ、ホットドッグ売りの兄ちゃん、ストリートミュージシャン…。でもなんか賑やかさが無い。静かで活気がない。人が少ないのだ。なんで？人口少ないのかな。それとも冬はみんな外に出ないのか？あ、日曜日だからかも。街にはタイレストランと韓国レストランが結構ある。Japaneseレストランも。この静けさがニュージーランドなのだろうか。ジョギング、マウンテンバイク、フリスビー、そしてラグビー。うーん、ようやくちょっとだけニュージーランドっぽいな。でも都会はみな同じだ。今や日本でも白人が英語で会話しながら歩いていたり、英語の看板だらけの通りなど珍しくなくなった。つまりオークランドの街中を歩いていてもあまり外国にいる気がしないのである。

学生のときに行ったオーストラリアでは、クイーンズモールをただ歩いているのがとても楽しかった。おそらく今、あのクイーンズモールへ行ったとしても何も面白く感じないだろう。ちょっと寂しい。街を見ながら歩いて博物館へ行き、その後すぐ戻ってきた。なかなか見応えのある、いい博物館だった。今日はずっと曇りだった。もし快晴だったらこの印象は違っていただかもしれない。14:20、空港へ戻るため再びAirBusに乗った。

チェックイン手続きが遅い。もっとサッサカやらんかい。でもなんかこの人たちは憎めない。愛想が良いのだ。どこぞの国みたいに無表情で黙々と処理されるのとは違って気分がいい。やはり空港はその国の玄関口だからな。笑顔とちょっとした会話、大事ですよ。

17:15ごろ出発。搭乗は一変でなくて、番号の大きい(後ろの席の)人から呼ばれて乗り

込むようにしている。私は08Eなので最終だった。このやり方って本当に効率いいのか？

BOEING767/300。その便はラロトンガ、パペーテ経由のロス行きである。スチュワーデスだけでなく、男のスタッフが多い。でもなんか抜けてる。気配りが行き届いていない感じだ。あんたらそれでもプロか？何かのついでにサーブしてるみたいだ。ヘッドセットはまばらに配るし、私の隣の女性がヘッドセット持ってきてと頼んでも忘れてるし、私にはスナック配ったのに彼女の方に飲物をサーブした男性スタッフはスナック配らないし、スチュワーデスは私にアップルジュースくれないで行っちゃうし…。なんでみんなそんなに抜けてるんだ！エコノミーだからか？それともニュージーランド人の大らかさか？シンガポール航空の後なだけに、とてもいい加減に扱われてる感じがする。

NZ時20:51、クック諸島のラロトンガ着。現地時は18日22:51。日付は昨日に戻った。どうやらここで一度降りなければいけないらしい。機内で左隣りに座っていた彼女が最後にキャンディをくれた。ヘッドセットを貸したお礼だろう。その前に夕飯のデザートに出たケーキを勧めてくれたが、甘ったるいから断っていたのだ。降りるとき、立ち上がった彼女を見たらスタイルが良くてモデルみたいだった。髪はおろした方がいいよ。その方が美人に見える。美人なんだけど、きつい感じの顔なんでちょっと俺好みじゃないんだよねえ。でもやっぱりかっこいいなあ。

こんなところに寄るというのは予期しない出来事だったが、ラロトンガ島の空港に降り立った。外は真っ暗だ。小さな空港。中ではウクレレとギターの間ぐらいの楽器を演奏しながら、スタンドマイクで唄ってるおじさんがいる。南の島へ来たという感じだ。もうニュージーランドの寒さはここには無い。でも夜だからこれで涼しい方なのだろう。飛行機の準備が整うまでここで待機だ。彼女は到着手続きを済ませて、行ってしまった。

おっちゃんの演奏は続く。待っている客へのサービスなのだろう。待っているのは100人ぐらい。我々以外に客はいない。飛行機も我々が乗って来たものしかないようだ。夜遅いけど、パペーテに着いてから宿とれるかなあ。ちょっとアジアと勝手が違うから心配だ。

暗いので周りの景色は全然わからない。出発ロビーと飛行機しか見えない。乗り込む時(NZ時21:35)遠くに目をやったが何も見えなかった。NZ時19日22:00(現地時19日00:00)ラロトンガ発。

機内で配られたタヒチの出入国カード、書いている途中で気がついたのだがフランス語、英語、そして何と日本語で書かれている。日本人相当多いんだな。しかもアンケートの入国目的のところ「観光」と別に「新婚旅行」というチェック欄があるぞ。

6.1.3 フレンチポリネシア 1998年7月19日(日)Part2

現地時01:35、タヒチのFAAA空港に到着。日本を出てから何日、何時間経ったのかももう訳わからん。タラップを降りて空港入口へ向かうと、四人の楽団と小さな花の手渡しでのお出迎いだ。おおー南国。イミグレの処理が遅くて行列になった。楽団が配慮してか、中に入ってきてから再び演奏を続けてくれた。とてもいい。一曲終るたびごとに並んでいるみんなから拍手が起こる。

2時ちょっと過ぎにようやくゲートを出られた。誰かの出迎えに来ている人たちの笑顔

が見える。私はまず、オークランドの時と同じようにとっとりコンファームを済ませとこうと思い、チェックインカウンタと航空会社のオフィスを探して歩いた。ないな。実はFAAA 空港の図だと思って開いていたガイドブックのページはラロトンガ空港のものだった。とりあえずまず両替をしておいた。2万円。その後空港をうろうろしたがみんな閉まっている。インフォメーションも閉まっている。2:30 ごろ、さっき利用した銀行も閉まった。もうこの時間じゃ宿探しもできないだろう。空港で寝るか。覚悟はしていたが、かたいベンチしかないぞ …。

日本時間で考えると2日間風呂に入っていない。飯はオークランドの昼以外は全て機内食だった。足を伸ばしてぐっすり眠りたいが、あさってまでお預けだ。イースター島への出発便は明日の今ごろだ。夜中の2:10 発なんていうの、よく設定するねえ。なんでそんな時間に運航すんのかよくわからん。

軽食がとれるカフェは開いている。コカコーラを買って飲んだ。支払いの時はまごついてしまった。値段を言われてもまだ全然ピンとこないの、コインをサッと出せない。持っているコインを全部渡しておつりをもらった。その後、出発待合室(「室」といっても部屋じゃなくてロビー)に行くと…なんだ、ベンチで寝てる人結構いるじゃん。でもなんでみんなあんなに荷物多いんだろう。カートを使ってない人はいないじゃないか。バックパッカーいないなあ。現在3:16。寝よ。

おいおい、君たちよくこんなところで眠れるね。ベンチは日本でよく地下鉄のホームにあるような、一人ずつのものがいくつか連なっているタイプである。真っ直ぐな長椅子じゃないからどこに体ずらしても落ち着くところがないぞ。お尻がはまれば背中が盛り上がりのとこに当たって痛いし、背中をいいところにとすると尻が落ち着かない。あ、昔買った携帯用枕、いつも旅行に持って行くけど初めて役に立ったぞ。これ、床に寝た方がましかも…。夜中、ベンチから床に落ちて一人で笑った。

朝になり、空港で荷物を預けトイレで顔を洗い、髭を剃って歯を磨いて、7時半ごろパペーテへ出かけた。道へ出てル・トラックに乗ろうと思っていたが見あたらなかったので歩くことにした。パペーテまで1時間ぐらいかかったが、歩いている間、天気は曇りだったので辛くはなかった。

やはり外国にいる感じがしない。今日は日曜日だ。日曜日はほとんどの店が閉まる。カフェが数軒と、McDonald's と KFC は開いていた。しばらくすると強烈な日差しがやってきた。おー、ようやく南国へ来たって感じだぜ。

カフェでコーヒーを飲んだ後街をぶらぶらしていると、しばらくして無性にトイレに行きたくなった。でもどこも鍵がかかっている。うおー。ショッピングセンターのトイレも公園のトイレもだ。鍵を開けてもらおうにも街中の店はほとんど閉まっている。ピンチ！さあ、どうする？最後の頼みの綱はMcDonald's だ。早歩きでMcDonald's を目指し、駆け込んだ。あーありがたや。助かった。トイレ使うだけで出るのは申し訳けないので注文したら、日本語メニューがあった。英語も通じた。ここへ来てしゃべったフランス語は今のところ

「Bonjour.」

だけである。そこでひと息ついてから、パペーテから PAPEETE-FAAA-OUTUMAOAO

の表示のル・トラックに乗って行けるところまで行った。ル・トラックは島全体を一周している訳ではないのだ。降りたところには大きなスーパーマーケットがあったので入ってみたが、特にいるものはなかったのですぐ出て来た。その後は歩き。途中、海と山の景色が素晴らしい。でも車道なんて排気ガスをモロに浴びるし交通量も少なくないから、「樂園」ってイメージとはかけ離れてるんだよなあ。休み休み歩いたが、なかなか博物館に着かない。

1時間30分ぐらい歩き通してやっと博物館の看板があり、そこから曲がってしばらく住宅地を歩き、ようやく博物館に着いた。疲れたぞー。客は家族連れが2組ほど来ているだけで空いていた。

博物館の中は「ポリネシア」というまとまりを意識した展示で、なかなか面白かった。また、ティキ像が何体が展示してあり、イースター島のモアイを見る前座として気分は盛り上がった。これモアイみたいなもんじゃないか。同じポリネシアの文化としてつながりがあるなあという感じだ。そして、昔の島民の姿を描いた全身入れ墨の宇宙人のような絵がとても気に入ったので、それがプリントされたTシャツを買ってしまった。サイズ40ってあったけど、40って何だ？

博物館を出ると、横で槍投げの競技会が開かれていた。高いポールの上に付けてあるココナッツが的だ。それをめがけて出場者みんなで槍を投げている。競技者が着ているのはパレオのみで、頭に草のかざり輪をつけている。観光客向けかな。博物館の横でやってるからそうかもしれない。でも快晴の空と背景の山と雲、後ろの海から聞こえる波しぶきの音がとてもいい。後ろを見るとモーレア島が見え、海がキラキラと輝いている。どこを見ても絵になる景色だ。お、結構、的に当たってる。うまいもんだな。ここに来てから、意外にもまだ日本人を見かけていない。タヒチは日本人の新婚旅行だらけというイメージがあったが、そうでもなかった。と言っても私は島の一部しか見ていないのだが。

博物館前に停車していたル・トラックは16時頃まで出ないそうだ。運転手のおっちゃんも参加選手らしい。もう歩くのはいやだからここでのんびり観戦しよう。他の場所を見るのはイースター島から帰ってきてからにする。しばし競技会観戦。この人たちには腕や背中に入れ墨をしている人が多い。競技者の中にも結構いる。伝統なんだね。

競技会が終ると、観客が槍を投げさせてもらっていた。歩いて帰ろうと思立ち、気合いを入れて歩き始めた。空港まで歩くとするとル・トラックがない分、来た時より長い距離になる。30分ぐらい歩いたところで後ろからププーという音。博物館で声をかけたル・トラックの夫婦だ。このル・トラックは空港までは行かない。

「Maeva?」

と聞かれた。来たときに PAPEETE から Maeva まで乗ったのだ。乗せてもらうことにした。しかし記憶はいい加減だ。降ろされたところは見覚えがない。ここだと言われて降り、お金を渡し、

「Voilà。」

「Merci。」

のやりとりの後、ル・トラックは去った。見覚えがないので来た道を少し戻ったら、あの大きなスーパーマーケットがあった。あれはさすがに忘れない。でもこんなとこだったっ

け？戻ったりして無駄なことをしてしまった。また同じ道を引き返した。すると道路の向こう側にあるFAAAの標識と、こっち側にあるPAPEETEの標識が反対方向を差している。なんだこれは。どっちも同じ方向にあるはずだろ？とまどった。

FAAAの方へ行くと、結局途中からFAAAとPAPEETEと同じ標識になった。あーややこしい。しかし登り坂はきつい。しばらく行くとまた後ろからプップーという音がして、今度は大きめのル・トラックが止まった。エアポート方面へ行くかと聞いたら行くと言うので乗った。私の後に中年の白人女性も乗ってきた。あれ？もしかしてこれ、この人が止めたのかな。まあいいや。丁度良かった。そして17:00ごろようやく空港へ帰ってきた。疲れたあー。

空港内でAir NewZealandのオフィスを見つけたので、SQのときのようにリコンファームしようと思って入った。兄ちゃんが一人居るだけだ。リコンファームはここでできると聞いたら、Air NewZealandはリコンファームする必要はないそうだ。なーんだ。教えとけよ、アクロス(今回チケットを買った旅行会社)。とりあえずパペーテからの帰りの分はこれで全てOKだ。後はイースター島の往復だけ。もう3日(だと思う。もう正確にわからなくてどうでもよくなって)たったが、この旅のメインはこれからだ。

Air NewZealandのオフィスを出てからは、すぐに空港のカフェへ行ってHINANO Beerを頼んだ。タヒチのビールである。久しぶりのビールだ。330mlの瓶。グラスに一杯つぎ、一気に飲んだ。うめー！…ん？瓶を見ると

MEDAILLE D'OR LUXENBOURG 1990

とあってMONDE SELECTIONのマークが入っている。源氏パイやギンビスのアスパラガスビスケット、UCC缶コーヒーなどでおなじみのモンドセレクション金賞受賞ってやつだ。へえー。ビールについてんのかって初めて見たな。急に格調高い飲み物に思えた。改まって残りをグラスについで飲んだ。

現在17:52。空港に預けた荷物の受取りは23:00。出発は2:10だ。まだまだ時間がある。またあの硬いデコボコベンチで寝よっかねえ。昨日一回落ちて恥ずかしかった。めちゃめちゃ寒かった。背中痛かった。絶対体に良くない。ビール飲んだから寝過ごさないようにしなきゃ。

6.2 モアイと鳥人の島 { ラパヌイ }

6.2.1 絶海の孤島 1998年7月20日(月)

ランチリ航空のチェックインが済むまで長かった。今日(正確には昨日)は歩き疲れていたもので、行列に並んで立って待っているのはとても辛かった。Departure Gateでは学生っぽい人たちが友達を見送る歌を歌っている。ギターの伴奏付きの大合唱だ(6人ぐらいだけ)。『蛍の光』も唄っていた。最後は女性の唄で、そのまま唄の流れのままで\Bye Bye"というセリフで締めくくられた。素晴らしい。

そしてその他にも1人の男の人を見送りに友達が集まったという感じの一団がいて、無理矢理頭に花輪をかけたたりしている。抱き合っただけのキスをしたり、なんだかうらやましい。さっきの人たちをパロって蛍の光を唄って笑ったりしている。姿が見えなくなるところに行くまで大きな声で言葉をかけ、手を振って見送っている。いいなあ。なんだか自分も一緒に見送られている気がしてとても良かった。あたたかい。

出国手続きが終った。眠い。また、このソファが寝るのに最適だ。無性に眠い。ずっと寝不足の状態だったからなんだか夢心地だ。ここってタヒチなんだよな～。なんかポヤ～ンとしていて現実じゃないみたいだ。

アナウンスで呼び出された。SEKIYAMAってフランス語風に呼ばれた。面白い。フランス語風の発音だけど英語だ。20番ゲートに来て下さいって。行ったらチェックインのときのランチリ航空の兄ちゃんがいる、これに替えてくれと言われて新しいボーディングパスをくれた。なんかFamilyがいるから席を替えたのだそうだ。

乗客はみんな背が高い。私が小人になった気分だ。それに美男美女が多いな。女性は足が長くてスタイルのいい人が目立つ。ランチリ航空の飛行機に乗り込むと、フォルクローレが流れている。うーん、いいぞランチリ。SISAY¹が演奏しているはずはないが、彼らの演奏を思い出して気分を盛り上げられる。いいねえー。機内アナウンスはスペイン語、英語、フランス語だ。

約5時間後、私の腕時計時刻で7:16(現地時11:15)、着いた。ようやく着いた。着陸前、窓から見て結構家があるなーと思った。長い道のりだったが、とうとうやって来たぞ！期待に胸が膨らむ。飛行機から出てタラップを降りると、そこには謎の像が2、3ある。おっ、いいぞいいぞ。なんだかわからんが、わくわくする。手続きが済むと空港内は、え？というほど何もなし。全然「空港」って感じでもない。

窓口におばさんが二人いるところがあったので、ホテルのインフォメーションだと思って左側のおばさんのところに行った。しかし総合案内ではなく、その人はいきなり宿のおかみさんだった。ウインドウのところにいる男の人との違いは何だ？なんであの人は中に入れないんだろう。おばさんが出している案内は日本語でも書かれている。素泊まりUS\$20、朝食付き\$25だそうだ。妥当なところだろうと思い、すぐその宿に決めた。ランチリのリコンファームと両替をしたいんだけど…。おばさんに言うと後で大丈夫と言われた。そしてオーストラリア人カップルとともに車に乗り込み、宿へ向かった…と思っただけで着いた。外側は

「え、これで\$20？」

と思ってしまう感じだ。\$20ってベトナムでは結構外見は綺麗な宿だったからなあ。《この物価は高いぞ》と直感した。建物は1階建て。部屋にベッドが4つある部屋と2つある部屋が提供されて、オーストラリアンの彼らに

「どっちがいい？」

¹シサイ。日本の街角で演奏している南米エクアドル出身のグループ。私が最初に見たのは中央林間(神奈川県大和市)に住んでいた学生るとき、近くのスーパーの前での演奏だった。その後、北九州に住んでから小倉や黒崎でも彼らの演奏に出会った。近くの小学校に招かれたときの様子がローカルニュースで取り上げられたりもしていた。彼らの演奏により、私の南米への想いはさらに強くなったものだ。

と聞かれた。私はベッド4つの方はドミトリーだと思ったので、おばちゃんに安いのかと聞いたが値段は同じだそうだ。うーんと考えてる間に彼らがベッド2つの方に決めてしまった。部屋は悪くない。ホットシャワー、トイレつきでベッドも部屋も清潔だ。キーホルダーもモアイでうれしい。

食堂があって、日本語の本もいくつかあった。えらく古い本だが面白い。日本人はイースター島のお得意様らしい。宿帳に記入し、コーヒー(インスタント)を飲みながらしばらくくつろいでいると、ある白人男性が来た。おばちゃんが相部屋いいかと言うので、ベッド4つもあるし、どうせはじめドミトリーだと思ったから OK した。旅は道連れ世は情け… 楽しくなりそうじゃないですか。彼の名はディディエ。"DDA" と略記するとわかりやすいと教えてくれた。上着にカナダの国旗が入っていたので

「カナダ人？」

と聞いたら(俺も単純な質問するなあ)、カナディアン&フレンチだそうだ。今はタヒチに住んでいて、語学と歴史の Teacher だそう。メル・ギブソンに似ている。明日車を借りるけど、何人かで share した方が安いから一緒にどうだと誘われた。即 OK だ。私は国際免許をとってこなかったのが運は彼におまかせであるが、快諾してくれた。彼はとても疲れているので今日は寝るといふ。私はさっそくこの辺りを見ようと思い、村へくり出した。

初めに海へ向かって歩いた。青々とした海が見え、途中からは土の道になった。うろろろしながら「島」を実感した。海岸線は荒削りで、景色がとてもいい。静かだ。再び舗装された道へ出てしばらく行くと、初のモアイとご対面！おー、会いたかったぞ！海を背にして立っている1体のモアイ。これがモアイか。しばらく眺め入ってしまう。いやー、日本を離れてはるばる遠くまでやってきたんだなあと感じる。その辺りは漁村の雰囲気を感じ出していた。キリスト像が海に向かって立っていた。そこで雨がちょっと降ったので、ちょっと雨やどりをしてから体育館、学校、教会などを見てまわった。今はキリスト教世界なんだな。途中、同じ宿のオーストラリア人の2人とも会った。なんだ、ここは日本で思ってたよりちゃんとした街だぞ。日本人が持つてるイースター島に対するイメージは間違ってるなあ。

その後教会の横の道をずーっと行き、空港の端へ出ようと思って歩いたら、これがとんでもなく長い道のりだった。でも途中、馬に乗った小さな男の子に

「¡Hola!

と挨拶されたりした。いやーうれしいねえ。だが無意識のうちに

「Hello。」

と答えてしまった。スペイン語がスッと出てこない。それから木の柵に囲まれた庭でサッカーをしている子供たちや(サッカーはやはり大人気らしい)、馬が草食ってるのを見たりした。

空港の管制塔が見え始めた辺りで霧が前からやってきて雨になり、すぐ止むだろうと思ってたらかなり降ってきた。やべーと思ったときにはもう遅い。雨宿りできるようなところはどこにもない。背の低い草が生えているだけ。持ってた荷物を頭の上に乗せて走った。びしょびしょになったところで止んだ。あーあ、と思ってたら日が照ってきて、歩いてい

るうちに乾いてしまった。なんか便利だな。雨は気にすることないや。

また、空港沿いの道でもすれ違うときに男の人に挨拶された。空港は閉まってすっかり活動を停止していた。どうやら飛行機が来るときだけ活動するらしい。ドアは閉められ、電灯も消えて真っ暗だった。両替してないんだけど、どうしよう。村を一周して宿に戻ると、おばちゃんが食堂から顔を出した。

「オロンゴ行ったの？」

「いや、この周りを散歩しただけ。」

MONEY EXCHANGE がないんだけどと聞くと、T/CでOKだそうだ。店で買物するときもT/Cでいいらしい。でもその時間、店は軒並み閉まっていた。シエスタらしい。

宿へ帰ったのは15:30ごろ。疲れたので眠たかったが、その前によくシャワーを浴びて着替えた。おー気持ちいいぞ。体洗うの3日ぶりじゃないか。その後は朝までお休み。あ、昼飯食ってないな。まあいいや。

DDAはいびきをかいていた。

6.2.2 ラノ・ララク 1998年7月21日(火)

今日は8:00ごろ起きた。DDAが

「おはよーございます。」(日本語)

昨日は8:30出発と約束していたが、DDAが朝からシャワーを浴びたり身じたくをしたりしたのでその後の出発となった。朝食はオレンジジュースと平べったいパン2個、ビスケット3枚、オレンジジャム、バター、インスタントコーヒーだ。なんか変なの。メインは何なんだ？でも何も食ってなかったからうまかった。

10時ごろ2人で宿の車を借りて(1人\$30)出発した。あれ？このシートベルト、ちゃんととまんない。はずれちゃうじゃないか。島の中心を通る道を北へ向かい、着いたのはOVAHEビーチ。途中まで道は舗装道路だったが、ビーチ近くから土のデコボコ道になった。分岐のところではどっちに行ったらいいのか良くわからなかったなので、適当に進んだらOVAHEビーチに着いたのだ。ビーチは小さかったが綺麗で、丘に登って見た景色もとても良かった。風が強くてちょっと肌寒い。でもモアイはない。

再び車に乗り込み、アナケナへ行くと5体のモアイの姿があった。いいぞー。そこではフランス語ガイド率いる10人ぐらいのツアー客が説明を受けていた。近くの石に座ったらそこに座らないでと言われた。この石もモアイ？ツアー客が移動してからDDAと一緒にモアイへ近付いた(ガイドのおばちゃん20分ぐらい喋ってた)。DDAはフランス語がわかるので、聞いていたことを英語で説明してくれた。それを聞きながら2人でモアイの横へ登ろうとしたらおばちゃんにまた怒られた。登っちゃいけないらしい。頭にプカオという赤い石の帽子をのせたモアイが綺麗なビーチを背にして立っている。海もとても綺麗だ。感激だ。近くにはホツマツアのモアイというものもあった。そのモアイの前には銅板で

KON TIKI

と書いてあった。コンチキ号と何か関係があるのか、スペイン語だからわからん。写真撮ったから帰ってから解説しよっと。

その後は島で一番高い山の方へ進んだ。その辺に生えているのはガムツリーという木だとDDAが教えてくれた。匂いがわかるかと聞かれたがよくわからなかった。ポリネシア特有の木らしい。途中何度か車が登れないところがあった。道じゃなくてタイヤの後があるだけのところが続く。大きな水溜りがあったりもする。そこをひどい車で悪戦苦闘しながら進んだ。坂になっているところではすべるので、思いっきり勢いをつけて登ったりした。DDAはハンドルをグルグルグルグルグルグル回す。ひどい悪路で運転がとて難しそう。スピンして景色がぐるーっと回ったり、でこぼこ道で派手に上下にガタガタと揺れるのが結構楽しい。久米明の声で

「取材班は…」

とナレーションを入れたくなる。しかし景色がとて素晴らしいぞ！DDAはイギリスにある景色に似ていると言う。行ったことないけどそんな感じするなあ。特にハンガロア方面を一望できるところはすごかった。村が遠くに見えて、島の輪郭を半分以上見渡せる。大パノラマだ。こんなとこの情報はなかったなあ。

これ以上もう車で行けないので、それから元の道まで戻り、アフ・アキビへ向かった。海を見つめる7体のモアイだ。ホツマツアが入植前に送り込んだ7人の使者を表していると言われている。島にあるモアイで海の方を向いているのはここだけだ。いやー、これもいいぞ。モアイって何か哲学的な姿してるよなあ。そこでは2人の人に出会った。日系アメリカ人のリンダさんと日本人のトオルさん。リンダさんはカリフォルニアから来たそう。トオルさんはアメリカで勉強して、卒業したのでその後南米周遊チケットを使って南米からここへ来たそうである。いいなあ、南米。でもペルーには行ってないらしい。DDAと私は彼ら2人を車に誘い、長期滞在していて島に詳しい彼女にその後ガイドしてもらうことになった。

まずアフ・アキビ近くの洞窟へ行った。へー、こんなところ教えてもらわなきゃ見逃しちゃうなあ。中へ入った。普通は危険だからガイドは行かせないらしい。彼女は行って見たかったのだろう、先頭に立ってどんどん奥へ入って行く。彼女、用意がいいねー。懐中電灯持って来てる。私も後に続いた。DDAは途中で待ってることにして、着いてこなかった。

「川口いー浩わぁー」

と嘉門達夫の歌が頭の中で繰り返される。Adventureだ！着いていかないと、暗くて足もとが見えないので必死になって着いていった。途中、上に穴が開いているところがいくつかあったが、上は覗けなかった。どんどん奥へ行くと、とうとう行き止まり。そこで開いている穴には登れそうだった。石が積んである。この洞窟は全部自然にできたものと言う。人が掘ったものではないそう。まずトオルさんが石に足をかけ、狭い穴から上へ上がってみた。上がった。その後続いて登ると草っ原の上だった。こんなとこに穴開いてるのってなんか面白いな。地上を歩いて車を止めたところへ戻った。そう、DDAはまだ中だ。彼は入口から出て来た。

車のガソリンの残りがEmptyに近い。一度補給しにハンガロアへ戻らねば、ということで引き返すことになった。途中、倒れているモアイがたくさん見えた。島のモアイは一

度全部倒されたそうだ。現代人が立て直したものだけが、現在立っているのである。ガソリンを満タンにしてからはラノ・ララクへ向かった。まずトンガ・リキ。日本企業のタダノがクレーン持って来て立て直したという15体のモアイ。でかい！今までのと違う。なんだこの存在感は。絵になるバックの景色も素晴らしい。それから昔、大阪万博のときに日本に来たというモアイがそばにぽつんとあった。よくこんなもん運んだね。胴体には、運んだときについたという鎖の後があった。相当重いんだな、これ。近くから遠くから、ここトンガリキの写真を撮りまくってしまった。バックのポイケの切り立った崖もとてもいい。君たち、いいところに立ってるねえ。

その後モアイの石切場、ラノ・ララクへ。この山も印象的な形と色をしている。近付くととてもシュールな世界が広がっていた。トンガリキから見たラノ・ララクも印象的だったが、反対側ではモアイがごろごろしてる。半分土に埋まっていたり、傾いてたり、大きいものから小さいのまでキノコのように山肌に生えてる。また岩からの切り出し途中のまま残されているものがそこかしこに…。

「おもしろ おおーい！」

思わず叫んでしまう。とても楽しかった。なんとも不思議で、おかしくて面白くて謎めいていて、現実離れしている。なんなんだこの景色は！

それから火口もでかくて、綺麗で、まわりの景色がまたまた素晴らしかった。この島はモアイだけではない。モアイがなくても景色がとても素晴らしいところであるとわかった。この素晴らしさは来ないとわからない。説明しづらい。写真でもこの素晴らしい景色については紹介されているのを見たことがない。モアイ抜きでも十分すごいぞ。さて、レンタカーは10時から8時間。もう返却時刻を過ぎそうだったので今日はここまでにして宿に帰った。

彼らに、一緒に夕食はどうかと誘われた。DDAと私は当てはないので、お奨めのレストランへ連れて行ってもらうことにした。そこでは私を除く3人ともスペイン語が話せるということを知った。私だけわからん。通訳してもらって、魚、ご飯、ビールを注文した。乾杯は

「Salud (サルー)！」

である。ビール、うめえー。玉葱とトマトのソースがかかった魚、うんめえええー！この一年間で一番うまい料理だ。幸せだ！幸せ一杯だああー！！

彼らの話はアメリカのJapanese societyの話からはじまり、戦争、経済の話へ及んだ。途中、日本の輸出の何%ぐらいがアジアへ向けられているのか、日本が優勢なのは自動車やオートメーション機器などだろう、それについてはエンジニアの彼の方が詳しいだろう…と私に振られたが、そんな話題にやついていけませんぜ…。

一人で思いっきり劣等生気分を味わった。こういう劣等感って大事だよなー、とか思いながら。この旅はカンボジアのようにはいかないな。インドでMUNJUNと一緒にいたときみたいだ。話に加われない。スペイン語ペラペラの人が一緒にいると、どうしても現地の人と1対1になれないよなあ。TVで『Mr. ビーン』をやっていた。店じゅう笑いの渦だった。すごいぞMr. ビーン。

帰りは22時を過ぎた。長い長い食事だったが満足だ。スーパーマーケットで水1.5リッ

トルを買った。T/Cが使えたが、パスポート番号を控えられるときのやりとりはDDAがいなかったら大変だった。数字ぐらいスペイン語覚えとけよなーと思われただろう。やはりスペイン語の勉強が全然足りない。知識として持っているのと、使いこなせるのとは違う。まだ南米へ行くのには早すぎるぞ。未熟者。

6.2.3 Gracias! 1998年7月22日(水)

疲れた。ようやくひと休み。ここは島の西側、TE PEUよりちょっと先のところだ。もうハンガロアが見えない。よく歩いたなあ。10時ごろから約2時間半歩き通しだった。日が照ってきて海がきれいだ。山の景色は牧歌的で美しい。この辺にモアイあるはずなんだけどな。岩はごろごろしてるけど、それらしいものは全然見当たらないぞ。海はどこを見渡しても水平線で、島や船の姿はない。「絶海の孤島」を感じることができる。鳥のさえずりが耳に心地よい。途中、数頭の牛にめっちゃめっちゃ見られた。ずっとじーっとこっちを見て、全然目をそらさないのだ。ここの牛は茶色いのと黒いのがいる。毛はとても美しい。やっぱりインドの牛とは違うな。角は立派で顔には威厳がある。前を通るときちょっと怖かったぞ。

タハイを通ったときには、近くの家から男の子が石掘りの小さなモアイを1つ持って走って来た。その後に彼の小さな妹も走ってついてきた。

「Hola.」

と言った後、いらぬよというとすぐに走って家に戻ってしまった。その後に小さな妹もタタタタ…とついて行った。おいおい、売りたいならもうちょっとねばってもいいんじゃないの？でもそれでいい。

しばらく休んだ後TE PEUの表示のところへ戻ると、DDAがバイクでやって来た(13:30ごろ)。彼はここから島を一周するつもりだそうだ。道はないんだけど、バイクなら行けるでしょう。彼と別れてからアフ・アキビ方向へ歩いた。昨日行ったTE PAMUの洞窟を通り過ぎ、7体のモアイが見えたところで右にハンガロアへ行く道が分岐していた。ここを通過して戻ろう。右へ曲がり、歩いてしばらく行くと、スズキのバイクに乗った人が後ろからやって来て止まった。

「ハンガロアに行くのか？乗れ。」

と言ってきた。何の警戒心もわかなかつたので、遠慮なく乗せてもらった。

「ハポンか？このバイクはハポン製だ。」

と言っていた。いやー、助かった。結構長い道のりだ。歩いていたら夕方になつただろう。14:30ぐらいにハンガロアの教会前に着き、そこで降ろしてもらった。

「Muchas gracias.」

とお礼を言うと、

「De nada, amigo. Chao!」

と言って彼は颯爽と去っていった。いやー、おっちゃん、かっこいいぜ！初めてスペイン語で会話らしきものになって、うれしかった。

早く戻れたので時間ができた。オロンゴへ行こう。その前に博物館へ…と思ったのだ

が、海岸へ向かって歩いたら博物館へは結構距離があるとわかったので、そのままオロンゴの方へ歩き始めた。(結局オロンゴの方がかなり遠かったのだが。) 食人洞窟アナ・カイ・タンガタはどこだ? と思って歩いたのだが、地図を見て予想したよりもっと遠かった。小さな港の近くには頭の落ちたモアイが1体あった。それを眺めながらそこでちょっと休憩した。この港は本当に小さい。小さな漁船用だ。この島への船便はないけど、あったとしても停泊するところがないよなあ。

洞窟のちょっと手前で犬に激しく吠えられた。ずっとついてきて今にも噛みつきそうな勢いだった。怖かったぞ。帰りもこんな目に会うのかな。やだなー。洞窟は驚くほど大きかった。断崖から見たのだが、奥行きもありそうだった。海の水は何とも言えない美しい色で、崖の高さと洞窟の巨大さと「食人」という事実から来る不気味な雰囲気をやわらげてくれている。近くでは釣りをしている人が何人かいた。しかしすごい崖だ。波も迫力がある。荒い岸壁にドドーンと打ち寄せ、あちこちで高いしぶきを上げている。景色を見ながら思わず

「東映。」

とつぶやいてしまった。なんか三角マークの「東映」って字が出てきそうな感じなのだ。

さて、その後長い長い登り坂を孤独な闘いが続いた。体力ねーなあー。あ、今朝飯食ってないや。今日口にしたのは今背中にしょってる水だけだ。力出ないわな、そりゃ。やたらと長い道のりだった。2時間以上歩き、17:20分ごろ頂上に着いた。またまたものすごい景色だ。オロンゴの鳥人の家などよりも島の景色に圧倒される。大きなラノ・カオの火口。火口の淵と切り立った崖。はるか下に見える海面、沖合いのモツ・ヌイ。これはすごい。うーん、他に言葉ないかな。ポキャブラリー少ないな。文章表現力が乏しいぞ。言い表せない。ちょっと写真撮り過ぎた。

18:30を過ぎ、疲れていたが仕方なく歩いて下り始めた。途中、車が私を追い越して行く。いいなー。あ、登りの最初のとき、あまりの景色の良さに歌が口から飛び出したっけ。それがなぜか

「ちーらしー、寿司いーなーら …」

と北島三郎のすし太郎の歌だった。一人で大爆笑した。なんでこんな歌なんだ? しばらく歩いて下っていると、車が後ろから来た。通り過ぎるのかと思ったら速度を緩め、止まった。乗っているのは若い夫婦だ。スペイン語で何やら聞かれたが全然わからない。でも止まってくれたということは乗せてくれようとしているのだろう。

「ハンガロア。」

と行き先を言い、何か言われたので

「Si。」

と言って乗せてもらった。なんて親切な人たちなんだ。止まってくれという意志表示もせず、歩きながら《車、楽そうでいいなあ〜》とか思っている人間に向こうから声をかけてくれるとは。メインストリートで降ろしてもらった。

「Muchas gracias。」

今日2回目だ。とてもうれしい。なんか人と触れ合っているという感じがする。挨拶だけだが、スペイン語しゃべってるし。

20時ちょい前、コパカバーナというレストランに入った。客は誰もいない。店の人も誰もいない。きれいないいレストランだ。でもちょっと高そうな感じ。声をかけると奥からおじさんが出てきた。

「スペイン語ダメか？ 英語か？」

と聞かれたので英語にしてくれと答えた。魚とサラダを注文した。そして飲み物はビール。昨日と同じ CRISTAL というビールが出てきた。グラスに注ぎ、一気に飲んだ。プハー、うめえー。魚は昨日のがとてもうまかったので他の店でも試してみようと思ったのだ。しかし…量はすごいがなんだこれ。直径約10cmの切り身が2つ、付け合わせもなく皿に載っている。しかもこれ、ただバターで焼いただけなんじゃないの？ うーん、昨日の店の勝ちだ。サラダは別の皿にドド〜んと、トマトのスライスとキャベツだ。これも量が多い。量の多さはうれしかったが、ちょっと味と見た目が物足りなかった。最後に紅茶を頼んだら、切らしててないそう。あまり飲む人いないのかな。コーヒーを頼んだら、お湯の入ったカップと、Nestle のインスタントコーヒーの缶と粉ミルクと砂糖が出て来た…。なんだこりゃ。インスタントでも裏に入れてから出してくれればいいのに。どうせ私は違いのわかる男じゃないんだから。

途中から客（おじさん）が来て、一人で隣のテーブルに座った。その後は中年夫婦が来た。店にはこの店の娘らしい中学生ぐらいの女の子がいて、店内に流している曲にノッて体を揺らしていた。

レストランを出てから2軒の土産屋に寄っていくつか買物をした。結構高いな。朝買ったフィルムも高かった。全て日本で買うのと同じぐらいの値段だ。あまり土産買えないなあ。

食料品店で水を買ってから宿への帰り道、視界の上の方がにぎやかなのでふと上を見ると…満天の星！ごちゃーっと星がいっぱい光っていた。すごい！天の川がはっきりわかる。うわー。しばらく立ち止まってしまった。こんなにクリアな星空は多分、研修航海のとき以来だろう。街灯がじゃまだだったので、宿を通り越して海の方へ歩いた。南十字星ってどれだっけ。探したけどわからなかった。北斗七星らしきものはあったけど、北斗七星って南半球で見えるんだっけ？ 見えないよなあ。しかしすごい星空だった。

土産屋で6枚買ったポストカードを宿に帰ってから書いた。明日郵便局に出しに行こう。その後マウンテンバイクを借りて島の東側を見に行こうと思う。明日が最後だ。

6.2.4 青空のアナケナ 1998年7月23日(木)

昨日遅かったので、起きたのは10時ごろだった。朝食を食べに食堂へ行くと、DDAが食事を終えたところだった。彼は別の部屋が整ったので昨日の夜からそちらへ移っていた。今日は、おばちゃんが目玉焼を焼いてくれた。おお、これがあるだけで随分違うぞ。パンも食べ放題だ。あんまりおいしくないけど。

私が食べ始めると、DDAに今日また一緒に車を借りないかと誘われた。どうしよう。でも東へ行くにはやはり車の方が便利だろうなあ。OKした。ただ、昨日博物館へ行かなかったので今日行きたい。レンタカーはこの宿で借りると高いし、車も良くないので他の店へ行くことにした。DDAが良いレンタカー屋を知っているそう。Hertz レンタカーと

いう店なのだが、DDA はどこだったかはっきり覚えていないらしい。2人で探しながらずーっと歩いた。行く途中にマーケットに寄り、木彫りのモアイを1つとTシャツを1枚買った。人に聞きながら Hertz を探したのだが、別の良い店を教えてもらったのでそっちへ行くことにした。

車を借りた店は木彫り職人がいる店で、DDA は知り合いだったようだ。昨日会ったのかな。木彫りや石掘りが並んだ机があるだけの殺風景な店だが、DDA によればこの店のものは伝統的なスタイルで彫ってある良い品だそうだ。モアイだけでなく、タンガタ・マヌ²やカヴァカヴァ³の面白い木彫りが並んでいる。カヴァカヴァも頭が二つあるものや、球体から頭が出ているという訳のわからないものなど、バリエーションが豊富だ。ワニみたいだけどワニじゃない、何だかわからないもの⁴もある。でも欲しい思う大きさのものは高いな。とても買えん。DDA と店のおっちゃんは、木彫りや木彫りの写真集を見ながら、石の釣り針のカーブがどうのこうのという話しをしている。DDA はポリネシアの文化にとっても詳しいようだ。釣り針の形は年代や地域によって特徴があるらしい。

郵便局でポストカードを出した後、車に乗り込み、昨日行ったオロンゴにまた行った。途中、歩いている人を見かけたので、そのスイスから来たという2人(夫婦?)も乗せて上へ登った。やはり景色が美しい。そして火口は何度見ても凄い。モツ・ヌイ、モツ・イティは遠い。鳥人儀礼であそこまで泳いだと言うが、本当にあんなところまで泳げたのか? ここの崖っ淵も凄まじい。ここから降りたのかな。降りたとしたらどうやって降りたんだろう。今日は今までで一番天気が良い。ここでは同じ宿に泊まっているオーストラリア人カップルにも会った。景色を眺めながら、しばらくのんびりした。

その後東海岸へ行き、倒れているモアイをたくさん見たりしたが、荒削りの海岸に波が打ち寄せる様と、空と海の色が素晴らしかった。この美しさは筆舌に尽くしがたい。そして東海岸沿いに北上した。途中にトランペット・ストーンがあるはずなのだが、どこにあったのかわからなかった。倒れている大きなモアイがある近くに、表面がつるつるの丸い石「テ・ピト・クラ(光りのへそ)」があり、ここでは南米系美女に出会った。すごい美人! 足が長えー、体細えー。綺麗えー。彼氏&友達と一緒に島をまわっているそうだ。

アナケナビーチはとても美しかった。この前きたときよりも天気の良いせいだろう。今日なら泳げるな。砂浜に座り込み、DDA にタヒチ情報を聞いた。タヒチ島より、モーレア島へ行って過ごす方が良いと教えられた。どうやって行くかも教えてもらった。そんな話をしながら、のんびりした。とても気持ちがいい。幸せな気分だ。

《素晴らしい景色》

今日はこの一言に尽きる。

宿代は\$65。今日出発するってことを、本当は今朝言わなければならなかったらしい。宿に帰っておばちゃんに言うと、おばちゃんは私が今日出るってことに気づいてなかったようだ。ごめんなさい。でも宿帳チェックしてないのか? いつ出るか書いたはずだけど。1

²鳥人。長いくちばしを持つ頭で体は人間の像。オロンゴの岩にはこの鳥人の姿がたくさん彫られている。

³モアイ・カヴァカヴァ。髭、長い耳、大きい目、猫背で痩せていて、つき出た肋骨の人間の像。島にたどり着いた最初の痩せた住民を表現しているとも言われるが、本当は何なのかわかっていない。

⁴後で調べたら、これはモコ・タンガタ(とかげ人間)の像だそうだ。

泊\$25のはずだが、\$20+20+25なのは、DDAと一緒に部屋になった分を考えて割引してくれたのだろう。でもお釣がないようだ。T/Cで\$80分渡しちゃったんだけど。

しかし、この島の村で使ったUS\$のCASHはどこへ消えるんだ？ずっとUS\$で払ってたし、旅行者は大抵US\$を使ってるだろ？なんでみんなチリ・ペソでしか釣りをくれないうだろう。不思議だ。ここへ来てからドルのCASHはなくなる一方で、増えることはなかった。結局、宿代の釣りはDDAが立て替えてくれた。明日レベッカおばちゃんからもらうから気にするなと言ってくれたが、申し訳なかった。どうもありがとう。

空港へ行くタクシーをDDAがつかまえてきてくれた。遠くないから歩きでも良かったんだけど。同宿のおじさんも同じ飛行機に乗るらしい、おじさんとDDA、そしてオーストラリアンの兄ちゃんの4人でタクシーに乗った。タクシーに乗る前、

「荷物それだけ？」

と言われた。こっちにしてみりゃ、君たち何でそんなに荷物があるんだという感じだ。その荷物の多さ、とても不思議だ。何入ってるの？そんなこっちゃアジア旅行はできんぞ。車内ではDDAが、オーストラリアンの彼は既に彼女と結婚して何年にもなるという話を聞いて、

「何！彼女結婚してるのか！おお、彼女とのロマンスがあ〜。」

と言ってみんなを笑わせてくれた。空港へ着き、DDAと握手をして別れの挨拶をした。

「Have a nice °ight!」

「Enjoy your °ight!」

なぜ彼らはあんなに人を気持ち良く送り出すのがうまいのだろう。私には、あれほどのことができるだろうか。

空港ではトオルさんと再会。同じ飛行機でタヒチへ向かう。トオルさんから、リンダさんの面白い話を聞いた。彼女がここへ来た理由を。彼女が見た不思議な夢。そしてその夢に出てきた石像のある島を探してここへ来たという話。アフ・アキビで初めて会った時に、DDAからマルケサス諸島の情報を熱心に聞いていたことも。へえ〜。

空港には小っちゃな土産もの屋が3つある。デザインがいい欲しかったTシャツはどこへ行っても最後まで\$20だった。\$15のTシャツも買ったけど、誰かにあげよう。しかし物価高いなあ。土産屋のおばさんが、TAPATI RAPA NUI '99のポスターをタダでくれた。レストランで見かけてからずっと、《どこかで手に入らないかなー》と思っていたのでとてもうれしい。やった！ありがとう！

出国手続きは簡単だ。出国ロビー（言葉の印象と実物はかけ離れている）にはまた土産物屋があったが、大体どれも島の店で買うのと同じ値段だ。村で私が買った地図は\$10だったが、ここではちょっと高く\$12。\$10だったら買って誰かのお土産にしようかと思ったんだけどな。あ、木彫りのカヴァカヴァ、いいなあ。ちょっと欲しい。でも\$15か。金ないな。T/Cも残りわずかだし、タヒチも物価高いから支出を抑えないと。まあ、石彫りのモアイ買ったからいいじゃん。うーん、でもちょっと欲しいぞ…結局買わなかった。

搭乗のために待ち合いロビーから外へ出たら雨だ。今日一日素晴らしい天気だったのに、最後の最後に雨か…。あ、ポスターちょっと濡れちゃった。あー。この島は空港と飛行機が頼みの綱だ。ここを中心に全てがまわっている。週に3回しか来ない飛行機が来る

と、空港はあらゆる人々でごったがえす。滞在中に見かけた人がたくさんいた。さようなら、ラパ・ヌイ。

飛行機の席は窓際。非常口のところなので前が広くて嬉しい。

21:55。めちゃめちゃ揺れるー。

3時(現地時刻23:00)タヒチ着。またあの楽団と、小さな花でお出迎えた。いいねえー。トオルさんと一緒に、空港近くに宿をとった。シャワーは水だけど、暑いから気にならない。便器にはなぜか便座がない…。どうするんだ、これ。でもそんなことではもう驚かないな。部屋は無駄に広いぞ。空港のインフォメーションで、ここはPAPEETEの街にある宿より静かだと聞いたのだが、犬と鶏と飛行機がうるさい。でも疲れてたのですぐ眠れた。ただ、時差があるので4時ごろ目が覚めてしまった。やっぱりまた寝た。

6.3 南国の楽園 { タヒチ {

6.3.1 モーレア島 1998年7月24日(金)

朝食は屋外のテーブルで。フランスパンと紅茶、バター、ジャム。それだけ。でもパンはまるまる1本出てる。紅茶は直径15cmぐらいのでっかいカップにリプトンティーバッグ。そして片手鍋にお湯。まるでキャンプだ。例のNestleのインスタントコーヒーの缶もある。トオルさん(31才と判明)は、ICU(国際基督教大学)を卒業してからSONYに入り、MBA(Master of Business Administration)をとりにアメリカへ行っていたそう。この先はハワイへ寄って帰国するということである。

今日とはりあえずDDAに勧められたモーレア島へ行くつもりだ。朝食後すぐ宿を出て、トオルさんと一緒にル・トラックでパペーテへ向かった。彼はチリ・ペソを換金したいのだが、空港でもポリ銀(Banque de Polynesie)でもダメだった。なんでだろう。イースター島への便があるところなんだから、チリ・ペソ持って来る人多いだろうに。ポリ銀のおばさんによると、タヒチ銀行(Banque de Tahiti)ならできるそう。私はポリ銀で1万円をCFPに替えた。その後彼はタヒチ銀行へ、私はモーレア行きフェリー乗場へ向かった。また会うかもしれないが、とりあえずお別れ。

フェリー乗り場でチケットを買い、時間はまだあったが船に乗り込んだ。この船、タマリイ・モーレアVIIIは元日本の船だったのだろうか。浮きに「かなや丸」と書いてあったり、ドアの上に「客室入口」と日本語があったりする。上のデッキへ出ると、椅子が汚い。掃除ぐらいしろよ。いかにも安い船という感じだ。でもかまわず座った。今日はタヒチの山に雲がかかってなくて、島が良く見える。天気も最高。とても暑い。そういえば船に乗るのって久しぶりだな。これは1時間ぐらいかかる一番遅い船だそうだが、船旅を楽しむには丁度良いと思う。

9:52(もはやこの腕時計が合ってるという確信が持てない)、汽笛が2回鳴った。出航だ。9:54再び汽笛2回。9:56汽笛2回。まだかよ。10:00出航(腕時計は合ってるようだ)。10:27タヒチ島の全景が見える。海もキラキラしてきれいだ。ガイドブックには、船は相当揺れると書いてあったがそうでもない。大したことはないじゃん。船に揺られて海を見て

いると、思わず山水譜を口ずさんでしまう。

「 双一弓一たゆ一むうーう... 」

望星丸二世 … 懐かしいなあ。

船がモーレアに着いてからインフォメーションへ行ってみると誰もいない。幾つか地図やパンフレットがあるだけだ。どうしよう。とりあえず空港のインフォメーションまで行けば宿情報を得られるだろう。ル・トラックは止まっていたが、運転手も客も誰もいなかったのでも乗るのをあきらめて歩きはじめた。しばらく行くとあるトラックが止まって、空港近くまで乗せてくれた。何人が旅行者らしき人も乗っている。

「^{メルシ}^{ボク} Merci beaucoup. 」

その後空港まで歩くと… あれ？ ここ滑走路じゃん。おい、柵ぐらい作っとけよ。小さな空港だ。でもインフォメーションはフェリー乗場と同じで誰もいない。うそー。どうしよう。こうなったら歩いてやる！ とりあえずガイドブックでゲストハウスを探す。ここから一番近いところに決め、歩くことにした。

暑い長い道だった。1時間半ぐらい歩いて ^{モートル} ^{アルベル} Motel Albert に着いた。部屋はあるという。良かったー。おお?! しっかりすごい部屋だ。1人で泊まるのはもったいない。キッチンがある。冷蔵庫がある。こ、これは住めるじゃないか！ 部屋を掃除していたお姉さんに、

「フランス語は？」

と聞かれた。フランス語できるかって聞かれることが多いけど、やっぱりフランス語喋れると対応ちがうのかな。確かに英語だとコミュニケーションが浅い感じはするけど。シャワーを浴び、洗濯をしてからベッドでくつろいだ。

会話集でちょっと調べたら…。イースター島からタヒチへの便の出入国カードにはフランス語とスペイン語しかなかったんで、オークランドからの便（フランス語、英語、日本語あり）のときの記憶を頼りに《大体この辺にこれ書いたよなー》とか思いながら適当に書いたけど、思いっきり間違ってた。旧姓の欄に名前書きちまってた。名のところにはフライトナンバーを書いた。すなわち次のようになっていた。

姓	SEKIYAMA
旧姓	TOMOYUKI
名	LA833

こ、これでは私は「関山 LA833」だ。昔は「友之 LA833」だったということになる。すごい間違いだ。イミグレの人、全然見てないな。名前に数字入ってる人なんているかよ。

夕方、近所を散策した。大きな街はなく、のんびりムードがただよっているいい島だ。でも宿近くにビーチはないな。道端で、めっちゃめっちゃカラフルな魚を釣り下げて売っているのを見かけた。トロピカルなブルーやグリーンの輝く魚だ。あんまりうまそうじゃない…。夕飯を仕入れに食料品店へ行くと、店は 17:00 で閉まっていた！

「しまったぁー！」

冗談を言っている訳ではない。どうしよう、腹減ったぞ。他に店ないし、腹がグーグー鳴っている。しょうがない、レストラン入るか…。

最高の贅沢をしてしまった。とても幸せな気分だ。うまい！うまい！うまい！食べながら顔がニコニコする。ここはイタリアンレストラン^{アルフレッドス} Alfredo's。宿の近くの店だ。始め前を通ったとき、私はTシャツに単パンという格好だった。なんか入りにくい雰囲気だったので、とりあえず宿に戻ってから襟着きのシャツと、下はしょうがないけどジーンズ(すなわちただのいつもの格好)に着替えた。Tシャツ単パンよりはましだろうと思って。しかし案の定、料理は高い。結局、ビールと、Aperitif というところから勤められるままに1品、そしてこれまた今日のおすすめシーフードのフィットチーネとコーヒーを食し、全部で約4,000CFP(4000円強)。高かったけど、確かにすばらしいお味でございました。たいへん感動的でございました。

「うまいぞおおー！」

と大声で叫んで、世界中にこの感動を伝えたい。なんて幸せな気分なんだあー。でも、2人用テーブルで向かい側に誰も座ってないってのは、ものすごく淋しいぞ。周りはファミリーや夫婦ばかりだし。店のおじさんはとても感じのいい人だけど、私と話し込んでばかりもいられんよな。客が増えてきて忙しそうだ。さみしいー。でもうまいー。

しかし、こんなに食事で感動したのは久しぶりだ。ラパ・ヌイの魚料理もこいつには負ける。やっぱり食はこうでなくっちゃ。これと比べちゃいけないけど、なんなんだいつも食ってるあの寮飯は！あれが「食事」なのか？いや、今この瞬間のものとあれを同じ「食事」という言葉で表すのは不適切だ。全然違う。いやー素晴らしかった。でも日本でイタリアンレストランなんて入ったことなかったな。

帰り道、星がとてもきれいだ。南十字星を確認。宿に帰ってから庭に椅子を出して、しばし星のショーを観賞。あー、またまた幸せ。

明日はビーチに行こうと。

6.3.2 O Tahiti e 1998年7月25日(土)

朝(夜中かな?)、雨が降った。起きると天気は曇りだ。8:40ごろ荷物をまとめ、宿を出た。出るとき、受け付け小屋にいた兄ちゃんに

「Japonais?」

と聞かれた。そうだと答えると、なぜか手を横にやって片足を上げるポーズをされた。なんだあ? ああ、『ベストキッド』か。一応、

「ヒョオオー。」

とか言って同じポーズとっといた。8:45にル・トラックがClub Medを出るはずなので、通りかかったときに捕まえようというつもりで歩いた。目的地はホテルソフィテル・イア・オラ。15分ほど歩くと、後ろから来た赤いトラックが横に止まった。

「どこ行くんだ?」

と(多分)聞かれたので

「エアポート。」

と言ったが通じない。「エアロ…」と発音したらわかってくれたようだ。ラッキーだ。歩かずに済んだぞ。ああそうか、フランス語で飛行機はAvionだった。おじさんが教えてく

れたんで思い出した。学生時代の第2外国語、全然身につけてないな。車なので9:10ごろ、もうついてしまった。ソフィテル・イア・オラのビーチへ行こうと思っていたが曇りだ。おじさんにお礼を言って別れた後、とりあえず空港の中に入った。

空港でしばらくぼけーっと人間ウォッチングした後、空港を出て歩き始めた。坂がとてもしつこい。でもソフィテル・イア・オラの近くの高いところに来ると、とても素晴らしい景色だ。勢いのある木々の向こうに水上コテージが並び、透き通った海が広がっている。あー気持ちいいー。ソフィテル・イア・オラに着いてからはビーチへずかずかと入り(ここはビジターもOK)ビーチで寝る。ひたすら寝る。頭ん中からっぽ。ぼけー。気持ちいいー。ちょっと海にも入ってみたが、波うち際は下が石で足の裏が痛い。暑さで火照った腕と足、顔をつけてからまたビーチの椅子に寝転んだ。そしてまたボケーっとした。天気と景色は素晴らしく、人混みもなく、とても静かだ。いやー、これぞビーチリゾート。

15時ごろ白い砂浜に別れを告げ、フェリードックへ向かって歩いた。30~40分で到着。すぐ船の券を買って乗り込んだ。船内でコーラを買って一番上のデッキまで登って座りこんだ。あーうまい。

「おお。誰かと思ったら。」

そこにトオルさんが階段を登って現れた。前より日焼けしてる。今朝モーレアに来て、1日いたそうだ。フェリーは16:00発。モーレアの大きな山がだんだん離れていく。船は来たときよりも揺れた。でも楽しいぞ。30分でパペーテに到着すると、そこには大きな客船が停泊していた。こんな船、歳にとって金持ってて暇がないと乗れないんだろうなあ二人で話した。

船を降りてからは、やることがない。タヒチの屋台、ルロットはまだ出ていない。とりあえず市場方面へ歩き始めると、途中みんなが並んでいるところを見かけた。ポスターを見るとタヒチアンダンスのショーがあるみたいだ。特設会場が組んであって、今は祭期間中らしい。聞いてみるとショーは20時から22時までだと言う。いいねえ。早速2人で行列に並んだ。券を買う時、座席の図で丁度2つ空いているところがあったので、そこしようと思った。トオルさんが2つ空いているところを指さして、

「この席は見やすい？」

と売場のおばさんに聞いたら、いきなり笑われた。なんだ？そしてそのおばさんはおじさんと呼んだ。私たちはなんで笑われたのかわからなかった。もしかしてこの席はなんかあるのか？あの笑いは「やーい、引っかけたあー」って意味か？

実は笑われたのは英語だったかららしい。いきなりフランス語じゃない言葉で話しかけられたんで、「わからんわー」ってんで笑ったようだ。チケットは1人1,000CFP(1,000円強)だった。安い！モーレアでTiki Villageのショーを見に行こうと思ったのだが、ディナー込みで7,500CFPだったのであきらめたのだ。このショーを見つけて、とてもラッキーだった。チケットを取った後、トオルさんがホテルに戻ってシャワーを浴びてきたいというので、私はここで待つことにした。

ベンチに腰かけていると、準備をしている兄ちゃんに話しかけられた。でもフランス語だ。「日本人です」ってぐらいしか言えない。あー、くやしい、会話できない。彼は英語はダメなようだ。二言三言やりとりしただけで、会話は続かなかった。せっかくの話すチャ

ンスなのに、もったいない。

近くをうろろすると、ルロットが出ていた。トラックの屋台だ。中華の店が多いが、いろいろな国の料理がある。大きな豚を開いて焼いたりする。また、ステーキ、クレープ、ピザ、魚…いろいろあってとても楽しい。あれも食べたい、これも食べたい。目移りしてしまう。トオルさんが戻ってきてからルロットで食事することにした。なんかアジアを感じる。うれしい。こういうの大好きだ。ここへ来て、初めて日本人の新婚旅行客らしきカップルを何組か見かけた。手をつないで歩いてたりして、いかにも「新婚旅行」だ。あんまり俺達と歳ちがわない感じだな。しかし、なんでこんなところに新婚旅行来んのかねえ。面白いかな？

まず、SASHIMIを食べた。確かに刺身だ。でも下に大根じゃなくてキャベツの線切りが敷いてある。つけるのは醤油じゃなくてハンバーグのソースみたいな味がするものだったが、結構うまかった。パンが付いていて、コーラも頼んだ。変な組合せ。ルロットではアルコールは出してないそう。その後、別の店で Chow Men を食べた。量が多くてトオルさんは残した。2人で1皿頼めば良かったな。私は全部食べたけど、ちょっときつかった。ジュースは変な形のPET容器に入った炭酸オレンジジュースを飲んだ。Chow Menは具たくさんだったけど油っこくて、麺もインスタントラーメンみたいであまりうまくなかった。ちょっと食い過ぎだな。今日は何も食べてなかったから入ったけど。

さて、ショーはとてとても良かった！素晴らしかった！これを見なかったらタヒチに対する印象はかなり違っていただろう。見て良かった。体に響くあの打楽器の音。耳に心地よいコーラス。きれいなお姉さんの魅惑のダンス。男たちの格好いい力強いダンス。幻想的で素晴らしかった。これはお勧めだ。日本で想像していたのと違って、「民族」を感じることができた。彼らにとっても、これは楽しいお祭り騒ぎなのだろう。相当気分が昂ぶらしく、ショーが全部終わって舞台裏へ引きあげてからも、太鼓をたたいたり、叫んだり歌ったりして盛り上がっていた。タヒチは都会で、特に面白いところはないなーと思っていたが、このダンスを見たらとても印象が変わった。あー、新婚旅行でここへ来るといふ理由もわからなくはないねえ。来たらこのショーは必ず見るべきだよ。

空港までタクシーに乗った。空港に着いてからトオルさんがチェックインに行こうとすると、

「あ、鞆、タクシーん中に忘れた。」

と言う。なにー！チケットはその鞆の中だそう。もうタクシーは行ってしまっていた。どうしよう。私の方がおろおろした。その後の彼の行動は素早かった。あの英語力があれば何も恐くはないだろう。2人とも、もうこの通貨は使い切ってしまったので、町へ戻るタクシー代はない。両替しようにも、空港の両替所は閉まっている。この時間、両替所は飛行機が来た時しか開かないのだ。

彼はインフォメーションに行き、警察に行き、警察の車で街へ鞆を取りに行った。どうにかタクシーに連絡がついたらしく、彼が空港に戻ってきた。23:00 ごろタクシーが空港に来て、鞆は彼の手もとに戻り、無事チェックインすることができた。いやー最後の最後にやってくれるぜ。でも、あれだけ英語ができるといいなあ。私はその間ずっと、空港で彼の荷物を預って見張りをしているだけだった。

彼が乗る便はハワイ行きだ。私よりも先の出発なので、出国ゲート前で別れることとなった。出国ゲート前では別れの踊りや歌がまた繰り広げられて、楽しかった。今回は民族の踊りが見られた。あるタヒチ人の男性を見送りに来た5人の男がフロアで踊る。上半身裸。裸足。楽器なし。まさに「別れの儀式」だった。いいなあ。

売店に今日見たショー『O Tahiti e』のCDがあったので、そのCDとタヒチの紅茶を買った。ここも物価高いな。CDが高かったので金がなく、HINANO BEERのTシャツは買えなかった。タヒチではずいぶん金使った気がする。帰ってから計算したら驚きの数字が出るかもしれない。

6.4 ゆっくり帰ろう { 南太平洋2 {

6.4.1 消えた日曜日 1998年7月26日(日)

飛行機はラロトンガ経由オークランド行き。2:20発。4:30ラロトンガ着。オークランドに26日9:51着(現地時27日7:51)。日付変更線を越えたので、日曜日が消えてなくなった。

6.4.2 マオリの呪い? 1998年7月27日(月)

AUCKLAND空港で飲んだ水がいけなかった。断続的に来る激しい腹の痛み。下痢。帰れるのかとても心配になった。

今日、オークランドでは空港に荷物を預け、またAirBusに載って街へ出かけた。出かるときに空港の飲料水を飲んだのだ。喉が乾いていたのでグビグビ飲んだ。街では例のアジア屋台の店に行ったがまだ開店準備中だった。時間が早すぎたのだろう。残念。街中は寒い。ショッピングモールで本屋などをうろろした。途中でトイレに行きたくなり、えらく探しまわった。大変だ。なんとか危機一髪で見つけることができて入った。ほーっ。

ダウンタウンエアターミナルの土産店では、タヒチのティキ像みたいなのが売っていた。マオリのクラフトだそうだ。ラロトンガにもこんなのあったし、多分ポリネシアにはどこにでもあるんだろう。各地でちょっとずつ形は違うけど、同じ系統だというのが良くわかる。全部並べてみたいな。

今回は前よりも更に時間がないので、すぐバス停へ戻った。バスを待っていると、あるおじさんにちょっと来てくれと言われた。その人はなんとかExpressという、AirBusとは別の小さな空港バスのドライバーだった。なんか、おじさんはキーを車の中に付けたままドアをロックしてしまっただけ。窓がすこし開いている。おじさんの腕は太くて入らないので、代わりに腕を突っ込んでドアロックを外してくれという。なあんた、何言われんのかちょっとドキドキしたぞ。ドアロックは簡単に外れた。でもあれ、もしあの車がおじさんの車じゃなかったら怖いな。

AirBusはちょっと遅れて来た。空港へ戻る途中、なんかお腹がちょっと痛い。寒いせいだろう。なるべく車内エアコンの風が来ないようにし、お腹をかばった。でも下痢のとき

とちょっと違う感じだ。刺すような痛み…。

空港へ着き、預けていた荷物をとても感じのいいお姉さんから受け取り、チェックインカウンタの前に並んだ。あまりたくさんは並んでいないが、進むのがものすごく遅い。何やってんだよ。みんなすさまじい量の荷物だ。私のように背中にしょって1個だけという人は誰もいない。おーい、早くしてくれー。荷物がとても重く感じられて、下に降ろした。立ってるのがつらい。ようやく順番が来たが、なんか手続きがスムーズじゃない。うーん、お姉さん綺麗なんだけどな。笑顔も素敵。でも、腹痛いぞ。こっちも笑顔で会話を楽しみたいけど、そんな余裕はない。うー、トイレ行きたい…。で、出そう…。こんな時に限ってトラブルは起こる。ボーディングパスを出す機械の紙詰まりだ。うおー。よっぽど「トイレ行くから後で…」

と言いたかったが、また並ぶのはいやなので必死にこらえた。あの腹の痛みは大変だった。多分私は、紙詰まりぐらいでえらくイライラする、とても不機嫌な客だと思われただろう。お姉さんが終始笑顔だったのは救いだったが、本来ならば紙詰まりなんてのが起こっても、「No problem.」

とか言って笑顔で余裕を見せたいところだ。それをきっかけに、会話もはずんで笑いのひとつも出るに違いない。あーもったいない。ボーディングパスを受け取り、とにかくトイレへ。完全なる下痢ピー様とご対面でございます。

出国手続きをおわらせ、足早に搭乗 GATE 1 へ向かった。搭乗 GATE 前のベンチではすぐ入らずにぎりぎりまでねばった。一度入ると飛行機に乗るまでトイレがないからだ。幸い、GATE 1 のすぐ近くにトイレがある。ベンチに座り、お腹を押えて目をつぶった。痛い痛い痛いー…。腹の内側から針で刺されている感じだ。立てない。横になりたい。なんかみんなにじろじろ見られてるぞ…。

時間ぎりぎりになったので、気力をふりしぼって立ち上がった。GATE 1 を入ってからなぜかあまり痛くなくなった。マオリの呪いか？ なんとか飛行機に乗り込み、飛行機は 14:14 ごろデッキを離れた。席はずいぶん空いている。これって途中どこにも寄らないのに、なんでこんなに席空いてんだらう。月曜日だからかな。

0:40 (現地時 20:40) シンガポールのチャンギ空港着。やっぱり暑い。腹の痛みはおさまった。なんだったんだらう。モアイとティキとマオリが喧嘩でもしたかな。

オークランドでは本当にもうダメかと思った。飛行機乗らない方がいいかも…とさえ思った。とにかく痛かった。あんなのは初めてだ。それがなぜか治った。あんな痛みと下痢じゃあ治るのに相当時間かかると思っていたのに、機内で食事しても大丈夫だった。不思議だ。冷たいオレンジジュースもちょっとずつだが飲んでしまった。大丈夫だ。寒さのせいだったのか？

あの刺すような痛みから 11 時間後の今、シンガポールにいる。なんとかひと安心だ。後は福岡に飛ぶだけ。今回はけっこう日本人カップルが多いな。まあ、行きの際は高校生が多かったから、気づかなかっただけかもしれない。みんな新婚さんっぽい。私は新婚旅行でここに来ようとは思わないが、清潔で設備も整っているから旅行はしやすいだらう。でも面白いかな？

ここシンガポール空港の FOOD COURT にはあのアジアのにおいが漂っている。この

においがうれしい。腹減ってないから食わないけど、このにおいに包まれているのがとてもいい気分だ。ここはまた来ることがあるような気がする。ただ、空港からは出ないだろうけど。

腹は完全に治ったようだ。あの下痢と腹の痛みは AUCKLAND にいた間だけだった。不思議だ。

6.4.3 帰国 1998年7月28日(火)

おお、これはラッフルズクラスじゃないのか？シートが違うぞ。いいのか本当にこの席で。券を見せて聞くと、ここでいいと言う。でも液晶パネルがないな。コントローラもない。古いタイプのシートらしい。でも肘置き幅が広くて、座席スペースも広い。いいぞいいぞ。

28日(火)1:18 離陸。約5時間で福岡へ。シンガポール航空もこれで4回目だ。今回は機内スクリーンで『ブルース ブラザーズ 2000』を見た。ほとんど誰も見てないみたいだ。最後まで見たがあまり面白くなかった。その後寝たが、あつという間に朝だ。スチュワーデス(インド系美人)に起こされ、おしぼりを渡された。こんな起こされ方もいいもんだねえ~。

6:47(日本時7:50)着陸。福岡の天気は曇り。滑走路にはちょっと水たまりがあって濡れていた。税関では、とてもかわいい女性の係員が担当しているところがあった。へえー、珍しいな。はじめそこへ並んだが、2つ隣りのところが開いて、

「どうぞー。」

と男の係員に言われた。うーん、仕方ない、そっち行くか。イースター島とタヒチに行ったと言うと、

「モアイ見て来たんですか。」

と言われた。お、何かこの兄ちゃんいいねー。日本の税関でこんなに笑顔で対応されたのって初めてだ。いつもどおり、荷物を開けることもなく、2、3の質問ですぐ終わった。

あー会社行かなくちゃ。帰ってきたら即この現実である。ロビーに出てから、私は足早に地下鉄の駅へと向かった。これから、この旅姿のまま出社だ。福岡駅でもゆっくりする暇はなく、すぐJRに乗り換えだ。黒崎へ向かう列車の中で、私は今回の旅の余韻に浸っていた。最高に天気が良かったラパ・ヌイでの最後の日。今もあの表情で黙って立っているモアイたち。不思議なラノ・ララク。島で見た星空。おいしかったイタリア料理。タヒチアンダンス。思いで深い、空港での別れ。DDAはあのままずっと旅の生活を続けるのだろうか。リンダさんはマルケサスへ行ってみるのだろうか。あの島はこの先どういう姿になるのだろうか…。もっとポリネシアの民族のこと、イースター島のことを詳しく知りたい。今回見られなかった、コハウ・ロンゴ・ロンゴの板も見てみたい。板の本物は、大英博物館とチリのサンチャゴにあるそうだ。そして今回の旅で、南米へ行くにはもっとスペイン語の勉強が必要だと感じた。南米。今、私が世界で一番行って見たいところだ。

だが、またあのエキサイティングなアジアの旅に出たいとも思う。会社へ向かいながら、私の頭の中では既に次のいくつかの旅の計画が始まっていた――。

第7章 多様性の中の統一 ～インドネシア～

この旅行の後、私は旅に無感動になった自分に気づく。

7.1 プロローグ

正月は実家でごろごろしようか… そう考えていた。しかし年末休みが近づくとつれ、また私の中で旅の虫がさわぎ始めた。

インドネシア。カンボジアのアンコールを見た後とても気になっていた遺跡、ボロブドゥールのある国である。寮で新川さんと飯を食いながら話していた時に、にわかにも今回の旅行先として浮かび上がった。新川さんはインドネシアに行ったことがある。いろいろ聞いてみると、やはりボロブドゥールを見に行かなければという気になった。その後、駅前のブックセンターでインドネシアのガイドブックを買ったが、ほとんど開きもしないまま数日が過ぎた。

10月ごろから私の頭の中は仕事でいっぱいになっていて、なかなか他のことをゆっくりと考える余裕がなかった。そのため今回はチケットの手配も遅く、旅行会社に電話したのは出発の約1週間前、12月19日(土)であった。直前だから無理ですと言われても仕方ないという覚悟で電話すると、意外にも好感触。デンパサール往復ではなく、ジャカルタ往復ならなんとか取れそうである。本当は、ジャカルタから入ってデンパサールから出るというのをやりたかったのだが、デンパサールの方を取るのがやはり難しいらしい。

22日(火) チケットが確保できた。これで、土曜日にはもうジャカルタだ。出発の前日である金曜日、入社前に小倉の第一勧銀へ行ってT/Cを買った。円高なので、今後の旅行用も含めてUS\$300買っておいた。ろくに旅行準備もしていないが、とりあえずパスポートと金があれば大丈夫だろう。ガイドブックもほとんど読んでいないが、入国してからどうするかは、移動中に決めればいい。会社では、新川さんからRp(ルピア)札を何枚かもらった。以前、インドネシアに行った時の残りだそうだ。

外務省の海外危険情報で、バリ島以外は危険度2「観光旅行延期勧告」が出ているのが少し気になる。しかし出されたのは11月だ。まあ、選挙の日程も決まったことだし、正月ぐらいは落ち着いているだろう。

その日、寮に帰り着いたのは夜中の2時ごろになってしまった。遅い夕飯をとり、それから洗濯をし、洗濯物を乾燥機に入れた。このところ洗濯していなかったのも、Tシャツや下着がもうないのだ。朝までには乾くだろう。とりあえずその他の荷物をリュックに詰

め込み、後は衣類だけを入れれば良いようにした。そして年賀状書き。毎年のことではあるが、もっと早くやっておけば良かったと思う。旅行前夜に書き始めるとは。明日の自分は、もうジャカルタの宿で眠っていることだろうとなどと考えながら全てを書き終えたころ、窓の外はもう明るくなり始めていた。徹夜か …。

7.2 首都ジャカルタ

7.2.1 ニュースで見た街 1998年12月26日(土)

眠い。以前利用したことのあるシンガポール航空。座席に座り、出発を待っている。スクリーンの両脇や窓にはクリスマスの飾り付けがしてある。機体はBOEING777 JUBILEE。全席禁煙。ハンドセットの取り扱いはもう慣れたものだ。いち早く自分用の液晶パネルに現在位置情報を表示して優越感に浸ったりしてみた。12:00、飛行機が動き出した。

今日は朝から洗濯ものが乾かなくて、寮を出るのが遅れた。空港で落ち着く時間がほとんどなく、必要な買物や手続きをあわただしく次々と済ませ、あっという間に機中の人となっている。しかし今日はよく行列に並んだ。さて、まずはシンガポール行きだ。これからガイドブックを読もうと思う。今回は全然、準備万端ではない。

眠い。とても眠い。でもなかなか眠らせてくれないな。渡されたおしぼりはとても熱かった。火傷するかと思ったぞ。すぐ冷めたけど。ランチのときは初めて赤ワインを注いでもらった。とてもうまい。前回同様、やはり浮かれ気分させられた。シンガポールは今、雨季だそう。飛行機の中では映画『スモール・ソルジャー』をやっていたが、見なかった。そして私の腕時計時刻 17:55 (現地時 16:55) シンガポールのチャンギ空港に到着した。乗り継ぎ時間が4時間以上ある人は、無料の市内観光があるんだそう。この前来た時、そんな案内アナウンスあったかな。そう言えば、今日はあの歯ブラシと靴下のセットが配られなかった。あれは夜の便だけなのか？

空港はこの前と特に何も変わっていない。ずっと飛行機で座りっきりだったので、空港内をひと通りうろうろと歩き回った。でもやっぱり何度みてもシンガポール航空のスケジュールってセクシーだ。機内では酒の種類も多くてどんどん進めてくれるから、シンガポール航空を「空飛ぶキャバレー」と言う旅行者もいる(らしい)。

次の便はSQ162。空港内のインフォメーション画面を見ると、Gate 7 のところに「New Gate」とある。これは Gate が新しいってことか？ それとも出発 Gate を変更したってこと？ 他と離れた端の方にあるから、多分新しいって意味だろう。

今回はチケット手配するのも遅かったけど、それ以外の準備も何もしていなかった。全部昨日から今日にかけてやった。年賀状も書いたし、洗濯もしたし、必要なものは空港で買ったし、あ、旅行保険入んの忘れた…。大丈夫かな。

この便は A310 で機体は小さい。液晶パネルはない。ロビーで人が少なかったから、座席数も少ないのだろう。窓から外を見ると、雨は降っていないが地面が濡れている。それから空調のせいかもしれないが、さっき着いてから全然暑さを感じない。外も暑くないのかな。いや、さっき到着のときに気温 28 度って言ってたからそんなことはないだろう。快

適なものいいけど、東南アジアへ来たんだからちょっとぐらい暑さを感じたい。定刻どおり 18:30 に飛行機はターミナルを離れた。えらく空席が多いな。国際線でこんなに空いてるのって初めてだ。半分ぐらいしか乗ってないんじゃないのか？

19:50、もう外は真っ暗だ。ぼつぼつと陸地の灯りが見える。なんか稲光が見えるぞ。

20:00 (現地時 19:00) インドネシアのスカルノ・ハッタ国際空港着。イミグレまで来てから気が付いたが、SQ の機内で入国カードくれなかったぞ。イミグレの兄ちゃんにもらって記入した。うーん、今回の SQ はなんかちょっと抜けてる。手続きが終了後、20,000 円を両替し (結構大金だったようだ) 外へ出た。来たぞ！早速、

「どこに行くんだ？ タクシーは？」

と言って兄ちゃんがついてくる。バスはどこだと聞くと、あれだと教えてくれたが、ガンビル駅へ行くかと聞くと

「ガンビル？ フィニッシュト。」

どうせ嘘だ。ダムリのアéroportバスの横にいた運転手らしき人に聞いたら、ガンビルへ行くという答えが返ってきた。やっぱりな。さっきの兄ちゃんは

「OK。」

と言って行ってしまった。これにだまされる旅行者もいるんだろうなあ。フィフティ (50,000 ルピアの意) と言ってたから、かなりのポったくりだ。

街へ向かう車中、道沿いには MITSUBISHI から始まって SANYO、JVC、HITACHI、TOSHIBA、FUJIFILM … とひと通りの日本のエレクトロニクスカンパニーの電光看板。韓国の LG もあった。このバスは 5,000 ルピア均一のような。途中、何人が降りて行く。ガンビル駅に着くと、サテの屋台、さっそく声をかけてくるバジャイ¹のドライバーたち。この雰囲気はちょっとうれしい。まず切符売場へ行ってみると、窓口は全部閉まっていた。ジョグジャ行きはさっき 20:40 に出たばかりだった。その時 20:43。うわー、ちきしょー。朝 6:10 というのがあのようなので、明日の朝早くまた来ることにしよう。とりあえず今日はジャカルタで 1 泊だ。そのまま駅を出て、ジャクサ通りを目指して歩き始めた。夜だけどあまり怖くない。暗いから、向こうも私が日本人だというのがわからないのかもしれないが、別に襲われそうな雰囲気はない。物乞いもないし、結構きれいな町である。

ジャクサ通りはなかなか楽しいところだ。安宿や安食堂、バンド演奏をしているレストランなどもある。雰囲気をしながら通りを端まで歩いて通り過ぎてから、また引き返した。そしてバンドが演奏している店 (オープンだから丸聞こえ) の隣の飯屋に入った。

兄ちゃんに、ライスとチキンのゴレンをくれと注文した。それと Tea と言ったら、コーラのピンみたいなのに入った甘い紅茶「Tehbotl」が出て来た。すだちが入ったフィンガーボールも出て来た。こんなの初めてだな。料理は飯だけの皿と、チキンのモモ肉を油で揚げた辛~いものに、化粧品の匂いがする葉っぱとレタスが添えられて出て来た。あまりうまいとは言えないが、シェムリアップやベトナム鉄道で食べたことのあるまずいもの程はまずくない。はっきり「まずい」とは言えない。でもこの葉っぱは「うまい」とも言えないな。

¹ジャカルタの赤い三輪自動車タクシー。タイのトゥクトゥクと同じようなもの。

そしてこの辛さは頭が活性化される。なんか脳の活動が一段上のレベルに上がった感じになるぞ。目の前が開けたような感覚がする。ジャカルタ行き飛行機の中で食べたスパイシーな料理（米が前の便と違って細長かった。チリソースも付いてた）も頭が冴えた。この辛さって脳にいいんじゃないか？

さて、飯の後は宿探した。全然苦労せず、最初に入った宿、Bloen Steen Hostel であっさり決まった。旅行者が少ないのかな。ガイドブックにはこの宿は大人気でなかなか空いてないというようなことが書いてあったんだけど。兄ちゃんがとても感じのいい人で、部屋も悪くない。結構長居できそうな良い宿である。最後の日にまた泊まるならここにしよう。

明日は早起きしてジョグジャ行きのチケットを取りに行く。取れるかどうかはわからないが。ベッドに横になって思った。やっぱりアジアはいいねー。安宿街と屋台の雰囲気…。ここはジャカルタだ。この人たちはこの前、学生が中心になって大統領を辞めさせたんだよな。あの塔のあたりで集会してたんだよなー。現実に自分は今、その場所にいるんだよなー…。

23:00。おやすみ。

7.2.2 インドネシアらしさ 1998年12月27日(日)

朝5:00に起きて、薄暗い中、宿を出て駅へ向かった。意外に人通りが多い。5時だというのにみんなぞろぞろと独立記念塔へ歩いている。何かあるのか？5:30ごろ着くと、駅では既に窓口の前に行列ができていた。でも並んだら簡単にチケットが取れた。6:10はもういっぱいなので、次の6:20の2ndトレインになるそうだ。

6:00、売店で水を買って改札を入れて階段を登った。座席に着いてしばらくすると列車が動き出した。時計を見ると6:10だ。あれ？間違っただんじゃないか？周りの人にチケット見せながら乗ったからこれでいいのかと思ってただけど。その後、座席に来た2人の職員に何か言われた。インドネシア語でわからなかったのでチケットを見せると、特に問題はないようだ。本当に？この席の人がたまたまいなかったのかな。それとも早く出発したのか？わからんけど、

「No problem.」

と言ってくれたからいいんだろう。ジョグジャに行けなかったら困るけど、行けるなら何でもいいです。でもその後に来た車掌らしき人はチケットをちゃんと見ないでハサミを入れた。

朝だからだろうか。全然暑くない。7:30ごろ朝食。きれいなお姉さんが2人、座席まで注文を取りに来た。NASI RAWANを頼む。NASIはご飯、RAWANは何だろう。何か聞かれたがわからなかった。牛と魚のどっちにするかとか聞いているのかな。それとも味付けに関する何か？通じないもんだから、お姉さん同士で笑顔で顔を見合わせてる。何かわからんけど適当に決めてくれたらいい。しばらくすると、パサパサご飯にもやしが入った皿と、牛肉と半分のゆで卵が入ったスープの皿が出て来た。うまい。昨日の夕飯より数段上だ。

飯を食った後、強い日差しが照ってきた。そう、これだ！これがないと赤道直下の国

に来たという実感が湧かないぜ。いいぞー。窓から見える景色は田んぼ。ベトナムの鉄道の窓から見たのと似ている。この国のあらゆる風景は、これまでに見たことのあるものばかりだ。新鮮さがない。珍しく感じない。旅を続けているとだんだん無感動になると言うが、私も目を輝かせて小さなことに感動していた頃とは変わった気がする。初めて来た国なのに、昨日インドネシアに来てから、勝手にわからず困ったということがない。旅行技術（「技術」と言うほどのものではないが）は、アジアならどこでも似たようなものなのだろう。それだけ誰でも旅がしやすいということだ。とても良いことだと思う。

しかし無感動というのは旅において最も意味がなく、つまらなく、致命的で嫌われるべきことだ。さらに、危険を察知する能力も低下する。幸いトラブルに巻き込まれてはいないが、それで旅に危険がないと思ってしまうてはいけない。列車に揺られながらそんなことを考えていたら、だんだんと自分が旅に求めているものが何なのかわかってきた気がする。

今までに経験したことがないことを経験したり、見たことがないものを見たり、どうしたらいいのかわからない状況をなんとかして切り抜けたりすること。エキサイティングというのはそのところにある。知らない、わからない、その時どうするのか。自分はどう出るのか。もしかしたら、別に外国である必要はないのかもしれない。ただ、日本人がまわりにいない環境は、より純粹に「自分」がどうするのかという状況を作り出してくれる。見たことのないもの、見たことのない自分が現れる。それがとても面白いことなのだ。しばらくするとその環境に慣れてしまう。だから次の新しい体験を求めて、行ったことのない国へ出かけるのだろう。私が求めているのはその「想像がつかない新しいもの」なのではないだろうか。

新しい土地というのはエキサイティングであると同時に多少の不安もある。だがそこには必ず人が暮らしているのだ。人がいる。それだけで多分、なんとかなる、大丈夫と思えるのだろう。当然どこにでも悪い人もいれば良い人もいるのだ。悪い人に会い、トラブルになることもあるだろうが、今までの経験からすると、それで訪れたその国を嫌いになることはないと思う。

今 8:02。まだインドネシアらしさは見えてこない。インドネシアは何がインドネシアなのだろう。旅行はしやすいけど、まだ特徴が見えないのだ。ずーっとそうなのだが、目に入ってくるもの全てが、今までにどこかで見たことのあるようなものばかりだ。一瞬、

《ここ、どこだっけ？》

と思うことが何度もある。

《インドネシア。インドネシアだ。》

と自分で自分に言い聞かせないと、インドネシアにいることを忘れてしまいそうだ。

8:18。白シャツに肩章が付いていて、ネームプレートも付いてるキチっとした制服を着たお姉さんが来た。またもや何を言われたのかわからない。この鉄道では英語は通じないらしい。チケットかな？と思って差し出したら、食べる仕草をされた。ああ、さっき食べた飯代か。いつ払えばいいんだろうとは思ってたけど、そんなキチっとした人が集金に来ないでよ。さっきのお姉さん2人組が集めればいいのに。

列車が止まると、いろんなものを売りに売子が通路を通り過ぎる。

「ナカー、ナカー。」

とか

「ナシー、ナシ、ナシー。」(ご飯のこと。これだけは分かる。)

とか言って通り過ぎる。こちらが声をかけなければ、立ち止まって押し売りしてくることもない。売子の声を聞いているのはなかなか楽しい。他には、

「ダンラマーユー。」

とか

「メディア、メディアー。」(新聞『MEDIA INDONESIA』のこと。)

「レペー、ケサン、レペー。」

などがある。ほとんどは意味がわからないが、いくつかは彼らが手に持っているものでわかる。でもこの人たち、列車が動き出してもそのままだけど、どうするんだろう。どっかで降りて逆向きの列車に乗り換えるのかな。

さっき止まったところで、窓の外で手を差し出してくる子供がいた。列車の窓の位置が高いので、外から壁をドンドン叩いてから、ちょっと後ろに下がってこっちを見て手を出すのを繰り返す。でも元気そうだし、身なりも普通だ。列車の中にも手を差し出してくる子供が何人か現れるようになってきた。床を掃いて袋を差し出してきた兄ちゃんにはRp500(500ルピア)あげたけど、ただ手を出してくる子にはやらん。持っていた中で一番小さいお金がRp500だったので出したのだが、多すぎたかな。

物乞いも、インドほどの衝撃的なものはない。払わないことに対する罪悪感のようなものも湧かない。もしかしたら、これこそ無感動の最たるものかもしれない。インドでは払わないのに必死な覚悟が必要だった。見た目の衝撃とともに、あまりにもその数が多いからだ。払うにしても全てに払っていたら金はすぐに無くなってしまう。自分なりの基準が必要だったのだ。持っている者が持たない者に分け与える。その考えは自然なのかもしれない。でも、そう簡単にできることでもないと思う。今、何も迷うことなく、手を出して来る人に何もあげない自分がある。そう、迷うことすらなくなっているのだ。これでいいのだろうか。いくらか傲慢ごうまんになった気がする。

9:30ごろ止まった大きな駅から、若い女性が隣りに座った。3人ぐらいで乗ってきたのだが、

「ここ、いいですか？」

ということ(多分)聞かれた。これって指定席じゃないのか？ さっきまでは別の男の人が座ってたよな。彼女は、私のような日本人の男が座ってる隣りでも何の抵抗もないみたいだ。こっちはちょっと嬉しいけど。でも彼女の左手薬指に指輪あり。一緒に乗ったらしい男の人が何度か話しに来ている。旦那かな。それにしても年の差がありそうだ。

11:00ごろ、景色は田んぼから山に変わっていた。まだ田んぼもあるが、山際の段々だ。段々畑じゃなくて段々田んぼ。11:18、LEGOKという駅で止まったら、何やらギターを弾きながら歌う人が乗って来て、演奏しながら通り過ぎて行った。面白いけど、ごめん、コイン持ってないんで払えないんだ。今持ってる中で一番小さい紙幣はRp1,000だし、お釣りくれとも言えないしな。

| | | | | | | | | | | | | | | {

14:30 ごろジョグジャに着いた。列車を降りると、人がとても多い。早速、タクシーやベチャ²が声をかけてくる。商店が並んでいて、とても賑やかで楽しい町だ。日用品や民芸品や二セキャラクター商品がたくさん売られている。マリオボ口通りの店を眺めながらずっと歩いたが、途中横道に入ったりしていたら、どこを歩いているのかわからなくなってしまった。ベチャがしつこく付いてくる。無視無視。ある通りで座って地図を眺めていると、1人の男の子がやってきて私の横に座った。

しきりに Art Shop に誘われたが行く気はしなかった。結構しつこいな、休ませてよ。頑として動かなかつたら、彼はあきらめたようだ。後で必ず来てくれと言っていたが、なぜか店と逆方向に去って行った。自分がどこにいるのか教えてもらってわかったので、彼の姿が見えなくなってからソスロへ戻ることにした。途中、日本人っぽい顔立ちの美女(でも日本人じゃないらしい)が友だちを見送っているところに会い、目が合った。別に声をかけた訳じゃないけど、小さな喜び。

宿は、ベチャの兄ちゃんに誘われるままに通りを入れて行って見つけた PRASTHA JAYA (偶然にも目指していた宿だった) に決めた。部屋にはベッドが2つある。トイレ、マンディールーム共同。これで Rp8,000。安い! 上(3階)に日本人女性が4人泊まってるらしい。他の部屋はほとんど空いていてとても静かだ。聞くと、やはり今年は旅行者が少ないそうだ。

ご主人の息子らしき兄ちゃんと、近所の知り合いらしき兄ちゃん(名前はドラエモンと言ってたが本当かどうかあやしい)の2人がいろいろと教えてくれた。この町の見どころやポロブドゥール、プランバナ、ディエン高原、プロモ山などなど。さっそく近くの旅行会社のオフィス(オフィスと呼ぶには大げさな小屋)で明日のポロブドゥールとプランバナへのツアーを申し込んだ。バリ行きのバスの手配も済んで、後は楽チンだ。バリからジャカルタへ戻るには飛行機にしようと思うが、向こうで取れるだろうか。

その後、バティックの店へ行った。なかなかいいじゃないですか。切って服を作ったりするやつじゃなくて、額に入れて飾ったりするアートバティック。初め買う気はなかったのだが、見ているうちに欲しくなってしまった。大1枚と小さいのを2枚買った。やはり Teacher の作品はいいし、高い。と言うより、Student のものが安いのだ。相場が全然わからんが、宿の兄ちゃんは信用できる。とても親切だし、明るくていい奴だ。歩いている最中、何度か雨が降ったが、いつもすぐ止んだ。

17:00 ごろ宿の近くで夕飯を食った。エビのスープ&ライス、ガドガド、アイスティー。どれもとてもうまかった。インドネシアで食った中で一番だ。「おいしい」はインドネシア後で「Ena!」というそうだ。さっそく店の人に、

「Ena!」

と言ってみた。宿の彼は 18:00 にラマダンあけだそうで、18:00 になるとともに水を飲んでいて、今朝から何も飲み食いしてないそうだ。目の前でバクバク食って悪かったかな。

レストランを出た後、ラーマヤナ舞踊のチケットを取りに、またさっきのオフィス

²輪タク。ベトナムのシクロと同じで、三輪自転車の前に座席があって、ドライバーは後部でペダルをこぐ。

へ行った。その後 19:30 まで宿で待機。日本人旅行者の賑やかな声と、モスクからのコーランの放送が聞こえる。別にうるさいとは思わない。しかしこの宿、本当にこの設備で Rp8,000 って安いよな。

19:30、迎えが来た。外は激しい雨だ。夕方のと違ってなかなか止まない。ラーマーヤナ舞踊は以前、福岡のアジア太平洋フェスティバルで見たものとは比べものにならない素晴らしさだ。衣装は「本物」感を漂わせている。とても美しいし、格好いい。演劇仕立ての舞踊で、見ていて全く飽きない。ラーマーヤナの物語は知っているつもりだったが、誰だかわからない登場人物もいた。とても迫力があって、楽しかった。これって、旅行会社を通さずに自分でチケット買ったらもっと安いのかな。ガイドブックを見ると 1 桁値段が違うぞ。でも別にだまされた訳じゃなくて、旅行会社で買うとこうゆう値段らしい。

宿に帰ってから洗濯をした。どうやら寮の鍵をジャカルタの宿に置いてきてしまったらしい。ポケットに入っていなかったので全荷物を探したが、見つからなかった。日本に帰ってから部屋に入れないな。まあなんとかなるでしょ。

明日は 5 時出発だ。ついにポロブドゥールが見られる。現在 21:41。寝る。

7.3 歴史の町ジョグジャカルタ

7.3.1 ポロブドゥール 1998 年 12 月 28 日 (月)

朝 4:30 起き！結構起きられるもんだ。4:45、暗い中を迎えに来た兄ちゃんとオフィスの小屋へ行った。5:00 ちょい過ぎに 8 人乗りバスが来た。バスには先に 2 人乗っており、私が乗って出発した後にさらに 2 人を乗せてポロブドゥールへと向かった。とても眠かったので、バスの中では思いっきり眠った。

6:00 ごろポロブドゥールに到着し、バスを降りた。遠くにちらっとストウーパが見える。チケットを買い、中へ入った。ここはがっちり柵があって、入口でチケットをもぎる人がいる。しかし中へ入るとしつこくついてくる T シャツ売りのおじさんやパンフレット売り、ネックレス売りなどがいる。どうやって入ってくるんだ？いくら払ってんのかな。

中へ入って思った。これは完全に「観光地」だ。ポロブドゥール自体は確かに素晴らしい。しかしアンコールのように、現地の人々が自由に出入りできて（アンコールは囲われていない）子供たちが走り回っているようなあの雰囲気はない。「出口はこちら」とかいう看板もあるし、何かもの足りない感じがしてしょうがない。人々の生活の場でも、坊さんの祈りの場でもないらしい。

見るのは下の段から順に、全てをぐるっと 1 周して見ながら上へ登っていった。ここのレリーフの彫りは深く、表情も豊かだ。レリーフの表現としてはアンコールよりも立体感、躍動感が素晴らしい。まわりの山々の景色も、朝早いせいもあって雲や霧のかかり方がとても幻想的だ。ストウーパの並ぶところに出ると、それまでの段とガラッと雰囲気が変わった。とても静かで落ち着くところだ。「静寂」というのは音がないだけではないことを感じさせてくれる。

そこには座禅している観光客の親子がいた。座り込んで瞑想したくなる気持もわかるな。

落ち着いた雰囲気と、周りの景色がとても素晴らしい。時間がたつにつれて日が照り、青空がのぞくようになってくると、ボロブドゥールは鮮やかさを身にまとう。雨上がりで石が濡れていたせいもあるが、うす暗かった表面がはっきりとしてくる。闇から光へという移り変わりを見せてくれる。

日光とともに観光客の姿も増えて、賑やかになってきた。日本人もちらほら見える。8時ちょっと前、何かが足りないという気分のままボロブドゥールを下りた。ツアーに含まれる朝食(パタートーストとTEAとフルーツサラダ)を入口近くのレストランでとり、8:10ごろ次の目的地、プランバナンへ向かった。

バスは、オランダから来た夫婦を途中で降ろした。彼らはプランバナンへは行かないらしい。それ以前にプランバナンを知らなかったようだ。一応ガイドブックのページをめくって、ふーんと言っていたが、それほど興味はないようだった。彼らはボロブドゥールだけのツアーだそうだ。

どうも話すきっかけを失ってしまった。一緒に乗っている他の客の話に入り込めない。彼らからすれば、私はずっと黙っている変な日本人に感じられただろう。付き合いづらい奴に見えたに違いない。

10:19、プランバナンへ到着。ここはさっきのボロブドゥールとちがって、ヒンドゥーの寺院だ。やはりヒンドゥーの遺跡は面白い。結構楽しめた。時間のせいかもしれないが、観光客はボロブドゥールより多くて、にぎやかだ。神殿は

ブラフマー シヴァ ヴィシュヌ
ハンサ ナンディン ガルーダ

というふうには並んでいた。人が多いので、神殿の石段を上がる時に下りて来る人とすれ違う。中へ入るには前の人が出て来るのを待たなければ入れない。三神とナンディンは中に像があった。持っているものなどでどの神かわかる。こういうのはやはり、訳がわからず漠然と見るよりも、ある程度知識があると楽しめる。そして見上げるほどの高さがある遺跡というのはやはりいい。思わず「おおー」と声をもらしてしまふ。各神殿をじっくりと見てまわった。ひとつわからなかったのは、シヴァ神殿の彫刻にハヌマーンや猿軍の姿が彫られていたことだ。ハヌマーンってヴィシュヌの家来じゃなかったっけ。それとも猿=ハヌマーンの猿軍という訳ではないのかな。

それからここで、ツアーのいやなところを感じてしまった。12:00に戻るように言われて単独行動に出たのだが、途中で雨が降って雨宿りしたりしたせいもあって、セウ、ブッラ、ランブン寺院を見ることができなかったのだ。なんてことだ。時間を気にせず、自分のペースで旅をしたい。こっちは道は何があるんだろう、この像は確か…とか考えたりしながら歩きたい。さて、そろそろ行くか、と自分のタイミングで立ち上がりたい。雨宿りをしながらおじさんやその仲間たちと話したりした時間。こういう何でもないのんびりした時間が貴重なのだ。ツアーだと待っている人がいるので、どうしてもわがままは許されない。時間どおりに戻らなければならぬ。目的地までの移動は楽だが、他の点ではツアーで来たのは失敗だった。本当なら、時間がいくらでもあって、もしバスがなくなっても今晚はこの近くの宿に泊まればいいや、というそんな気持ちで旅をしたいものだ。

待ち合わせ場所は

「やれやれ、やっと帰ってきたよ。」

と言わんばかりの雰囲気だった。プランバナンを出てから近くのレストランで食事をし、ジョグジャへ帰ってきた。

帰りの車の中で考えていたことは、《この旅には何かが足りない》ということだった。旅に大切な何かを無くしてしまったのではないかと思った。待ち合わせ時間にちょっと遅れてしまって、萎縮している自分がいた。他のツアー客に融け込めない自分がいた。ポロブドゥールもプランバナンも遺跡自体は素晴らしいのだが、心の底から湧き上がる全身にみなぎる感動、この遺跡、この土地に出会えたことへの感謝と喜びのようなものが湧いて来ない。強烈さ、衝撃がない。インドネシアはとても旅をしやすい。だが、今日まであまり写真も撮っていないのは、2つの寺院以外で撮りたくなるようなものに出会っていないからだと思う。2つの寺院の写真を撮ったのは、観光地へ行ったときの癖みたいなものだ。

心の中が満たされない。何かが足りないのだ。小さなことのひとつひとつに感動していたあの自分はどこへ行ったのだろうか。私がアジアを好きなのは、自分にとって新しいことだらけの場所だと思っていたからではないだろうか。もしかしたら、初めて行くのがヨーロッパの国々だったとしても感動できたのかもしれない。ヨーロッパ文化を見まわっても新しい感動はないと思いついでいるだけなのかも知れない。全てが新鮮であったアジアの旅はもう終りにさしかかっているのだろうか。インド、タイ以外の東南アジアの国では、必ずその2国の文化が入ってきていて、似通ったところがある。それがだんだん物足りなくなっているのかもしれない。この旅行中よく

「Enjoy?」

とか

「Interesting?」

と聞かれるのは、私がよほどつまらなそうな顔をしているのだろう。つまらない、と言い切ることはできないが、少なくともこの旅は自分にとって「最高」でないことは確かだ。長く旅をしている人は、おそらく一度はこんな感じになるのかもしれない。いや、私のように無感動になる時期は必ず来るはずだと思う。

外国に限らず、どんな人と出会うか、どんな場所に出くわすかは運命みたいなものだ。あらかじめその国の知識を持っていてあれこれと予想してみても、旅は人や土地との偶然の出会いに左右される部分が多い。個人で自由に旅をしている人は特にそうだろう。そして旅行者にとって、そこで出会う人はその国の代表者なのである。旅をした国の印象はその人々によって決まる。日本へ帰って、旅した国で大きな事件が起こったというニュースを聞くと、出会った人々の顔が浮かんで心配になる。そういう国は、自分にとって「近い」国であると言える。

しかしそういうことを考えてみても、滞在3日目のこの国インドネシアは、自分にとってはまだ遠い国のような気がする。なぜだろう。宿やツアーリストオフィスの人々は皆いい人たちだ。何日でもいられるほど居心地も良い。遺跡もそれ自体は良かった。でも、

「インドネシア最高！」

と言い切れる自分はいない。

17:00 ごろ、夕飯を食いに出了。マリオボ口通りへ出ようと思って歩いたのだが、途中で昨日宿で一度会ったドラエモンに会った。

「どこ行くんだ？」

と聞かれたので

「飯食いたいんだけど、どっかいいいところないかな。」

と言うとすぐ近くの店へ連れて行ってくれた。歩きながら、Girlはどうだ、ベリービューティフルだ、日本人ならFreeだとか言われた。お前もそういう奴か…。こいつがこんなこと言うのは、そういうことをしている日本人がいるということだ。そう言えば、タイに行ったと言ったら

「タイにはきれいな女がたくさんいるだろう。どうだった？」

とか言ってたしなあ。おいおい、日本人がタイに行くときそういう風に思われんのか？

レストランはとても広くてきれいだった。庶民の店と、ドアのある高級レストランの中間というところだろうか。ちょっと値段は高めだ。ナシ・チャンプルとガドガドと、気になってたHari bai beerを頼んだ。この前のタヒチに続いて、このビールもまたモンドセレクションの金メダルマークが入っている。しかも3つも。でもビールまでも感動をくれなかった。これが金賞なのか？やはりビールはその時の気分に左右される飲物のようだ。

料理はうまかった。でも注文したものがとても似たものだった。ガドガドにはご飯がついて出て来たので、変な注文のしかたをしてしまったと思った。昨日の店ではガドガドにご飯は入ってなかったから、サラダの感覚で頼んだんだけど。これだと日本で言うならば、そばとうどんを一緒に注文したようなものじゃないか。でもどちらもうまかった。ただ、ガドガドは昨日の店の方が好きだな。

レストラン(「飯屋」というよりこう呼んだ方がここの雰囲気合ってる)にはインターネットにつながっているパソコンがあった。インターネットカフェは知ってるけど、インターネットレストラン？パソコンは2台あったが、誰も使っていなかった。

レストランを出てからは、その裏通りを奥まで通り抜けた。インドのバラナシの裏通りをきれいにした感じで、小さな店がいろいろあって楽しかった。宿の脇の通りも先まで通り抜けてみた。屋台やらバティック屋やらが並んでいて、ここもなかなか楽しい。30分ぐらいうろろしてから宿に戻った。

19:30まで部屋でごろ寝した後、今夜はワヤンを見るために出かけた。宿の彼が気づいて声をかけてくれた。

「トモ！」

彼は私の名前をちゃんと覚えていた。彼にベチャのところまで連れて行ってもらった。すでに話がついていたのだろう。すぐに何も言わずに乗り込んで出発できた。明日のことも伝えてくれているらしく、明日もこの彼のベチャが足になってくれるそうだ。料金もはつきりしてるし安心だ。

ただ、ベチャはベトナムのシクロと全く同じ形をしているので、乗っているとベトナムでのあのいやな出来事を思い出してしまう。でもここでは不安はない。土地の初めての宿との出会い方で、そこでその後の旅行スタイルや予定は大かた決まると言える。今回は楽だ。

20:00 から 22:00 まで、ラーマヤナの影絵を観賞した。でもはっきり言ってつまらない。退屈だった。思ったよりも動きが少なく、登場した中でどれが誰なのかさえわからない(どれがラーマだ?)。ストーリーもどの辺をやっているのかさっぱり見えてこない。ずらーっと並んでいて期待させる人形は半分も使わない。昨日の舞踊の方が格段に面白いな。今日のは眠くて仕方なかった。夕飯時にビールを飲んだせいもあるが、ガムランのベースになってるあの繰り返しのリズムも眠気を誘う。多分ほとんど見ずに眠ってしまっていたと思う。これはあまりお薦めできないなあ。

明日は王宮と町を見てまわろう。夜寝る前、日本へのポストカードを6枚書いた。両親と亮と生沼へ。それから年賀状も兼ねて川辺さん³、佐野さん、新川さんへ。なんか、旅行する度に、旅行中に便りを出す人が増えてるな。初めのころは2、3通だったのに。他にも出したい人はいるけど、バリで出すことにしよう。

7.3.2 Kusdiantoro 1998年12月29日(火)

今日は遅く起きた。9:30 ごろ、この辺を観光しに昨日のベチャで出かけた。はじめにバティックファクトリー SENO へ。バティックを制作している作業を真近で見ることができる場所だ。面白かったが、ただバティックはおととい買った物の方が色やデザイン的に優れている気がした。しかしこの店でも買ってしまったんだな、これが。適正価格がどれくらいなのかは全然わからない。私が US\$ とルピアを混ぜて払ったうち、いくらかが店員の懐に入った。相手をした店員はしきりにルピアを持ってないか聞いていたが、それは自分がいくらか取るためだったのだろう。

その後、パペット工房に行った。木のあやつり人形や、皮で作られた影絵用の人形などがたくさん並んでいた。そこの兄ちゃんはとてもいい感じの人で、しつこく商売を持ちかけてこない。

「お土産？」

と2回聞かれただけだ。全然買わなくてもいいやな顔ひとつせずに、作業や完成品の人形を自由に見せてくれた。こうでなくっちゃ。

それからちらっと別の店に寄った後、王宮へ。まあ、どこの宮殿でもそうだが、昔の絵画や服、食器などが展示してあった。入口ではチケットを買って入るようなところなのに、なぜか南の方の門へ行くと現地の人々が自由に出入りできるようになっていた。そしてそこで、アジアの旅ではおなじみの「勝手にガイド」に会ってしまった。

Holland のオレンジのサッカーシャツを来ている「奴」は、親切にプリンスキャスル(?)へ連れて行ってくれた。私は最初、王宮の敷地内だと思っていたので怪しまずにそのまま付いて行った。だが観光客が誰もいない。その辺りで、これは「勝手にガイド」だなと気づいた。その後、さんざんバティックサロンへ誘われた。いい、と言ってもしばらくするとまた別の店へ誘う。しつこいので、私は建物だけ見たいんだと言って、無視して歩き出した。だんだん気分が悪くなってきた。

³会社の上司。私が所属している研究室の室長である。私の旅行に理解を示してくれるので、旅行のための休みは取りやすい。ただし、仕事に対する要求は厳しい。

ベチャドライバーが王宮入口で待っているの、無視して王宮へ戻ろうとすると、奴は10,000ルピアくれと言う。これが奴のJOBだと言っている。そう来た。誰がそんなに払うもんか。いやだと言うと、俺にはbrotherがいて、もし払わないとあなたはどうかこうたら…。はいはい…。一応、穴場らしいプリンス用の建物には連れて行ってもらったので5,000ルピア札を出してみたが、\奴"は10,000と言って譲らない。なら払わんと5,000は引っ込めて、王宮へ入った。

その王宮の南の出口で座って見ていた男の人が、払わなくてもOK、我々はフレンドだと言った。私はその男の人に

「こいつは10,000払えって言ってるんだよ。」

と言ったら、その人は「それはいかん」という風に首を振った。Hollandシャツの\奴"はこちを怒った目で見えていたが、私は無視してそこを離れた。一気にいやな気分になってしまった。王宮なのに、なんでこんな奴がいるんだよ。あのゲート、閉じとくか見張りを付けとけ！とても腹が立った。

その後入口へ戻り、待っていたベチャで水の宮殿へ。水の宮殿の入口では、ベチャの彼が引き下がってしまうガイドの男がいた。ガイドの方が立場が強いのかな。ガイドは私の乗ったベチャを止め、ベチャの彼にお前はこれ以上来るなというようなことを言って、降りた私に付いて来た。なんか態度が高圧的だ。チケットを買って入った後も付いて来ようとするので、ガイドはいらんとと言うと、彼はオフィシャルだと言う。でも金取るんでしょと聞いたら、オフィシャルだから取ると言う。なんか感じ悪いな。オフィシャルとかオフィシャルじゃないとか関係ない、入場料以外には払わんよ、と言ったら去ってくれた。

中へ入ると、後ろから声をかけてくる奴がいる。またかよ、ガイドはいらんって言ったのにもって無視していたら、横に来たのはベチャの彼だった。なんだ、ほっとした。それから彼が中を案内してくれた。私がガイドを断ったのを見てから来たらしい。金を取るオフィシャルのガイドを差し置いて観光客を案内してはいけないのかな。

中では子供たちが遊んでいたり、パティック屋の店先で口で布に線を描いている女の人がいたりして、とても和やかな雰囲気だ。ほほえましくて良かった。しかしジョグジャはどこへ行ってもパティック屋ばかりだな。ベチャの彼が、スルタンのピクチャーがかかっている店があるから見に行こうというので、案内してもらった。スルタンの顔を見せてもらったついでにその店のパティックを見ると、今日、王宮に行く前にSENOで買ったのより買いたくなる色のパティックがあった。でも金がないからもう買わない。うーん、惜しいなあ。なんでさっき買っちゃったんだろう。店のおやじはいい人だった。

水の宮殿を出てからはソスロへ戻った。ベチャの彼には最後にレストランに連れて行ってもらい、その前で今日の料金を払って別れた。ベチャの料金は最初の約束どおりだ。いい人だー。レストランではNASI CAMPUR^{ナシチャンプウル}（インドネシア料理ではこれが最高！）を頼んだが、昨日の店の方がうまかった。

宿へ帰り紅茶を飲んでのんびりしていると、宿の彼が来たのでいろいろ話をした。何を見て、何が面白かったかを話しているうちに、シルクのパティックを見たことないのかと聞かれた。ないなら歩いて15分ぐらいのところにあるから後で見に行こうという。シルクの作品を作るアーティストは5人しかいないそうだ。ここで見逃すと、他では見られな

いらしい。ん？でもSENOでシルクのやつなかったかな。その後、宿の屋上へ上がって、彼にインドネシア語をいろいろと教えてもらったりした。彼は日本語の教科書を持っていて、いくつかの日本語の単語も知っていた。

彼はこの辺のガバメントのアマチュアチームのサッカープレーヤーだったそうだ。ここでの「ガバメント」というのが日本語でどういう意味なのか良くわからなかったが、オリンピックに出るようなナショナルチームということではないらしい。州とか市のレベルの公式チームってことかな。そう言えば、彼と並んで歩いているとみんな彼に声をかけてきた。みんな彼を知っていて、町の人気者らしい。彼はいかにもスポーツマンという風貌だ。足も速そう。

15:30ごろ、モスリムの彼はシャワー&お祈りへ。その後、2人でパティックの店へ出かけた。歩きながら彼と、寒い日本の冬などの季節の話をした。インドネシアが寒かったら、死んでしまうとっていた。夏はインドネシアみたいに暑い、冬はスキーもできるという日本の気候は面白いらしい。それから、インドネシアに来てから、道にやたらと牛のマークの赤い旗が出てると、黒と赤に塗られたヤグラがあったりするのをよく見かけるので「あの旗は何？」

と彼に聞いてみた。あれは選挙のキャンペーンで、最も支持されているスカルノの娘メガワティの政党のものだそうだ。最も有力な政党で、彼らがおそらく勝つだろうというようなことを少し小声で教えてくれた。彼の様子から、この話題はあまり表で大っぴらに話すことではないということが感じられた。

また、スポーツの話などもしたが、私はサッカーをやらないのでその話題ではちょっと盛り上がれなかった。広場では子供たちがサッカーをしていた。サッカーってどこでも人気あるんだなあ。

店に着くと、かわいい女性がいた。握手して名前を聞いたが忘れた。どうも私は人の名前を聞いてすぐ忘れる。覚える気がないのかもしれない。それに、覚えにくいというものもある。多分、名前が漢字じゃないから字づらでイメージして覚えることができないんだろう。漢字文化の人間の記憶のしくみだねえ。

シルクに描かれたラーマーヤナは素晴らしかった。全体に青い色で描かれていて、その青がとて美しい色だ。今まで見たものと絵の雰囲気が違う。これまでにたくさん買ってしまっただが、全部いらぬ。この店のこれだけでいいと思うほどだった。特に今日行ったファクトリーで買ったやつはもういらぬ。彼女は作り方や、シルクでも洗って大丈夫なことを教えてくれた。「洗う・洗濯」という日本語も知っていた。

「そう、セントク！」

と私が言うと笑った。わー、かわいー。彼女はラーマーヤナの説明もしてくれた。宿の彼はモスリムなのでラーマーヤナは詳しくないから、ラーマーヤナの話は彼女に聞いてと言われた。ここでは宗教の違いが歴史の中に溶け込んでいる。宗教の違いを超えてみんな仲良く暮らしているというのが感じられた。そういう日常があるというのが、なんだか嬉しい。イスラム教、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教、世界の代表的な宗教が集まっているが普通に仲良くできている。よくニュースで聞く宗教間の対立はここではないのだろうか。なんだ、仲良くできるんじゃない、という感じだ。モスリムの人とヒンドゥーのお

みやげを勧めるというのも面白い。

それから何枚かを吟味して2枚選んだ。やっぱり伝統的なワヤンのデザインがいいね。抽象的なのはあんまり好きじゃない。大きいやつはとてもいいんだけど、持って帰ってから困りそうなのでやめといた。値段表を見せてもらってびっくり。安い！シルクだろ、何でだ？ ははーん、そうか、今まで他の店で買ったのはボられたということか。ちくしょう。

2枚買ったので、綿の小さい作品（Student's Work）の中からおまけを1枚選んでいいと言われた。おまけの一品は、ボロブドゥールの描かれたほのぼのとした絵柄のものをもらうことにした。

店の壁には日本人が作ったという非売品の一枚が飾ってあった。日本の伝統的な遊び、縄飛びやかくれんぼなどが描かれていて面白かった。うーん、もうちょっと彼女と話をしたかったぞ。店を出るとき、オーストラリア人がやたらと（8枚も）バティックを買っていた。

帰り道、彼は私と同じ27才（彼は8月生まれ）だということがわかった。彼は私を年下だと思っていたらしい。旅行会社で働いていたのだが、今はJOBがないそうだ。給料の話もした。紙だけが送られてきて、お金は得られなかったとか。いくら今日本の経済状態が悪いとか日本の物価は恐ろしく高いと言っても、私はちゃんと会社に雇われていて、給料を貰っている。旅行もできる。彼の前では、日本は今経済状態が悪いんだなどとしてくは言えなかった。

それにしても旅行会社で働いていたのか。ははあ、どうりで旅行者が必要な情報に詳しい訳だ。手続きもいろいろ手伝ってくれるし。1999年になって国の経済がよくなればJOBを得られると言っていた。そして結婚の予定があるそうだ。子供は2人欲しいと言っていた。私は彼女がいないと言うと、どうしてだと聞かれた。どうしてって言われてもなあ。彼女がいないってのは不自然に思われるらしい。

宿に帰ってからはまた屋上に上がり、彼と話した。日本の話。今私が住んでいる福岡。彼はFUKUOKAというのは初めて聞けらしい。やはり外国ではあまり有名じゃないんだらうな。

「小さい町？」

「いや、日本の西のKyushuエリアでは一番大きい都市なんだ。」

Kyushuというの知らないようだ。うーん、それ以上には説明できん。

「東京からは飛行機で1、2時間ぐらいのところにあるんだ。鉄道だと5時間ぐらいかな。」

私が東京へは今、鉄道より飛行機の方が安くて変だという話をすると、彼はいかにも不思議そうに、

「日本の鉄道は遅くて振動がすごくてサービスが悪いのか？」

と言った。いやいや、世界でもトップレベルの速度と快適さを誇る鉄道なんだけど。やっぱり飛行機の方が安いってのは変だと思うだらうな。私も変だと思う。

「最近、航空会社がチケットを安くしようと努力したんだよ。」

と答えたが、何か説得力がないよな。

それから腕の傷を見せながら、怪我をした話、入院した話などを聞いた。サッカーボールのマークのついた彼の名刺をもらった。彼はKusdiantoro。よかった、名前なんだっけ

と今さら聞けなかったから。私も彼に自分の名刺をあげた。私が雇われてるのは社員4,000人ぐらいの会社だと言うとちょっと驚いていた。日本ではそんなに大きい方じゃないんだけど。

話の中で、私はデンパサールから日本に帰るのかということを知られた。

「いや、日本への便はジャカルタ発だから、デンパサールからジャカルタまで飛行機で飛ばないといけないんだ。」

「チケットは持ってんの？」

「バリで買おうと思ってるんだけど。」

「なんだ、もっと早く言えば今日、ガルーダのオフィスへ行って買えたのに。」

その時、もう17:00を過ぎていた。

彼の知り合いの旅行社がまだ開いていて、そこでチケットが取れるから行ってみようと言う。彼と一緒に外へ出た。いつもの小屋とは違う旅行社では楽しい兄ちゃんがいた。とても熱心にあちこちに電話してくれたが結局チケットは取れなかった。1日も2日も3日もだめ。全てFULLだ。やはりクリスマスと正月はジャワからバリにみんなバカンスに行っていて、ちょうど私が席を確保したい1月3日ごろに帰ってくるらしい。仕方ない、バスか…。バリからだジョグジャ乗り継ぎでジャカルタまで2日かかる。バリでは1泊しかできないことになってしまった。

宿の屋上へ戻ってから彼と今後の時間と予定の整理をした。バスのチケットはここで両方取ることができるのか聞いてみた。ここからジャカルタまでのは取れるが、デンパサールからジョグジャまではどうかわからないという。それなら聞きに行こうということになり、再び外へ。忙しいな。

今度はまた別のところに連れて行かれた。そこで、デンパサールからジョグジャまでのバスのチケットはここでは取れないから、クタで泊まるホテルで頼めばよいということになった。ここ(ジョグジャ)からジャカルタへのチケットはいつもの小屋のオフィスで取った。しかし、ここって来る度に接客する人が違うな。小さいのにスタッフは何人いるんだろう。

部屋へ戻った。しばらく部屋で寝転んでいると、廊下から

「トモ！」

と呼ばれた。彼が、バリからのチケットが買えるから一緒に来いと言う。あの後もいろいろ当たってくれていたのだ。なんていい人なんだろう。並のサービスの良さではない。彼は真のエージェントだと思う。しかもこれは彼の仕事ではなく、極めて個人的な親切心からやってくれているのだ。「勝手にガイド」に彼の爪の垢を煎じて飲ませたいぐらいだ。

行ったのはまた別のところだった。そこでバスのチケットを買った。いやー、よかったよかった。今後どうすれば良いか、彼は細かく丁寧に教えてくれた。どこでどう乗ればよいか、何に気をつけるべきかなど。もうただ感謝感激である。

彼が町の人気者だというのは、一緒にいて良くわかる。こうやって私のチケットのために駆けずりまわっているときも、いろんな人と挨拶する。みんな彼がサッカーをしていた事、怪我のことまで知っているらしい。それにしても今、イタリアのペルージャにいる中田は有名だ。私を日本人と見てとると、道端から

「ナカター！」

と声がかかる。そして中田の話になると、奴はすごい、カズより優れている、とみんな興奮気味に言う。

いやー、今日は夕方から随分と駆けずりまわった。あ、夕飯食ってないや。まあいいか。もう寝よ。ヤモリが天井にいる。手をパンと叩いたら落ちた。音で動揺してやんの。変なの。

7.4 プロモ山経由バリ島行き

7.4.1 プロモへのバス 1998年12月30日(水)

3時ごろ、モスクからの放送がうるさい。ニワトリにも起こされる。うー、寝かせてくれー。ここの人たちは平気なのかねえ。7:00ごろに下へ降り、チェックアウトをした。椅子に座って待っていると、7:15ごろ迎えが来たので、宿の彼と握手して別れた。1月2日にまた戻ってくるよ。

車は前のボロブドゥールに行ったときと同じサイズだ。先に日本人の女性が一人乗っていた。出発してからさらに途中で3人(男性1人、女性2人)を乗せ、ツアー客は計5人となった。日本人の彼女はプロモだけで、私を含めた他の4人はプロモの後バリまで行く。プロモまでの彼女の名前はYさん。結婚しているそうだが、旦那は来てないらしい。車中、2人でずっと旅話で盛り上がった。彼女もいろんなところに行っているそうだ。9時ごろ小さい売店で1回休憩。12時ごろにレストランで止まって昼飯。誰かと向かい合っただけの食事は久しぶりだ。1時間後、バスは出発した。旅話は尽きない。インド、韓国、中国、トルコ、チベットの話などなど。

16:00ごろ休憩。ガソリンとトイレ。この休憩前から、車のエアコンが効きすぎてちょっと寒い。運転手のおじさんに言って切ってもらった。おじさんに英語は通じなかったが、Yさんが

「ディギン。」(寒い)

と言ったらわかってもらえた。でも走り出してしばらくすると暑くなった。外は雨、また雨。対向車線を使って前の車を追い越し、ぶっ飛ばしまくる運転手のおやじ。17:00ごろ休憩。まだ着かないのか。車は山道を登って行き、18:40ごろ、ようやく今夜の宿 HOTEL BUROMO に到着した。

お、結構いいホテルだぞ。ロビー兼食堂がきれいだ。そこで彼女は明日の帰りのジョグジャ行きが7:00pm発だと知る。我々は9:00am発クタ行きだ。明日、彼女はものすごく暇になってしまい、なにをして過ごそうかと途方にくれた。

夕飯はYさんとテーブルを共にした。私はFried RiceとBINTANG Beerを頼んだ。ビールは前に飲んだモンドセレクション金賞受賞のHari Bai Beerよりうまかった。旅話はまだ尽きることがない。インドで出会ったという子連れ夫婦の話、旅先でバツリ話、会社勤めと旅行の話、ガルーダのトラブル経験談などなど。話を聞いていると、私も1か月ぐらいの長期旅行(人によっては長期じゃないけど)をしてみたいと思った。楽しい夕

食だった。19時から21時まで話し通しだった。途中、彼女が注文したベジタブルスープが来なかったので、厨房に言ったら忘れていたみたいだった。でものんびり待ちましょ。いいじゃないですか(他人事?)。食事後、彼女は明日用のお茶やおにぎり、フルーツを用意したりしていた。さすが女性だなあ。うーん、旅慣れてる。とても面白い人だ。

今日は移動で1日終わってしまった。明日は3:30出発だ。とても寒い。早く寝よ。

7.4.2 プロモ登山とバリでの年越 1998年12月31日(木)

3:00起き! 早えー。ホテルの人のドアノックで起こされた。3:30、ジープに7人+運転手が乗って出発だ。え、ジープ代って別料金なの? 彼女はツアー料金に全て含まれてると聞いていたので金が足りないそう。私も貸すだけの金がない。彼女はドルからの両替などを試みた。でもホテルの兄ちゃんはUS\$100じゃないと両替できないと言う。そんなバカな。朝早くて頭が働かないんで、計算できん。兄ちゃんが値段を繰り返す。ん? セブンティーン サウザンド アンド…。サウザンド? 1万7千…あ、なんだ、思ってたのと1桁違うじゃん。払えた。やっぱり朝は頭がまわってないな。

まだ真っ暗な中、30~40分ほどかけてView Pointへ。ジョグジャから一緒の車で来た男の男の人は途中で降りた。別のところを見に行き、後で合流するそう。彼は深い霧の中に姿を消した。道は深い霧だ。そして寒い。View Pointでは、上へ行くと結構人がいた。霧と雲で何も見えない。5:00ごろになると、太陽が姿を見せ始めた。まわりの人々の歌声。歓声。山は霧がはれたり、またかかったり。日が出たら、たくさんいた人々はサーツといなくなった。彼らは日の出を見るのが目的だったのかな? 霧と雲で、目的の山の景色は全く見えない。一瞬、霧が薄くなったときに山の輪郭が少し見えたが、すぐにまた霧がかかってしまった。展望台には山の名前が書いてある絵のプレートがあったが、実物は真っ白な霧で全然わからない。晴れていれば、いくつかの山が連なっていて一番高い山が噴煙を上げているのが見えるそう。

人が少なくなってからも、彼女が山の写真を撮り逃していたのでしばらく霧がはれるのを待った。でもだめだった。私が撮った写真もちゃんと写ってるかどうか怪しい。

車へ戻ると、客の男の人に

「We lost time.」

と不機嫌そうに言われた。またツアーのいやなところだ。そんなこと言わないでゆっくり見せてよ。あんたたち、引き揚げるの早すぎ。私たちが乗り込んだ後、車はプロモ山へ。途中止まったところでは小さなラズベリーが生えていて、採って食べてみたりした。プロモ山の麓へ着いて車から降りると、まわりは馬だらけだ。乗らないかとしきりに誘ってくる。ここでの観光は1時間の予定だ。

上まで登るのは結構きつかった。息が切れた。火口では強烈な硫黄の臭いがする。だがいい景色だ。空はすでに晴れ上がり、青空だ。今展望台へ行ったら良く見えるかもしれないなあ。しかしあのべたべたカップル(さっき不機嫌に文句を言った人)はタフだな。休みもせずどんどん登っていた。十分に景色を眺めてから山を降り、麓のヒンドゥー寺院へ行ってみた。扉は閉まっていた。入れないのかとちょっと諦めかけたが、見ると鍵はかかっ

ていない。扉を開けてみた。すると鉄の扉なので「ガチャン！」と音がして、その音を聞いて中から男の人が出て来た。《あ、怒られる？》と思ったが、入ってもいいかと聞いてみると、インドネシア語で何やら言われた後、

「Buddha?」

と聞かれた。そうだと答えると中へ入れてくれた。おおー、良かった。思い切って開けてみるもんだ。男の人はコリアンやジャパニーズは仲間だというようなことを言ってくれた。でもここってヒンドゥーなんだよな。ブッダはヴィシュヌの化身のひとつということだから、仏教徒⁴もヒンドゥーの仲間という感覚なんだろう。でもインドでは、入れてくれないヒンドゥーの寺院ってあったよなあ。静かな雰囲気の中、彼の後ろについてYさんと一緒に奥まで行き、線香を渡されて座った。そしてその男の人は祭壇の前でお祈りをしてくれた。とても嬉しかった。

ジープで帰る途中、彼女はバナナを買った。何やら交渉していたが、男の人にもうちょっとちょうだいと言っているようだ。最後に1本もぎ取って

「Thank you!」

と言って、スッと男の前を離れた。売っていた男は《なにすんねん》という表情をしていたが、彼女のたくましさが見えて面白かった。なかなか図太くていいねー。

宿へ帰り、8:00 ごろトーストとコーヒーの朝食。コーヒーのカップの底には挽いた豆が沈んでいた。インスタントじゃなかった。しかし瀧さないのかな。それともこの辺ではこういうスタイルなのか？ 8:30 に部屋に戻り、荷物の整理。8:40 に部屋を出た。支払を済ませた後、彼女からバナナをもらった。

最後に握手。楽しかった。お元気で。バスに乗る時、先に乗っていた旅行者に

「あれ？ あなた、今発つの？ 荷物は？」

「これだけだよ。」

ヨーロッパからの旅行者と会ったときのいつものやりとりだ。旅行期間の違いもあるかもしれないが、彼らと私とでは荷物の量に相当の違いがある。「これだけ」と答えると、みんな「ほほー」という顔をした。

9:00、彼女に見送られ、バスは出発した。30分から1時間ほど走って山を降り、来る時に寄った車庫へ。そこで20人乗りの大きなバスに乗り換えた。でもこのバス、エアコン効かないぞ。11:50、昼飯。ミーゴレンがうまい。12:30 出発。もう眠ることしかない。誰も喋っていない。

13:50、現在パラパラと雨。さっき、宿にペンライトを忘れたのに気づいた。この旅は緊張感がないせいか、気が抜けてる。あれは小五の時、転校する私に池田君がくれたものだ。まさかインドネシアに置き去りになる運命だったとは…。うー、この書けないボールペンはイライラする。

バスなしでフェリーへ乗り込む。向こうへ着いてから別のバスに乗り換えるそうだ。フェ

⁴ちなみに私の家は仏教ではなく神道である。しんとう厳密には異なる宗教なのだが、私は日本においては仏教と神道はミックスされていると思っている。説明が面倒なので旅行中は大体 Buddhist で通し、Shintoist と言うことはない。落ち着いて話す時間がある場合のみ Shinto について説明することにしている。日本古来の神道の世界観は結構好きである。

リーのデッキから見える景色は、タヒチを思い出させる。ただし天気は曇り。14:50 出港。船上から見るバリ島もタヒチで見た景色にそっくり。タヒチの山の角を削ってちょっと丸みを出した感じだ。さようならジャワ、また明日。静かだ。エンジン音がうるさくない。客はたくさんいるが、現地の人の方が多く、観光客はそんなにいないようだ。出港前には現地の子供たちが船から海に飛び込んで遊んでいた。まわりにはウインドサーフィンをやっている連中もいた。

15:40、バリ島^{ギリマンヌク}Gilimanuk着。船を降りてから時計を1時間戻す。バリタイム 14:46 になった。待合室のテレビでは、何か日本のアニメをやっている。何だっけな … おお！ ガイキングだ！ 古うー。英語吹替えにインドネシア語字幕だった。

16:20、バスが来ない。バスはクタから来る客を乗せたのがここへ来て、それを使うことになっているそうだ。旅行社の彼（野村宏伸似）はジャワの人で、この遅れはバリのスタッフのせいだと言う。この人は良さそうな人なんだけどな。ジョグジャからのバスと一緒にだった客のお姉さんは、遅れていることを彼に向かって怒っている。彼と少し話した。彼のお母さんは Chinese。兄弟が1人いて、神戸、大阪あたりにいるという。

後 30 分ぐらいで来るそうだが本当か？ クタへの到着は 21:00 ごろになるようだ。まずい、もう帰りの飛行機のリコンファームができない。バスは 16:45 にやっと来た。

| | | | | | | | | | | | | | {

クタでは海岸沿いの通りへ出る予定だった。私はしばらく眠っていたのだが、起きてみるとなんだか様子がおかしい。やけに角を曲がるなあと思っていたが、同じところをぐるぐるまわっているようだ。道が入れないなどと言っていたが、どうやら単に道に迷った様子だった。

我々4人の客対3人のツアー会社の人という感じで、バスの中でけんかのようになってしまった。すっかり目が覚めてしまった。O±ceへ電話しろと言ってももう閉まっていると言うし、New Year で道が通れないならなぜそれを知らなかったんだと聞いても、わからないという答え。なんなんだコイツら。最後はこっちで道の看板やら町の人やりに情報を得て、運転手を誘導する始末。どこにも通行止めなどなかった。町中は人々がラッパを持ってブーブー吹いていて、とてもにぎやかであった。なんとか海岸沿いの通りに出て、人ごみの中、バスを降りた。腕時計を見ると、もうすぐ 23:00 だった。

バスを降りてから彼ら3人とははぐれ、私は一人でうろうろと宿探し。ポピース II という通りへ行き、適当に宿をあたる。ない。FULL、FULLの嵐。もう選んでなどいられない。見かけた宿に片っ端から入り、聞きまわる。New Year を迎えるので、観光客だけでなくジャワの人々もたくさん来ていてこんなに混んでいるのだ。日本人かと聞かれ、そうだとするととても残念そうにしてくれるところも多かったが、やっぱり部屋は空いていない。

それにしてもうるさい町だ。今日は New Year で特別だからこんなに騒いでうるさいのかな。もう何件まわったのかわからなくなった。ちょっと座って休憩し、他の通りも当たってみたがだめだ。聞き込み調査の刑事みたい。何件目かを断られた後、ジョグジャ、プロモと一緒にだった3人と道で再会した。彼らは大きな荷物を抱えて歩いていた。お互いにと

ても疲れた様子だ。彼らも泊まるどころがどこにもないと言う。宿は4人でシェアすれば安くなるから、一緒に行こうということになった。時計を見るともう1月1日になっている。気づかなかった。宿がないまま、歩きながら新年を迎えてしまったのだ。苦笑しながら、お互いに

「Happy New Year!」
と言い合った。

7.4.3 野宿 1999年1月1日(金)

とりあえずある宿のロビーで落ち着いて、これからどうするかみんなで考えた。当てにしていた、ちょっと高めこの宿もFULLだそう。別の安宿街へ行くにはもう疲れすぎている。このロビーで寝る訳にも行かない。みんなお腹が減っていたので、とりあえず食べてから考えようということになった。荷物だけはここに置いてもらえるそうなので、荷物を預けてみんなで飯を食いにいくことにした。

だが、レストランは軒並み閉店。そして開いているところも凄まじく混んでいる。尋常じゃない行列だ。仕方ない、屋台に行くか。海岸の通りに並んでいる屋台を眺めて歩いた。あんまりうまそうなのがないな。歩いているうちにいつの間にかまた一人になっていた。チキンと玉子が載ったご飯があったので、頼んでみた。一皿できあがった後、受け取っていくらだと聞くと、Rp20,000とか抜かしやがる！なにー！しまったと思った。うっかり、注文する前に値段を聞くのを忘れていた。しかし高すぎる。ちょっと上乘せしたというレベルの値段ではない。桁が違う。値段を言ったときのこいつの表情からしても、ボッタくろうとしているのがわかる。近くにすわっていた人に、

「こいつはこれがRp20,000だと言ってるんだけど、信じられん。おかしい。高いと思わんか？」

と聞いてみた。聞かれた兄ちゃんは困った顔をして、

「すまない。わからない。」

と答えた。ええー？高いはずだ！おい！一言「高い、おかしい」と言ってくれ。やっかいな事に巻き込まれたくないから知らないふりをしてるのかな。ええい、仕方ない。私は奴に

「悪いけどこれキャンセル。」

と言い放ってとっととその屋台を離れた。後ろから

「ヘイ！待って！OK、OK...」

と奴の声が聞こえたが、そんなのもう食う気がしない。振り返らないでその場を去った。

さて、どうしよう。バスで一緒だった男の人が屋台の前で座っていたので、自分も合流した。焼きそばの屋台だ。あんまりうまそうではなかったが、まあいいかと思って注文した。今度は値段を確かめて。となりのジュースの屋台でSpriteを1本買おうとすると、Rp5,000だと言う。またボッタくりだ。高いよと言うと、

「日本人か？日本人はフレンドだ。」

と急に笑顔になって、Rp2,000になった。それでもまだ高いんだけど…まあ今までより

大したことないからいいや。しかし、ここでは全ての屋台がボッタクロうとしてくる。大観光地なのは良くわかるが、とても感じが悪い。

焼そば屋台の兄ちゃんと話している彼の横に私も座った。屋台の兄ちゃんをよくしゃべる。声がうるさい。ちょっと黙っとれコラ。しばらくするとさっきまで一緒だった2人の女性も合流して、そこへ座り込んだ。

粗末な夕食を食べつつ、女性の1人が

「そう言えば、あなたの名前聞いてなかったわね。」

と言ってきた。そう言えばそうだ。そして、そこで初めて落ち着いてお互いに自己紹介をした。男の人はフィリップ。ベルギーから来ていて、エアラインカンパニーに勤めているそうだ。この後は中国に行くという。2人の女性はクレア、キャシティ。2人ともイギリス人。この3人は一緒に旅に出た訳ではなく、途中で会って行動を共にしているだけだそう。フィリップと私はビールを飲んだ。4人で

「Happy New Year!」

とピンを鳴らした。なにか苦勞を共にした仲間という感じだったので、打ち解けることができた。

食べ終わった後は屋台を離れ、フィリップと2人で地べたに座ってビールを飲みながら旅話をした。彼はスラウェシ島にも行ったそう。独特の風習のあるところで、とても面白いそう。行って見たいなあ。それから、カンボジアのアンコールにも行ったことがあるそう。アンコールのあるシェムリアップは東南アジアで最高の場所だ！と意見が一致したりもした。今日は寝ないで、この海岸で1晩明かそう。しかし、うるさいし、酔っ払いが多いな。

しばらくすると、ある酔っ払いがフィリップに声をかけてきた。奴は私たちの前に座り込み、いい店があるとか、女はどうだとか言いはじめた。やばい。こいつ、目がイってる…。フィリップは相手を刺激しないように、奴が言うことを軽く受け流していた。ちょっとでも怒らせたら大変なことになりそう。奴は完全に酔っ払っている。もしかしたら何かクスリをやってるかもしれない。私はこの危険な雰囲気居たたまれなくなってしまった。なんとかこの状況を脱しようと思ひ、ある花火が打ちあがった瞬間に、スッと立ち上がった。いかにも花火に興味があるそぶり、ちょうど奴と向かい合ってるのと反対方向になる花火の方を見た。そのとき奴が

「おい、どこ行くんだあ。」

と言ったのでちょっとドキっとしたが、何も起こらなかった。良かった。フィリップが、どうした？ という感じで立ち上がって私と同じ方を見た。しばらくすると、奴は何も言わずに立ち上がってフラフラとどこかへ行ってしまった。ふうー。

フィリップが、

「ここはヤバイな。荷物のある宿に戻ろう。」

と言ったので、ここで1晩明かすのはやめて戻ることにした。

結局、外で寝る場所を探して4人で寝ようということになった。私は寝袋を持っていないので、フィリップが敷くものを貸してくれた。2人の女性が準備している間に彼と話をした。

「日本というのは俺たちヨーロッパの人間にとってとても興味のある国なんだ。日本はとも変わった文化⁵を持っている。柔道、空手、それから、あの計算機…なんて言ったっけ。」

「そろばん？」

「そうそう、そろばん。」

「柔道は高校の授業でやったことあるよ。あんまり強くなかったけどね。」

「そろばん使える？ あれはどうやって計算するんだ？」

「そろばんは最近の日本人は使わなくなってるよ。」

「電卓？」

「そう。今は電卓。そろばんは今は学校でも教えないしね。私もそろばんはできないよ。」

「あれはどうやって計算するのかわかる？」

「そろばんはビーズが並んでいて、一列のうち一番上は5で、その下の4つはそれぞれ1を表してるんだ。そろばんを使う人は、実際にそろばんが無くても頭の中にそろばんのイメージを持っていて、暗算できるんだよ。」

「ふーん、頭の中でビーズを動かす訳か。」

「そうそう。」

彼は1度だけ日本に行ったことがあるそうだ。全てがとても高かったと言っていた。そうだろうなあ。多分東京ってのは世界で物価が一番高い都市なんじゃないか？ それに、成田空港にある店の値段ってさらに高いからびっくりしたでしょ。

そんな話をしているうちに後の2人が来たので、4人で寝る場所へ歩いた。さっき宿探しをしている時に寝られそうなところを見つけていたらしい。旅慣れてるなあ。道は雨で濡れている。ある道の角のところに、下がコンクリートで、屋根のあるところがあった。柱は、例の政党の赤と黒の模様に塗られている。屋根の下には何も無い。選挙のキャンペーンなどで使う場所かな。ジヨグジャにあったヤグラと同じようなものだろう。3人はここをキオスクと呼んでいた。そのキオスクに4人で並んで横になった。

「今日は大変だったね。」

「New Year をこんなところで迎えるなんてなあ。」

「New Year にこんなところで寝るなんて最低だわ。」

「あー、来年はきちんとした服を着てシャンペンのある New Year を迎えたいわ。」

「暖かいベッドもね。」

「そうだね、あははは。」

みんな最悪というようなことを口走っているが、私は内心ちょっと楽しかった。野宿するなんて初めての体験だったからだ。それに1人じゃないから安心だ。苦勞を共にすると、仲良くなれる。

すこし雨が降っている。バイクがけたたましい音を立てて目の前を通りすぎる。猫もうるさい。横になってそれほどたたなうちに、あるバイクの集団が「なんだ、あいつら」と

⁵彼はここで「strange」という単語を使ったが、すぐに言い直した。strangeと言われたことよりも、言い直したことがちょっと気になった。別に腹が立った訳ではないが、strangeというのが本音なのだろう。ヨーロッパから見ると、日本文化は相当奇妙に映るんだろうなあ。

いう感じでこっちに近づいてきた。キオスクの前にバイクを止め、すぐ側に来て座った。
「ここで寝るのか？」

もう半分眠っていたので、ほとんど話をする事もなかった。だが彼らはしばらくそこに居てしゃべっていた。さっきとちがって全然危険な奴らではない。でもうるさい。用もないのにこんな近くに座ってしゃべんなよ。クレアさんが咳払いをした。するとごめんごめんと言い、しばらくして去ってくれた。しかしそれからもしょっちゅう別のバイクが通り過ぎる。猫もうるさい。シーツと言って追い払ったりした。

バリ島では伝統芸能を楽しんだり、ビーチで寝転がって日焼けでもしようと思っていたが、結局そんなことは全然できなかった。「バリ島で年を越した」などと言うととても優雅に聞こえるが、その言葉の印象とはえらく違う現実であった。

| | | | | | | | | | | | | | {

結局ほとんど眠れなかった。5:50に起き、6時に荷物を取りに4人で宿へ向かった。

荷物を担ぎ、とりあえず4人でカフェへ。あまり食べる気はしなかったので私はコーヒーだけ注文した。今日もまた雨だ。「ビーチで日焼け」どころではない。雨宿りも兼ねて、しばらく彼らと話をした。プロモで一緒だったYさんと私はカップルだと思われていたようだ。だからプロモからここへ来るバスに乗るときに、私に今幾つのかと聞いたのだそうだ。ジョグジャからのバスでも、2人で彼らの前に座ってずっとしゃべってたからなあ。Yさんは結婚してるというと、クレアさんから

「じゃあ、彼女は何で1人で旅行してるの？」
と言われた。結婚してる女性が一人旅っていうのはやっぱり不思議なのかなあ。クレアさんは何やらポストカードを書いていて、マイ・スイートハートにどうたらこうたら…と話していた。相手はいるらしい。内心、《じゃあ、あなたたちはどうなの？》と思ったが、聞くのは止めといた。

彼女たち2人はバリ島の別の場所へ行ってみるそうだ。私とフィリップはデンパサールへ行き、ジャワへ戻ることにした。私は帰らなければならないからなのだが、フィリップはなんでもう帰るの？ここがよっぽど面白くないところに思えたのかな。

「Have a nice trip!」

彼女たちと別れ、8:30、フィリップとベモコーナーへ。すぐ見つけられた。待たずに乗れてよかった。料金は2000ルピア。デンパサールのベモ・ステーションに着いてから、彼は先にバスターミナルのあるウブンへ。私はバリ博物館へ行ってみようと思い、博物館まで歩いた。

途中、商店街などをみてまわった。閉まっている店が多いのだが、ちょっと裏へ入ると、きれいな布を売っている店がずらーっと並んでいる通りなどがあった。途中でテレホンカードを買ってSQへ電話。かかったと思ったら、テープの音声だ。早口のインドネシア語の後、早口の英語。電話番号のような数字を言われ、電話は切れた。さっぱりわからない。何度かかけなおして同じ音声を聞いたが、よくわからなかった。多分今日は休みですというようなことを言っているのだろう。言われた電話番号をメモしてかけてみたが、全然からなかったの、あきらめた。

博物館は閉まっていた。がっかりだ。元旦だからか。でも観光客のために開けといて欲しかったなあ。展示は見られないが、敷地内へ入ることはできた。そこで面白い兄ちゃん登場。いい奴だった。日本語がうまいが、博物館の人ではないそう。座り込んでしばらく話をして時間をつぶした。彼の知り合いらしいおみやげ売りの兄ちゃんも横に座って、笛を吹いてくれたりした。別にお金を要求されることもなく、楽しい時間を過ごした。

博物館を後にし、歩いて再びベモ乗り場へ。そこで昼飯にした。まずいー。え、これがナシチャンプル？ うそ。ご飯の上にサテが載っていて具はちょこっとだけ。でもご飯は多めだ。

飯の後しばらくしてからベモに乗り、ウブン・バスターミナルへ。12人も乗った。料金は1,000ルピアだ。安い。早く着きすぎたな。2時間ぐらい暇だぞ。ぼけーっとする。またバスの来るのが遅い。15:10ごろやっと来た。乗るとチケットのチェックをされたが、私の名前が名簿にないようだ。まったくどうなってんだよ。これ、ジョグジャで買ったチケットだから、連絡行ってないのかな。結局、チケットの再発行みたいなことをされた。金は取られなかったが、新しいチケットを渡された。

前の席に小さい女の子3人。そのうちの1人は私の隣の女の子(若いけどお母さん?)の子供のようだ。目を閉じて寝ていたら、バスはいつの間にか出発していた。パンと水を渡されて起きた。バリからジャワへ渡った後は、時計を1時間前に戻す。夜になり、22:30ごろ夕食。セルフサービスのご飯だ。自分で好きなだけよそった。TEA付き。結構うまかった。

しかし、私はバリに何をしに行ったんだろう。ほとんど何もしていない。

7.5 長い帰り道

7.5.1 さようならジョグジャ 1999年1月2日(土)

8:00ごろジョグジャのバスターミナルに到着。8:20ごろ Prastha Jaya に帰ってきた。懐かしの我が家という感じだ。今度はルーム10。宿には他に誰も客がいないみたいで、静かだ。さっそくシャワーを浴びる。気持ちいいー。そして、その後はしばらくベッドで眠った。もう出発までただ眠るだけだ。

午後までたっぷり眠って、15:50に宿を出た。車までは彼が見送りについて来てくれた。

彼と固い握手を交わし、

「Selamat tinggal.」(さようなら)

物足りなく思っていたこの旅の中で、輝いている部分があるとしたら、彼との出会いをおいて他にはない。元気でな。本当に世話になった。そして車は出発した。さようならジョグジャ。

車はいくつかの宿に寄り、何人が客を乗せていく。みんなジャカルタへ行くのだろう。しかし外国人旅行者らしいのは私だけだ。しかし寒いー。これは修行か？ サービスのつもりだろうが、冷風直球ストライクゾーンだ。おかしいんじゃないの？ 調節ということに価値を見出さないらしい。冷房MAXである。おっさん、飛ばす飛ばす。追い越す追い越す。

20:20に休憩。21:05、出発しようとしたら右うしろがパンク。おっさんは取替えにかかった。そして21:20発。21:30停まる。パンク修理するおっさん。なんだ、どうなってんの？

7.5.2 ちょっとだけ市内観光 1999年1月3日(日)

4:00休憩。7:00ごろジャカルタに着いたようだ。車は、客をそれぞれの望みのところで降ろしてまわった。各家をまわり、最後に私だけが残った。私が言う前に運転手の方から、「ジャラン・ジャクサ？」

と聞いてくれたので、そうだと答えた。8:10にジャクサ通りに到着。Bloen Steen Hostelに入る看板のあるところで降ろしてもらった。運転手さん、お疲れ様。宿の兄ちゃんに、ここに忘れた寮の鍵のことを聞いてみた。私が泊まっていた部屋には何もなかったと言う。客の忘れ物もいくつか見せてくれたが、私の鍵はなかった。ここに忘れたんじゃないのか。完全に無くしてしまったようだ。まあいいや。兄ちゃんに、今日もここへ泊まることを告げた。

シャワーを浴びてしばらく眠った後、ジャカルタの町をぶらぶらしようと思って外へ出た。近くで飯を食った後、独立記念塔へ。行列に並び、ぎゅうぎゅう詰めのエレベータで上へ上がった。展望台からジャカルタの町を見渡す。天気は曇りだ。都会なのだが、あまり活気がないような印象を受ける。日曜日だからかな。展望台では、うるさい子供が走り回っていた。

塔を降りてからはサリナデパートへ向かって歩いた。途中、装甲車や軍用トラックが停まっているのをいくつか見かけた。でも特にピリピリした様子はなく、軍人さんはのんびりムードだった。サリナデパートでは、TシャツとインドネシアのCDを買った。どれもちょっと高めだが、品揃えが豊富なのでおみやげをそろえるにはいい場所だ。

ジャクサ通りへの帰り道、一人の男性に話しかけられた。しばらく横に並んで話しながら歩いた。私がジャクサ通りの宿に泊まっていると言うと、彼はジャクサは蚊が多いし、売春女がいるから嫌いだと言っていた。売春はともかく、蚊が多いとしたらジャカルタ全体が多いんじゃないの？ ジャクサだけ蚊が多いって訳じゃないと思うけどなあ。

宿へ戻ってからは、しばらくベッドで横になった。何の感慨もない。名残り惜しくない。曇りの日が多かったので、今回の旅行中「暑い」という言葉は口にしていないと思う。印象が薄い。

ガンビル駅前からダムリのバスに乗り、17:10ごろ空港へ着いた。チェックイン手続きはまだ始まっていない。チェックインカウンタの兄ちゃんは日本語ができた。変なの。初めてだ。空港税が

「ゴマン(5万) ルピア。」

と日本語で言われた。結局リコンファームしてなかったけど、席があってよかった。空港にあると思っていた Post Office がない。松平に書いたポストカードは出せずじまいだ。持って帰って渡してもあんまり意味ないよなあ。まあしょうがないか。職場へのお土産にコーヒーと紅茶を買った。

何の気分の盛り上がりもなく、飛行機はジャカルタを飛び立った。SQの機体はA310だ。

さすがに液晶パネルはない。隣りにモスリムの女性。しばらくすると飯が運ばれてきて、ワインを注いでもらう。やっぱりうまいねー。飯は今回初めてビーフにしてみた。いける。そういえば、こんな肉食ったの久しぶり。20:50、飯の後、上下の揺れ。そして21:30(現地22:30)、飛行機はシンガポールのチャンギ空港に到着した。

7.5.3 帰国 1999年1月4日(月)

次はBOEING777 JUBILEE。1:15発。7:30福岡空港着。降りるのは外だった。タラップに出ると、さむーい。税関出たら8:00だった。

あっさり終わった。思い返してみると、今回の旅で観光の部分はプロモ山で終わっていたことになる。プロモ山の後はひたすら移動するだけだった。トータルで考えても、この旅行期間の約半分は移動時間に費やしてしまったわけだ。何と言っても、デンパサールからの飛行機がとれなかったのが敗因である。最後の移動だけの2日間は、本当に何の感慨もなかった。ベトナム鉄道のような楽しさもなく、ただバスに乗って移動しているだけだった。限られた旅行期間の中で、これは非常にもったいない。まさに失敗である。

それにこの旅は印象が薄い。移動時間が多かったせいもあるだろうが、それだけではないような気がする。旅の間、ずっと物足りない気分が私につきまとった。なぜだろう。強烈な印象を残すものは何もなく、淡々と過ぎた日々。何かが欠けている。インドネシアに対する自分なりのイメージが出来上がっていない。今までのように、旅した国をガッチリと心で捕らえた感じがしないのだ。私のせいなのかインドネシアのせいなのかはわからないが、私は物足りなさを抱えたまま帰国してしまった。つまらなかった訳ではない。だが自分がこの旅に満足していないのは事実だ。

それでも、インドネシアは広い国だ。今回見た土地とは異なる文化を持つところがたくさんあるだろう。また行ってみなければならぬと思う。今度はスラウェシ島あたりに。

明日から会社だ。短い休みだったな。この物足りない思いの中でも、インドネシアの中で心に残る土地はあった。今私の頭には、ぼんやりとジョグジャの街角が思い浮かんでいる。